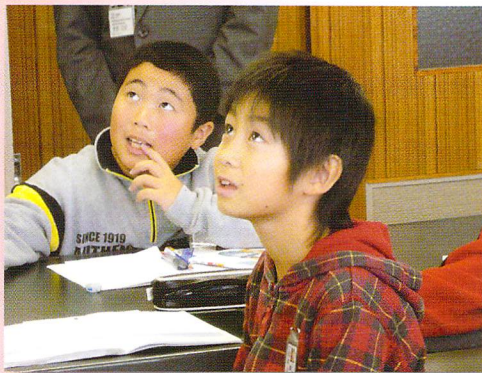


2010

Vol.98

教育研究 岩手

KYOIKU KENKYU IWATE



特集 岩手が取り組む学力向上

●論説

岩手県教育委員会
教育次長兼学校教育室長
佐々木 修一

教育随想

盛岡つなぎ温泉四季亭
専務取締役 林 晶子

●解説

盛岡市立飯岡小学校長
佐々木 篤

北上市立和賀東中学校長
川村 庸子

矢巾町立矢巾中学校長
畠山 秀一郎

The General Education Center of Iwate



岩手県立総合教育センター



岩手県立宮古恵風支援学校

学校紹介

本校は、昭和54年に宮古市立はまゆり養護学校として開校しました。その後、平成12年に県立移管に伴い、同校が閉校し、岩手県立宮古養護学校として開校しました。さらに、平成21年に岩手県立宮古恵風支援学校に校名を変更し、現在に至っています。

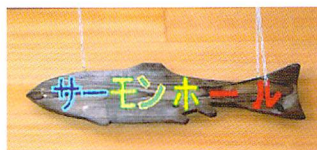
本校の教育目標は、「児童生徒一人ひとりの可能性を伸ばし、明るく、強く、心豊かに生きる人間を育てる。」です。校舎は、宮古市崎山の小高い丘の上にあり、隣接して「はまゆり学園」や「学童の家」があります。小学部では、いろいろな活動や遊びを通して、一人一人が意欲的に学習を行っています。中学部では、基礎的な学力を身につけるとともに、生きる力を育てる学習を行っています。高等部では、一人一人の特性や進路希望に応じ、卒業後の豊かな生活の実現を目指して、学習活動を行っています。



小・中学部と高等部校舎



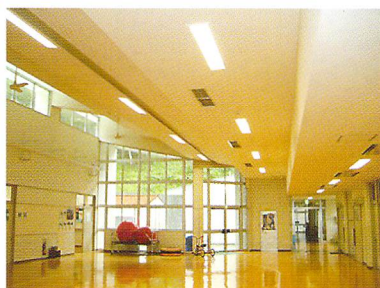
サーモンホール（多目的ホール）



案内プレート



校舎及び周辺



ブレイルーム



校長
石川 幸 男



小・中学部昇降口



図書室



高等部校舎階段



高等部昇降口



夢に向かって

盛岡つなぎ温泉四季亭

専務取締役 林 晶子

毎年春に高校卒業したての新入社員がやって来る。必ず、彼女たちにたずねる事がある。それは「夢」。子供の頃になりたかった職業や、いつかあの人のようになりたいと憧れている人物など、誰もが自分なりの夢を持って追いかけて生きていると思うから。しかし、残念ながら眼を輝かせて自分の夢を語る子には、なかなか巡り会わない。

私の夢のきっかけは、「東京オリンピック」。世界には沢山の国があり、様々な人種や文化が存在することを知った。そして、「いつか外国に行きたい。外国と関係がある仕事がしたい。」と思うようになった。それが私の夢の始まり。

高校を出て英語学校に通い、卒業後、アジアの国々の生産性向上の為に設立された国際機関に就職した。私の夢の第一歩。しかし、英語は下手、仕事は出来ない。自分の能力の低さを思い知る毎日だった。その内に研修生や講師として来日する外国の方々と接しながら、少しずつ働く楽しさを知るようになった。

2年後、23歳の夏、シアトル郊外の小さな大学に入学する為にアメリカへ。心躍らせながら夢の階段を登って行った。日本人留学生が珍しいこともあり、誕生会やクリスマス等の行事にアメリカ人家庭によく招かれた。家によって誕生日のお祝いの仕方も、クリスマスツリーの飾り付けも違う。ケーキやパイやメインディッシュにも個性があり、その家々のおもてなしの心を肌で感じる幸福な時間を過ごした。

またたく間に歳月が流れ、シアトルを離れる日、友人たちの別れの言葉は、「君は今までに会った日本人の中で一番日本人らしくない。きっとアメリカで生きて行くのが君の幸せだから必ずまた戻って来なさい。」だった。思いっきり後ろ髪を引かれながら飛行機に乗り込んだ。

夢に向かって突っ走った20代。あっちこっちで迷惑をかけながら、多くの人に助けられて生きてきた。穴があったら入りたいと思うような失敗を数え挙げたらキリが無い。しかし、いつか穴から這い出して何事も無かったようにまた前を向いて歩き始めていた。怖いもの知らずの若さの成せる業。あの当時学んだ事や体験したことは、私の体の中で血となり肉となって、今でも私を励まし動かし続けてくれている。

だから、新入社員にも夢を持ち夢に向かって生きてほしいと思うのだ。縁あって私共に就職したのだから、まず、数年は辛抱して働いてほしい。その間に学ぶことは数知れず。我慢も、出会いの楽しさも、自分の自由になるお金を持つ喜びも。それら物心両面の蓄えを元手に次なる挑戦を試みたらどうだろう。例え途中で夢破れても、中断せざるを得なくても、それまでの労力は決して無駄では無く、必ず強さ、優しさ、次へのエネルギーとなってその人を後押ししてくれるはずだ。

彼女たちがいつか年を重ねた時に、充実感と共に人生を振り返る事が出来るよう願いながら、これからも新入社員と「夢」を語り合いたい。

教育随想 夢に向かって

盛岡つなぎ温泉四季亭専務取締役 林 晶子 …… 1

刊行に寄せて 真の学力向上を目指して

岩手県立総合教育センター所長 藤原忠雄 …… 4

特集 岩手が取り組む学力向上

◆論説◆

本県児童生徒の学力の実態と授業改善の方策ー学力に関する諸調査の結果に基づいてー

岩手県教育委員会事務局教育次長兼学校教育室長 佐々木 修一 …… 6

◆解説◆

確かな学びを育てるー授業と家庭学習の連動ー

盛岡市立飯岡小学校長 佐々木 篤 ……12

学力の向上を目指した家庭学習指導の工夫・改善

北上市立和賀東中学校長 川村 庸子 ……16

ワークショップ型授業研究会導入で全員参加の校内研究へ

矢巾町立矢巾中学校長 畠山 秀一郎 ……20

◆提言◆

「読む力」が育てる「学ぶ力」

フリーライター・編集者 内澤 稲子 ……22

◆レポート◆

本県の家庭学習実施状況に関する調査報告

盛岡市立都南東小学校教諭（平成21年度長期研修生） 大坂 越郎

花巻市立湯口中学校教諭（平成21年度長期研修生） 三木 久和 ……24

宅習（家庭学習）に取り組む生徒とその背景ー宮崎市立宮崎西中学校視察報告ー

総合教育センター ……28

「三高改革」の中での校内研修

岩手県立盛岡第三高等学校指導教諭 鈴木 徹 ……32

講演記録

平成21年度第53回岩手県教育研究発表会「実践発表（生徒を育む）」

■花巻東高等学校硬式野球部の指導を通して 花巻東高等学校教諭 佐々木 洋 ……36

■不来方高等学校音楽部の指導を通して 岩手県立不来方高等学校教頭 村松 玲子 ……38

■雫石高等学校保健委員会の指導を通して 岩手県立雫石高等学校養護教諭 折館美由紀 ……40

研究・実践交流

《研究報告》

中学校国語科・数学科・英語科における学力向上を図るための研究
ー「いわてスタンダード」から「Gチャレンジ」までの取り組みについてー

岩手県立総合教育センター研修指導主事
奥田 昌夫 42

《指導実践》

自らの思いや考えを表現できる子どもの育成をめざして
ー国語科の説明的な文章における指導の工夫を通してー

西和賀町立越中畑小学校教諭
岩下 恵子 48

《実践交流》

岩手県の幼児教育の充実を目指して
ー第57回全国国公立幼稚園教育研究協議会岩手大会報告ー

岩手国公立幼稚園研究協議会研究部会部長
菅原 良子 54

《教材開発のポイント》

生活単元学習における学習材開発

矢巾町立矢巾北中学校教諭
佐々木 弥生 58

センターからの発信

◇◇研究の紹介◇◇

「岩手教育情報交流ネット」の構築と運用について -ICTに吹きはじめた新しい風-

岩手県立総合教育センター主任研修指導主事 鈴木利典 ……64

知識・技能の活用を図ることをねらいとした問題の作成

岩手県立総合教育センター研修指導主事 高屋敷 一 博 ……68

中学校理科年間指導計画「いわてモデルプラン」に基づいた観察・実験の指導資料の作成

岩手県立総合教育センター研修指導主事 高橋 一 成 ……72

◇◇教師のためのワンポイントアドバイス◇◇

《学級経営Q & A》

あきらめず、寄り添い続けること

岩手県立総合教育センター研修指導主事 吉田 竜二郎 ……76

《教科指導Q & A》

高校国語科における言語活動の充実について

岩手県立総合教育センター研修指導主事 熊谷 和 浩 ……78

学力向上のために(中学校数学) -すぐに利用できる資料・教材の活用を-

岩手県立総合教育センター研修指導主事 安部 広 一 ……80

《領域指導Q & A》

子どもたちの自主性や自発性を養う学級活動

岩手県立総合教育センター研修指導主事 佐々木 真 ……82

《教育相談Q & A》

保健室で教育相談をする際に心がけたいこと

岩手県立総合教育センター研修指導主事 古川 制 子 ……84

特定の場面で話すことができない選択性緘黙(場面緘黙)の症状がある児童生徒の指導・支援

岩手県立総合教育センター研修指導主事 梅野 展 和 ……86

編集後記

カメラレポート

岩手県立宮古恵風支援学校 表紙裏・裏表紙裏

■表紙題字 前盛岡市教育委員会委員長
故 國井 達夫 氏

■目次写真 盛岡市立太田幼稚園
■表紙写真 一関市立狐禅寺幼稚園
花巻市立太田小学校
軽米町立軽米中学校

※掲載写真は、特集内容等に直接関係ありません。



教育随想 林 晶 子 (はやし あきこ) ～プロフィール～

盛岡つなぎ温泉四季亭 専務取締役
1952年、盛岡市に生まれる。
東京Y M C A 英語学校卒業。

東京でのOL、アメリカ・シアトルでの生活を経て、
1988年つなぎ温泉・四季亭開業。
盛岡商工会議所女性会会長。



真の学力向上を目指して

岩手県立総合教育センター
所長 藤原 忠 雄

今年度は、新学習指導要領の移行期間の2年目にあたり、小学校は平成23年度、中学校は平成24年度からの本実施に向けて、各学校では準備を進めていることと思います。また、新高等学校学習指導要領は、平成25年度入学生から年次進行で実施される予定ですが、平成22年度から一部内容が先行実施されております。この新学習指導要領には、これまでの理念である生きる力を育むことが継承されつつ、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に定着させるとともに、それらを活用した課題解決に必要な思考力、判断力、表現力や学ぶ意欲などを育むこと等が示されています。

また、岩手県では、「いわて希望創造プラン」をベースに、児童生徒の「知・徳・体」をバランス良く育み、将来、社会人としてたくましく生きていくことができる総合的な人間力を育成するという教育目標の実現に向け、さまざま取り組んでいるところであります。

そうした中で、岩手県の教育における最重要課題は、「児童生徒の学力向上」です。その課題解決を図るため、去る平成22年2月17日、18日の2日間、平成21年度岩手県教育研究発表会が開催されました。2日間で約1800人も参加をいただき、多くの反響を呼ぶことができたと考えております。

この研究発表会では、例年行っていた講演会に代え、多くの学校関係者に集まっていただき、これからの岩手の教育をじっくりと考える場として、「全体会」を設定いたしました。校種を越え、岩手の教育の現状を共有しながら、最重要課題の「学力向上」を図るため、共に手を携えて取り組むこと、教育行政機関と学校がそれぞれ重視して取り組むことを、午前・午後を通して考えていきました。

第1日午前は、学校教育室の佐々木教育次長兼学校教育室長より、各種調査結果をもとに、児童生徒の学習の定着状況や家庭学習などの実態を提示し、その対策の基本的な考え方の説明がありました。また、国立教育政策研究所の千々布敏弥総括研究官から、本県の実態をふまえた、教育行政機関や学校が学力向上に取り組むにあたっての視点をお話いただきました。

また午後には、校内研修と家庭学習に焦点を当て、全国の先進的な事例やさまざまな立場の教育関係者によるシンポジウムを行いながら、学力向上を図るこれからの岩手の教育の在り方について、参加者の皆さんと共に考える機会にいたしました。

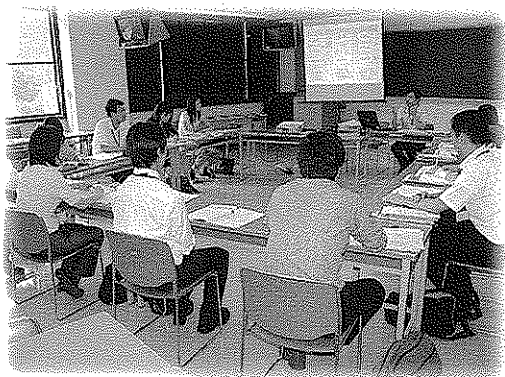
さらに、その後、生徒との信頼関係を築きながら、生徒の心技体の向上に優れた実績をあげられている3人の県内高等学校の指導者を招き、日頃の指導実践について発表していただきました。3人の先生方の熱い思いのこもった講演に、会場中が感動の渦に巻き込まれました。

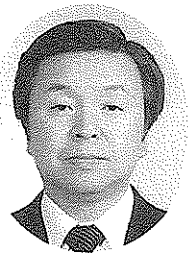
平成22年度の岩手県教育研究発表会も、岩手の真の学力向上を目指して、さらに趣向を凝らし、平成23年2月に開催する予定となっております。

さて、今回、特集テーマに掲げました「岩手が取り組む学力向上」は、昨年度の発表会の様子を記録に残し、その成果を改めて考察することが重要であると考え、設定いたしました。特集をはじめとする本号の内容につきまして、各学校及び教職員の教育実践・指導のさらなる充実に生かしていただければ幸いです。

特集

岩手が取り組む学力向上





本県児童生徒の学力の実態と授業改善の方策 — 学力に関する諸調査の結果に基づいて —

岩手県教育委員会事務局

教育次長兼学校教育室長 佐々木 修 一

1 はじめに

子供たちの自己実現のために育成すべき諸能力の中でも、学力は、特に重要な要素である。学力向上は、県政の重要課題の一つであるが、本県児童生徒の学力の実態は、長い間、十分な把握ができないまま推移してきた。

しかし、平成15年度以降、「岩手県学習定着度状況調査」、「4県統一学力テスト（岩手、宮城、和歌山、福岡）」、「全国学力・学習状況調査」等大規模な調査が実施され、本県児童生徒の学力の実態等に関する信頼性の高い資料が得られるようになった。

学校教育室では、平成19年度から行われている「全国学力・学習状況調査」をはじめ、「岩手県学習定着度状況調査」、「公立高等学校入学者選抜検査」、「大学入試センター試験」など本県児童生徒の学力や学習に対する意識等に係る諸調査の分析を継続して行い、その結果を平成21年2月に公表した。さらには、平成22年2月に開催された「平成21年度岩手県教育研究発表会」において、これら学力に関する諸調査の結果及び授業改善に向けた方策等について報告し、学力向上に向けた具体的な取り組みの推進を改めて訴えたところである。

本稿では、「平成21年度岩手県教育研究発表会」の内容に加え、平成22年度前半の取組状況等について報告する。

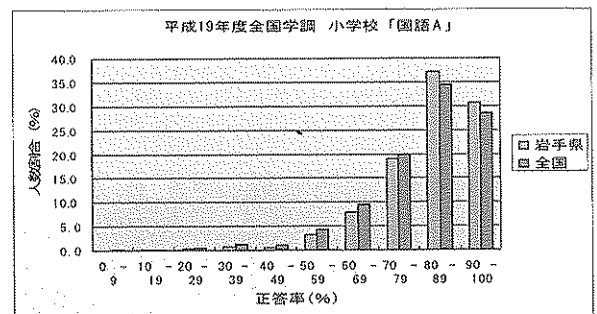
2 全国学力・学習状況調査の結果

(1) 小学校6年生及び中学校3年生「国語」
国語A（知識）については、小中学校とも平

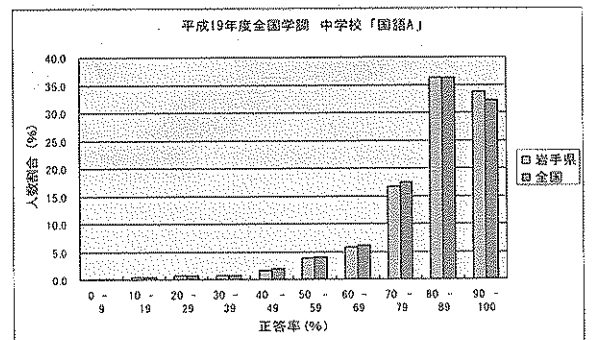
均正答率及び上位層の人数割合が全国平均を上回っており、概ね良好な成績であると言える。資料には示していないが、国語B（活用）は、国語Aに比べて正答率のばらつきの度合いが大きい。また、中学校では平成20年度、21年度に全国平均を若干下回った。

【表1】全国学力・学習状況調査「国語」平均正答率

		岩手 H19	全国 H19	岩手 H20	全国 H20	岩手 H21	全国 H21
小 6	国語A	83.9%	81.7%	67.8%	65.6%	71.2%	70.1%
	国語B	66.0%	63.0%	53.3%	50.7%	53.0%	50.7%
中 3	国語A	82.7%	82.2%	74.3%	74.1%	78.2%	77.4%
	国語B	73.0%	72.0%	60.6%	61.5%	74.2%	75.0%



【図1】全国学力・学習状況調査正答率度数分布（小6国語A）



【図2】全国学力・学習状況調査正答率度数分布（中3国語A）

(2) 小学校6年生「算数」

算数の結果は概ね良好である。平成19年度の算数Aについて、全体を3つの成績階層に分け

た場合、各階層の成績は、ほぼ全国水準か、やや上回っている。ただし、中位層 (G II)、下位層 (G III) では、「二桁の数×一桁または二桁の数の計算」「四則計算」「小数と分数の大小比較」「百分率の意味の理解」で上位層 (G I) の正答率と大きな開きがある。また、算数Aと算数Bの間には強い相関関係が認められる。

【表2】全国学力・学習状況調査平均正答率(算数A・B)

	岩手 H19	全国 H19	岩手 H20	全国 H20	岩手 H21	全国 H21
算数A	83.7%	82.1%	73.9%	72.3%	80.0%	78.8%
算数B	63.6%	63.6%	51.8%	51.8%	55.3%	55.0%

【表3】H19全国学力・学習状況調査「算数A」正答率度数分布表 (岩手県) (全国)

算数A	人数(人)	割合(%)	区分	算数A	人数(人)	割合(%)	区分
90 - 100	4,700	37.8	G I 37.8%	90 - 100	431,986	37.9	G I 37.9%
80 - 89	3,439	27.5	G II 43.5%	80 - 89	285,121	25.1	G II 40.2%
70 - 79	2,602	16.0		70 - 79	172,327	15.1	
60 - 69	1,096	8.8	G III 18.8%	60 - 69	105,895	9.3	G III 21.9%
50 - 59	696	5.5		50 - 59	64,492	5.7	
40 - 49	313	2.5		40 - 49	38,259	3.4	
30 - 39	149	1.2	G III 18.8%	30 - 39	21,877	1.9	G III 21.9%
20 - 29	66	0.5		20 - 29	11,321	1.0	
10 - 19	31	0.2		10 - 19	4,975	0.4	
0 - 9	7	0.1		0 - 9	2,239	0.2	
合計	12,489	99.9		合計	1,139,492	100.0	

(3) 中学校3年生「数学」

数学A及び数学Bの平均正答率は、ともに全国平均を下回っている。平成19年度の数学Aについて、全体を3つの成績階層に分けた場合、上位層 (G I) の割合は全国平均より9ポイント下回っており、特に正答率90%以上の最上位層の割合は全国平均を8.2ポイント下回っている。逆に、下位層 (G III) の割合は全国平均を3.5ポイント上回っている。中位層 (G II) 及び下位層 (G III) では、小学校及び中学校1年生で学習する基礎・基本事項でのつまずきが見られる。特に、「四則計算」「文字式」「比例・反比例 (割合、百分率を含む) とそのグラフ」で上位層 (G I) の正答率と大きな開きがある。

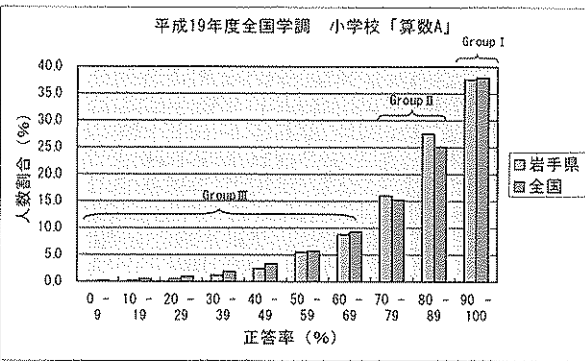
また、数学Aと数学Bの間にも強い相関関係が認められる。基礎・基本の定着が不十分なまま「活用」の指導に走らないよう、留意する必要がある。

【表4】全国学力・学習状況調査「数学」平均正答率

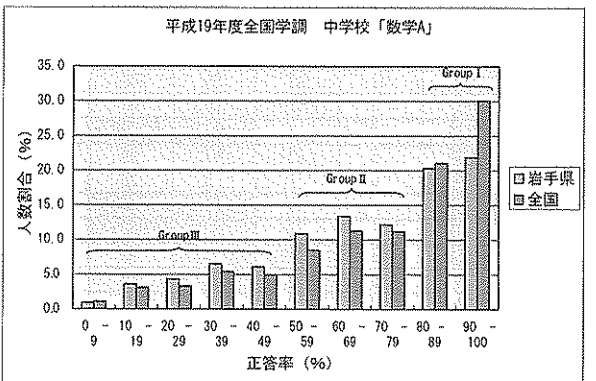
	岩手 H19	全国 H19	岩手 H20	全国 H20	岩手 H21	全国 H21
数学A	68.6%	72.8%	58.1%	63.9%	57.9%	63.4%
数学B	58.2%	61.2%	45.8%	50.0%	53.0%	57.6%

【表5】H19全国学力・学習状況調査「数学A」正答率度数分布表 (岩手県) (全国)

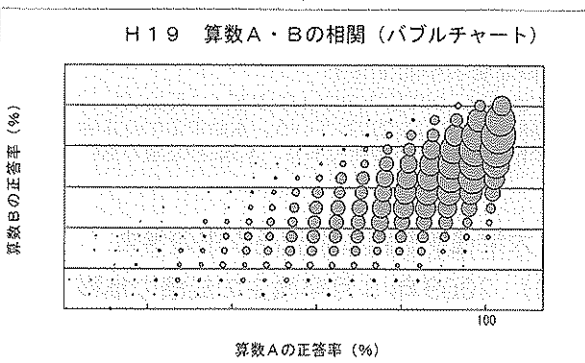
数学A	人数(人)	割合(%)	区分	数学A	人数(人)	割合(%)	区分
90 - 100	2,793	21.9	G I 42.2%	90 - 100	323,841	30.1	G I 51.2%
80 - 89	2,593	20.3		80 - 89	226,917	21.1	
70 - 79	1,556	12.2	G II 36.4%	70 - 79	120,503	11.2	G II 31.0%
60 - 69	1,707	13.4		60 - 69	121,896	11.3	
50 - 59	1,389	10.9		50 - 59	91,755	8.5	
40 - 49	785	6.1	G III 21.4%	40 - 49	53,798	5	G III 17.9%
30 - 39	636	5		30 - 39	57,990	5.4	
20 - 29	549	4.3		20 - 29	35,393	3.3	
10 - 19	455	3.6		10 - 19	33,562	3.1	
0 - 9	114	0.9		0 - 9	11,356	1.1	
合計	12,777	100.1		合計	1,077,011	100.1	



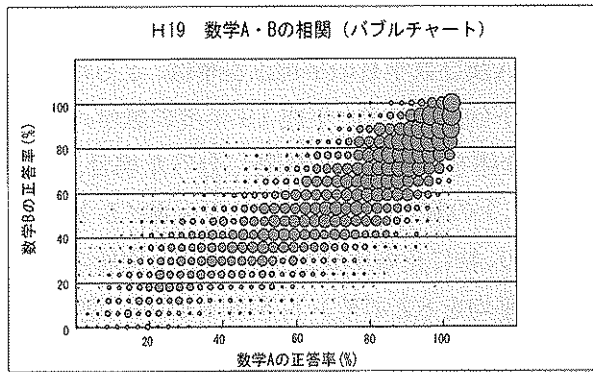
【図3】H19全国学力・学習状況調査「算数A」正答率度数分布



【図5】H19全国学力・学習状況調査「数学A」正答率度数分布



【図4】H19全国学力・学習状況調査 算数A・Bの相関



【図6】H19全国学力・学習状況調査 数学A・Bの相関

3 H19 学調とH20 高校入試成績との比較

平成19年度全国学力・学習定着度状況調査の結果では、小学校6年生、中学校3年生とも平均正答率に大きな地域差は見られなかった。

しかし、平成19年4月に全国学調に参加した中学校3年生がおよそ1年後に受検した平成20年度高等学校入学者選抜検査では、盛岡市など沿線地域の中学校で成績の伸びが目立った。

高等学校入学者選抜検査の問題は弁別度が高く、生徒の学力レベルにより解ける問題と解けない問題がはっきりしている。生徒の学力を十分に伸ばすため、普段から個々の力に応じて発展問題（考えさせる問題）にもチャレンジさせる指導が必要である。

【表6】平成20年度岩手県公立高等学校入学者選抜学力検査「数学」の成績階層別小問正答率

問題番号	階層	P層 得点率 人数	Q層	R層	S層	全体
			0~25点 70人	26~50点 160人	51~75点 288人	
1	(1) 記述	80%	99%	99%	100%	97%
	(2) 記述	36	92	97	98	88
	(3) 記述	3	42	89	95	65
	(4) 記述	31	89	96	98	87
	(5) 記述	7	54	91	99	71
2	(1) 記述	31	75	94	100	82
	(2) 記述	20	58	86	98	71
	(3) 記述	51	88	97	98	89
	(4) 記述	3	48	88	100	67
3	記述	12	37	80	100	62
4	(1) 記述	43	81	95	100	86
	(2) 記述	8	42	86	100	66
5	記述	7	8	23	69	22
6	(1) 記述	5	63	97	98	76
	(2) 記述	0	1	8	28	7
7	記述	1	3	34	92	27
8	記述	1	12	32	60	26
9	(1) 記述	16	66	97	98	79
	(2) 記述	0	12	81	100	54
	(3) 記述	0	0	4	30	5
10	(1) 記述	3	4	21	79	20
	(2) 記述	1	4	8	31	8
11	(1) 記述	6	18	31	60	27
	(2) 記述	0	1	1	14	2

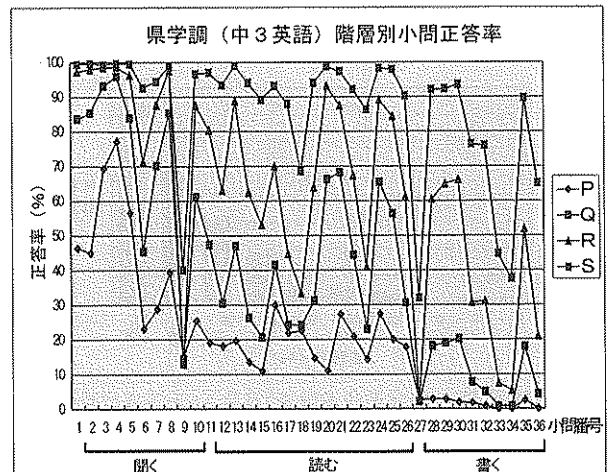
4 平成20年度岩手県学習定着度状況調査の結果（中学校英語）

集団を正答率25%刻みの4階層に分け、それぞれの階層ごとに「聞く力」「読む力」「書く力」に係る小問の正答率を比較分析した。

その結果、「聞く力」、「読む力」、「書く力」のバランスが取れているS層の割合が、2~3年生では20%以下と少ないこと、特に「読む力」と「書く力」の習得の程度に大きなばらつきが見られること、基本的な語彙や表現が十分に定着していない生徒が多いこと等が分かった。高校での英語学習を見据え、S層の割合を引き上げる取り組みが必要である。

【表7】平成20年度岩手県学習定着度状況調査「英語」の成績階層別度数分布

階層 正答率	P	Q	R	S	県全体
	0~25%	26~50%	51~75%	76~100%	
中1	323人 2.6%	2,378人 19.4%	4,517人 36.9%	5,037人 41.1%	12,255人
中2	1,924人 14.9%	4,097人 31.7%	4,397人 34.1%	2,494人 19.3%	12,912人
中3	645人 5.2%	4,738人 37.9%	4,805人 38.5%	2,301人 18.4%	12,489人



【図7】平成20年度岩手県学習定着度状況調査「英語」の成績階層別小問正答率

※ 本調査は、3年生で80%以上の正答率で英検3級（中学校卒業程度）レベルに設定している。本県中学生の英検3級以上の合格者の割合は約20%であり、本調査のS層の割合に近い。

5 大学進学模試に見る高校生の学力

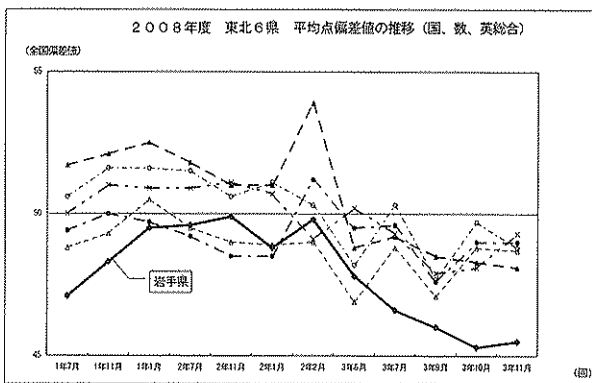
(1) 2009年3月卒業生の成績の推移

図8~図11は、2009年3月に高校を卒業した生徒の、入学から大学受験までの進学模試に

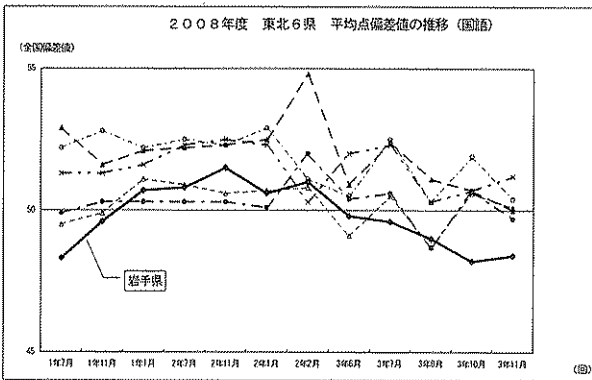
おける国語、数学、英語及びその総合成績の変化を東北6県で比較したものである。(資料提供：岩手県高等学校教育研究会進路指導部会進学専門部大学進学懇談会)

本県生徒の特徴は次の3点である。

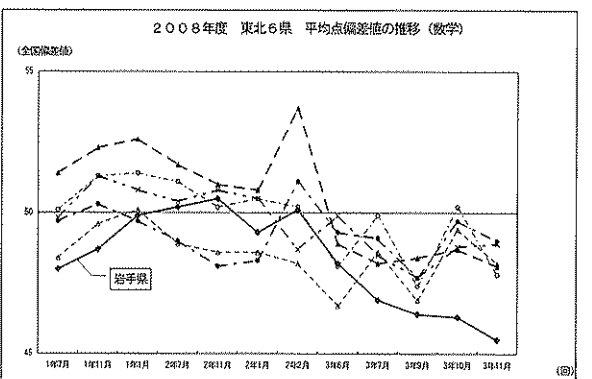
- ア 1年生のスタート時点で、他の5県に比べてかなりの学力差がある。
- イ 1年生の間に成績をかなり伸ばすが、2年生の秋ごろをピークに下降する。
- ウ 大学受験の時点では、高校入学時点よりさらに大きな学力差を生じる。



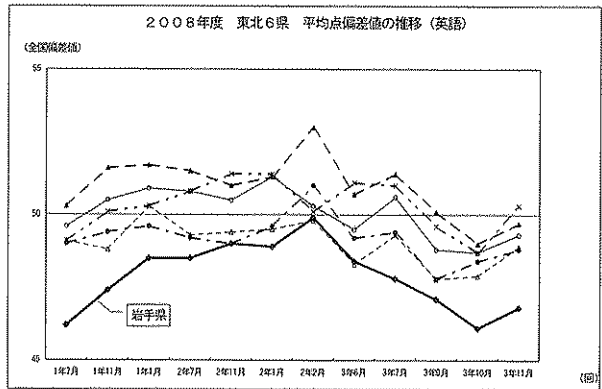
【図8】2008年度東北6県大学進学模試平均点偏差値の推移「国・数・英総合」



【図9】2008年度東北6県大学進学模試平均点偏差値の推移「国語」



【図10】2008年度東北6県大学進学模試平均点偏差値の推移「数学」



【図11】2008年度東北6県大学進学模試平均点偏差値の推移「英語」

このように、大学進学を希望する本県高校生の国語、数学、英語及びその総合成績は、いずれも高校入学時点で他の5県に比べてかなりの差があるものの、1年生から2年生の前期まで急激に上昇する。しかし、2年生の後半以降、下降が継続するという特徴がある。本県高校生のこのような成績変動は、以下の要因が複合的に作用して起こっているものと考えられる。

ア 2年生後期以降、模擬試験の内容が基礎知識を問う問題から思考力を必要とする問題へ変化するとともに、出題範囲も広くなり、さらには、理科と社会が加わってくる。

本県の高校の多くが、入学時点での学力差を埋めるため、基礎知識の習得と基本的な問題の演習に重点を置いて授業を進めているが、模擬試験の出題傾向の変化や科目の増加に対応できるまでに至っていないこと。

イ 本県の特徴として、多くの受験科目を課す国立大学を希望する生徒の割合が高い。このため、一つの科目にかかる時間が不足しがちな生徒が多いこと。

ウ 3年生の模擬試験は、過年度卒業者も加わることや、現役生も大学進学希望者が絞られ、高いレベルでの成績比較になること。

エ 推薦入試やAO入試の受験希望者は、小論文等の準備に時間を割かれ、教科学習の時間が不足がちである。本県では、このような生徒の多くが模擬試験に参加し続けること。

(2) 大学入試センター試験の結果

表8は、本県高等学校の2009年3月卒業者の大学入試センター試験の成績である。国語と理科の一部科目を除けば、全国最下位かそれに近い科目が多い結果となっている。

【表8】2009年度大学入試センター試験平均点

科目	国語	数ⅠA	数ⅡB	英語	英語L	世界史B
満点	200	100	100	200	50	100
県平均	115.6	55.2	41.2	101.3	21.8	55.4
順位	32	46	47	47	47	46
全国平均	116.7	64.6	50.5	115.3	24.3	62.6

科目	日本史	地理B	現代社会	物理Ⅰ	化学Ⅰ	生物Ⅰ	地学Ⅰ
満点	100	100	100	100	100	100	100
県平均	53.1	61.2	55.3	55.0	61.0	51.4	56.0
順位	46	44	46	47	46	44	18
全国平均	58.1	64.0	59.9	63.7	69.3	55.9	52.8

(資料提供：岩手県高等学校教育研究会進路指導部会進学専門部大学進学懇談会)

6 改善方策一「授業と家庭学習の連動」

これまで述べてきたように、本県の児童生徒の学力は、小学生は概ね良好であるが、中学生では数学と英語の基礎・基本の定着に課題がある。そして、このことが高校入学後の学力にも少なからず影響を及ぼしていると考えられる。

このため、県教育委員会では、中学生の数学、英語の学力向上を喫緊の課題とし、改善に向けた取り組みを行っているところである。

(1) 授業改善の必要性

全国学調の児童(生徒)質問紙調査の「算数(数学)の授業の内容はよく分かりますか?」という質問に対し、小学校6年生の肯定的回答は全国平均を上回っているが、中学校3年生では全国平均を7~10ポイント下回っており、3年連続全国ワーストである。私たちは、改めて「分かる授業づくり」に取り組む必要がある。

【表9】児童(生徒)質問紙調査で算数(数学)の授業が分かる・よく分かったと答えた児童生徒の割合

校種	小学校6年生 算数			中学校3年生 数学		
	平成19年	平成20年	平成21年	平成19年	平成20年	平成21年
岩手県	79.3%	81.3%	81.6%	56.2%	56.2%	54.4%
全国	77.1%	78.4%	79.2%	63.6%	65.5%	64.9%

(2) 授業改善の方策

県教育委員会では、諸調査の分析や指導主事の学校訪問の結果等を踏まえ、次の3点を授業改善のポイントに設定した。

ポイント1 学習内容の難易度に対応した家庭学習時間の確保

「岩手県学習定着度状況調査」や「全国学力・学習状況調査」の結果によると、本県小中学生の家庭学習時間は、学年が進んでもほとんど増加していない。

また、特に本県中学生の場合、家庭学習を2時間以上行っている生徒の割合が少ないこと、学年が進むにつれて、むしろ家庭学習時間が減少する傾向、さらには成績上位層でも家庭学習の必要性をあまり感じていない傾向が見られる。

学年が進むにつれて学習内容は難しくなる。学校での授業だけで知識理解から定着、深化まで図ることは困難であり、家庭とも連携し、学習内容の難易度に対応した家庭学習の時間を確保することが必要である。

<学校の授業以外で、1日にどのぐらい勉強しますか(土日は除く)>

【表10】平成20年度全国学力・学習状況調査結果

校種・学年	まったくしない	30分より少ない	30分以上1時間より少ない	1時間以上2時間より少ない	2時間以上3時間より少ない	3時間以上	平均学習時間	
							の推計値	
小6	全国	4.5%	12.8%	26.2%	30.6%	14.2%	11.7%	1.5h
	岩手	2.0%	6.8%	29.7%	46.6%	10.5%	4.4%	1.4h
中3	全国	7.6%	10.1%	16.7%	29.7%	25.5%	10.3%	1.6h
	岩手	4.9%	12.5%	28.9%	38.0%	13.2%	2.5%	1.2h

【表11】平成19年度全国学力・学習状況調査結果(中3)

区分	まったくしない	30分より少ない	30分以上1時間より少ない	1時間以上2時間より少ない	2時間以上3時間より少ない	3時間以上	2時間以上	1時間より少ない
								割合
全国	8.4%	10.2%	16.2%	29.6%	25.7%	9.7%	35.4%	34.6%
岩手県	5.7%	12.9%	28.4%	36.9%	13.3%	2.7%	16.0%	47.0%
上位層	3.5%	10.3%	27.1%	41.3%	15.1%	2.7%	17.8%	40.9%
中位層	4.8%	12.4%	29.8%	37.6%	12.7%	2.6%	15.3%	47.0%
下位層	11.4%	19.0%	28.9%	27.5%	10.3%	2.7%	13.0%	59.3%

ポイント2 「自学ノート」だけの家庭学習からの転換

生徒の主体的な学習態度を育てる方法として、いわゆる「自学ノートによる一人勉強」があるが、「自学ノート」だけを家庭学習の課題としたのでは、学力向上は期待できない。

「自学ノート」による家庭学習の前に、まず授業で学習したことを確かめ定着させる学習（復習）と、次の授業につながる学習（予習）にしっかり取り組ませることにより、学びの成果を体感させ、学びの習慣化をはかることが必要である。

ポイント3 授業と家庭学習の連動

前述のように、中学校以上になると、学習内容が難しくなり、内容理解から定着までを50分の授業だけで行うことは困難になる。分かる授業を実現するためには、授業内容の定着を図る学習（復習）と、次の授業につながる学習（学習内容を見ておくとか、レディネスを揃えるなどの、いわゆる予習）に取り組む家庭学習が欠かせない。そして、授業では、家庭学習の成果を生かし、新たな学びを展開することが必要である。

そのためにも、自学ノートだけの家庭学習を改め、授業と関連性を持った学習課題を計画的に与えることが必要である。

7 平成22年度の取り組み状況

平成21年度岩手県教育研究発表会での報告の後、県教委では、全ての市町村教委を訪問し、分析結果を説明するとともに、家庭学習の充実と授業改善に取り組んでいただくようお願いした。

その結果、多くの中学校において、家庭学習の在り方について見直しが行われ、授業にも変化が現れ始めている。

平成22年度全国学力・学習状況調査においても、中学校3年生の数学は、正答率が低い傾向は続いているものの、全国の平均正答率との差が一昨年、昨年に比べて小さくなってきている。

また、学校質問紙調査では、家庭学習課題の与え方について肯定的な回答の割合が増加してお

り、学校が家庭学習の推進に取り組んでいることが分かる。

【表12】全国学力・学習状況調査「数学」における全国と岩手県の平均正答率の差

	H20	H21	H22 (中間値)
数学A	-5.0ポイント	-4.8ポイント	-4.3ポイント
数学B	-3.4ポイント	-3.9ポイント	-2.8ポイント

【表13】学校質問紙調査における肯定的回答の割合<家庭学習課題を与えているか?>

校種	小学校		中学校	
	国語	算数	国語	数学
H22	99.2%	99.2%	88.0%	94.5%
H21	98.5%	99.3%	85.5%	86.6%
H20	98.8%	98.8%	89.2%	91.8%
H19	97.2%	98.1%	81.7%	89.3%

<家庭学習課題の与え方について、校内の職員で共通理解を図っているか?>

校種	小学校		中学校	
	国語	算数	国語	数学
H22	97.6%	96.8%	78.8%	76.0%
H21	91.9%	91.9%	70.6%	68.6%

さらには、平成21年度から実施している「英語チャレンジテスト」においても、すべての項目の平均値が前年度を上回る結果となっている。

【表14】英語チャレンジテストの結果(460点満点)

	H21	H22	前年比
スコア	255.4点	261.5点	+6.1
語彙	71.9%	73.9%	+1.1
文章構成	37.1%	42.1%	+5.0
読解	52.5%	52.6%	+0.1
リスニング	59.4%	62.6%	+3.2

8 おわりに

本県児童生徒の学力向上に向け、多くの学校で新たな取り組みが始まっている。今後も、授業と家庭での学習の関連性を意識した取り組みを着実に進めていくことが必要である。

ささき しゅういち

- 2004年 大槌高等学校校長
- 2005年 県教委学校教育課総括課長
- 2006年 黒沢尻工業高等学校校長
- 2008年 県教委学校教育室長
- 2009年 県教委教育次長兼兼学校教育局長



確かな学びを育てる — 授業と家庭学習の連動 —

盛岡市立飯岡小学校
校長 佐々木 篤

1 はじめに

学習に関する国際比較の調査を見るとき目に付くのは、日本の児童生徒の家庭での学習時間の少なさである。この傾向は、校種が進むほど顕著となる傾向にあるという。

では、比較的取り組みがなされている小学校の家庭学習の状況に問題はないのであろうか。また、あるとすればどのように改善していくことが求められているのであろうか。

2 家庭学習の実態と課題

○ 単発的取り組み

小学校における家庭学習を概観してみると、その内容は、いかにも系統性が無く、その場その場の単発的課題になっているようである。

「新しい漢字を5回ずつ書いてきましょう」
「今日学習したところの疑問を書きましょう」
「計算問題の残りをやってみましょう」

等々

授業でやり残したことや、習熟のための練習を家庭学習に委ねている姿が見られる。

○ 格差の拡大

上述の単発的課題に対する取り組みを見ると、そこにも問題が隠れている。児童の宿題に関心を寄せ、励ましを与える家庭、宿題に取り組む時間をしっかり設定できる児童の取り組み状況は、内容的にも充実し、学習の積み重ねが確実に見られる。一方、そうでない児童の状況は、提出することがやっとという内容に乏しい姿が見られる。

このことによる弊害は、授業に現われる。前時までは横一線であった児童の習熟に格差が生

じ、次の時間には同じスタートラインから学習が始められないといった実態である。

○ 意欲の減退

単発的で格差拡大に繋がる課題を繰り返しこなすうちに、児童には負の連鎖が見られてくる。やがてそれは「面倒くさい」といった感情となり、何とかして体裁だけを整えるといった、学習として期待することとは真逆の副産物を生むこととなる。

3 小学校が求める家庭学習

では、小学校の実態を踏まえ、家庭学習に求めるべきものはどのようなものであろうか。

○ 学習内容の定着

学校における授業時間には制約がある。授業時間が削減された中で、様々な試みがなされてきたが、「定着」の学習の全てを、授業の中で行うことは困難がある。そこで、授業の中では出来るだけの「定着」をはかるが、その残りの部分については各人が家庭で取り組み、確実な「定着」が望まれる。



○ 学習習慣の確立

児童が望ましい学習者となるために、学校における学習における学習規律を守るとともに、帰宅後も自らの生活リズムを確立し、日常的に学習に取り組み、自律的な生活が出来ることが望まれる。

○ 学習意欲の喚起

学校の授業に喜びを感じ、興味・関心をもち、疑問に思ったことや、興味あることを自ら探求する、学習意欲に満ちた児童が望まれる。

4 解決のために

これらの実態と家庭学習の意義を踏まえ、本校では次の取り組みをすることとした。

○ 全校統一で

学年が変わる、担任が替わるたびに、家庭での「学習課題」が変わるとい実態がある。

そこで本校では、出来るだけ全校的な取り組みをすることとした。当面は教科も「国語科」のみに限定し、そこで行われる「学習課題」を共有化して検討することにより、実効性のある家庭学習を見いだしていこうとするものである。

○ 授業と家庭学習の連動

前項でも述べたが、本校における家庭学習の実態には「単発」なところが多々みられた。そのことはやがて家庭学習のマンネリ化や意欲の減退に繋がるものと考えられる。

そこで出来るだけ、家庭学習が授業の中に位置付くような授業づくりを志向することとした。

その際、家庭学習に求めていくものを次のよ

うに定めた。

<家庭では>

○ 本時の学習内容の定着

その日の学習で学んだことを、より明確に自らのものとして出来ること。「定着」については出来るだけ学校の授業内で取り組み、それにだめ押しをするような課題となること。

○ 本時の学習内容の想起

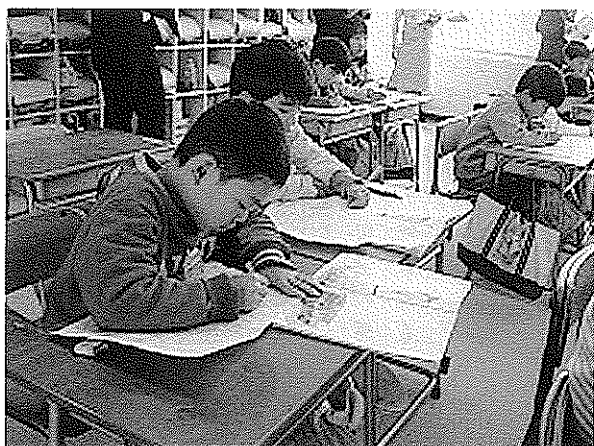
その日の授業の中で、どんなことを学んだかをなぞることができる課題。いかに授業に集中して取り組むことが出来ても、児童の記憶は曖昧なものである。そこで、その日学んだことを家庭でもう一度想起し、次時との連結を図るための課題となること。

○ 本時の学習方法を想起する課題

その日の授業の中でどのような方法で学習がなされたかを想起することができる課題。児童は学習の結果については印象深く残るが、課題の解決のためにどのような学習方法がとられたかは忘れがちである。また、学習方法を理解することにより、他教材を自学する時に、その方法を生かすことを目的とする課題であること。

○ 次時の学習の準備

学校において、それぞれの授業にかけられる時間には限度がある。そこで本取り組みでは、ごく作業的な音読・視写・書き込みといった比較的思考の伴わない内容を家庭学習の課題とし授業時間の確保となる課題。また、この課題に取り組むことにより、次時の学習のあらましを知り、心構えができ、意欲化が図られる課題であること。



<学校では>

これらの課題を受け止めるのは授業である。ここで大きな役割を果たすのは教師による「評価」である。児童が取り組んできた課題について、その取り組みの状況や、取り組みの質を的確に評価し、児童に投げ帰すことである。このことにより児童は、家庭学習のあるべき姿を学び、その取り組みに有用感を見だし、自分のものとしていくものとする。

5 具体的取り組み「授業作文」

本校では、これまで述べてきた事柄を解決できる方途を「授業作文」に求めることとした。「授業作文」とは、一般的に1単位時間の終結場面に設定される「学習の振り返り」を、その時間内ではせず、家庭学習の課題としたものである。

初期段階ではその日の授業についての感想を自由記述させ、次第に教師の評価により方向性をつけていくものである。そこにある児童の「授業作文」を類別してみると、いくつかの性質が認められる。

- 学習内容に関するもの
- 学習方法に関するもの
- 自身の評価に関わるもの
- 学習に対する意欲に関わるもの

<授業作文の実例1>

5月14日 曜日 天気

昔のひとびとは、食べること、飲むこと、かくて、消化のよくないもの、このころだけをとりに出したり、小さい生物の力をかりたり、とり入れる時、きやきやたて方をかえたり、にたり、たりして、いろいろよくくふうして食べられるようにして、このころが、たいてい、かた。

この「授業作文」は3年生によるものである。

授業で学んだことをしっかりとぞり、自らの感想を述べている。この事により、家庭での学習と次時の学習との、継続性が保たれているものとする。

<授業作文の実例2>

5月14日 木曜日 天気

今日は、だん落のつながりて、に表しました。にまとめるために、まずどこで分けられるかを考えました。最初は2、3、4、5と、6、7、8に分けられるかと思いましたが、先生が、どりの人と相談して下さい。と言ったので、どりの〇〇くん、とそうだんしました。すると、〇〇くんが、2、3、4と5、6、7、8と、じゃ、だ、って、ほかに、あります。書いて、いるから、と言いました。なるほど、って思いました。だから、わたしは、そのように直しました。学び合いで、いろいろな人が発言しました。先生が、答えを発表しました。すると、あ、て、いたの、で、うれしかったです。今回は、〇〇くん、に、教えて、もら、たので、これから、自分の、力で、できる、ように、したい、です。

この「授業作文」は4年生によるものである。

自分の考えがどのようにして変化していくかを客観的に想起している。この事により、同様の課題に対してどのように取り組んでいくべきかを習得していくものとする。

<授業作文の実例3>

10月8日 木曜日 天気

今日は、国語の学習で、なぜ筆者が「世界遺産」ではなく、「世界の遺産」と書いたのか、それについて考えました。私は最初、たたくかりませんでした。でも、友だちの考えを聞いて、うちに、「原爆ドームを見る人の心に平和のとりでを築いてほしい」という筆者の考えを強く強調するため、「世界の遺産」と書いたのではないかと私は考えました。わたしは、自分の考えに自信をもてなくて、なかなか発表することができません。なので、自信をもて、自分から発表できるようになることが、これからわたしの目標です。

この「授業作文」は6年生によるものである。授業の中心をしっかりと想起し、その結論を捉え直している。また、自らの学習のレベルをしっかりと評価し、今後どうあるべきかを記述している。

＜授業作文の実例4＞

5月7日 木曜日 天気	
になりました。	になりました。
した。明日の授業でも	した。明日の授業でも
点をまとめることもでき	点をまとめることもでき
ました。問題提起をちゃん	ました。問題提起をちゃん
と読んでも、要	と読んでも、要
っ、前よりちゃんとでき	っ、前よりちゃんとでき
ることがよくなる	ることがよくなる
こと、要点をまとめる	こと、要点をまとめる
がよくなる。小見出しを	がよくなる。小見出しを
サクサクとトラマルハバ	サクサクとトラマルハバ
チ	チ

この「授業作文」は5年生によるものである。学習の進め方の順序を正確に述べるとともに、次時の学習への意欲が明確に述べられている。

6 児童の反応

これらの学習に対する児童の反応は次のとおりである。

＜1年＞

- 先生にいわれるようにしたら作文がうまくなった。
- 先生に作文を読んでもらうとうれしい。

＜2年＞

- どんどん字がうまくなった。
- 視写が速く、きれいになった。

＜3年＞

- 友達の授業作文を聞くのが楽しみだ。
- 書き込みがきれいだったけど、今は好きになった。
- 前よりも音読をがんばるようになった。

＜4年＞

- 家庭学習が楽しくなった。
- 宿題で、辞典を使うようになった。
- 音読がひっかからなくなった。
- 書き込みが楽しくなってきた。

＜5年＞

- 授業作文が長く書けるようになってきた。
- 家庭学習にどのように取り組めばいいのかわかってきた。
- 自分のために役立つ学習だと思ったらやる気がわいてきて、がんばるようになってきた。

＜6年＞

- 家庭学習が授業に活かされている。
- 予習の大切さが分かった。
- 書き込みの大切さが分かった。

7 保護者の反応

以下に保護者から頂いたご意見を紹介する。

- 友達が書いた作文に刺激を受けながらがんばって取り組もうとしているようです。授業作文は授業の理解を深める上で、とても良い取り組みだと思います。家庭学習をして授業を受けると、授業が分かり、授業が分かるから家庭学習が楽しいという良い連鎖があるようです。

8 おわりに

学力の向上に向けて、「授業と家庭学習の連動」という観点から、これまで私見を述べさせていただいた。しかし、この取り組みはまだ国語科に止まるもので、今後は他教科での実践に広げていく必要があるものと考えている。

資料提供：飯岡小学校研究部

ささき あつし

久慈市立長内中学校、盛岡市立大宮中学校、県立総合教育センター、盛岡教育事務所を経て、20年度から現任校に勤務。



学力の向上を目指した家庭学習指導の工夫・改善

北上市立和賀東中学校
校長 川村 庸子

1 はじめに

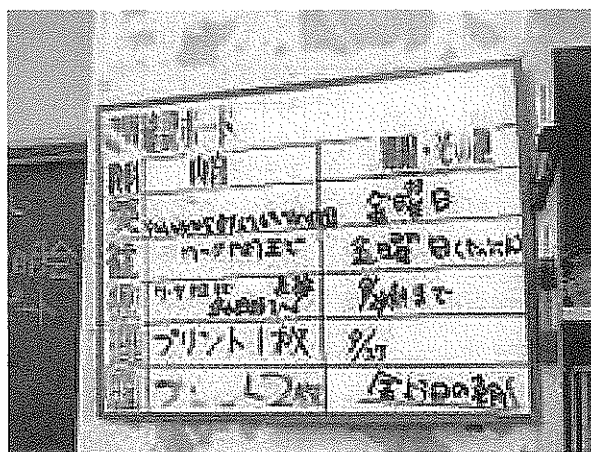
本校は、普通学級9学級と特別支援学級2学級、合わせて11学級（生徒数251名）の規模で、教諭13名と講師5名で授業を担当しています。昨年度から本校では、家庭学習を自主学習ノート（一人勉強ノート）から宿題に切り替えて指導していますが、その経緯と、実施の過程から見えてきた成果と課題について、平成21年度岩手県教育研究発表会シンポジウムで話題提供させていただいた内容を中心に述べたいと思います。

2 自主学習ノートから宿題へ

なぜ宿題に切り替えることになったかという経緯ですが、20年度の県学習定着度状況調査によりますと、本校の家庭学習時間は県平均よりも低く、1時間以下が1年生40%（県は36%）、2年は61%（県は54%）でした。家庭学習の内容は、一人勉強ノート2ページに、生徒が内容を決めて書いてくるという課題になっていました。ほとんどが漢字や英単語の練習で、数学の図形をページいっぱいに行っている生徒もみられました。チェックは学級担任が行い、ノートに記入された内容について教科担任が目をとおり指導することはありませんでした。

本校は学力向上が課題ですので、校内研究のテーマを「基礎・基本の定着と家庭学習の改善」と掲げ、全校での取り組みが始まりました。そこで、家庭学習の取り組み方としてこれまでの「一人勉強ノート何ページ」という課題の出し方から、国・社・数・理・英の5教科でポイントを絞った宿題を提出することにしました。内容

は教科で提示し、結果についてもそれぞれの教科でチェックし評価する方法をとることになりました。研究担当は、宿題が重ならないように提出日を調整したり、どの教科から宿題が出ているかが分かるように、教室に「宿題ボード」を設置したり、家庭学習時間や宿題の提出状況について各学期ごとに調査し、成果と改善点を明らかにしてきました。



【研究担当が製作した宿題ボード】

3 授業と宿題の連動

研究担当が苦労した点は、中学校は教科担任制ですので、各教科の特質を生かしつつ校内研究としてどのように共通視点を設定し研究していくかということでしたが、各教科ごとに授業と宿題の連動のさせ方を探っていくことを中心に進めていくことになりました。ここで、少し具体的に各教科の宿題と授業との連動を図った研究授業の様子を紹介いたします。

数学科の家庭学習は、ワークブックによる復習を中心に1回目はノートに、2回目は本体に書き込む形をとっています。前年度に比べ提出

回数を多くし、できるだけ毎日数学に取り組ませるようにしました。研究授業では、既習内容の確認と予習部分を組み合わせた「予習シート」を準備し、前の時間に与えておきました。家庭学習で記入させ、当日の授業の流れを知るとともに、自分が理解できない部分を明確にすることができるようになりました。実際に授業では生徒たちが積極的に発表する場面や問題意識をもって取り組んでいる様子が見られました。また、根拠を示して説明することやクラスメイトとの教え合いが広がり、理解が深まっていることが分かりました。

社会科は、授業の最後にまとめの時間をとり、授業内容を自分の言葉でノートにまとめさせ、さらに前の時間に宿題にしていた副教材の答え合わせをするサイクルで行っています。研究授業は「鎌倉時代の宗教と文化」の単元でしたが、近所の寺の宗派を調べてくるという宿題で、調べてきたものをお互いに出し合うことによって多くの宗派があることに気づかせ、平安末期の時代状況について考えさせるという予習的宿題として工夫することができました。

理科は、次の授業で行う実験の方法を考えてノートにまとめてくるという宿題で、これも授業に目的をもって取り組ませる予習としての運動を工夫することができました。研究授業では、前時に失敗した「カルメ焼き」を成功させる実験方法を考えてくることを宿題にしました。

これらの研究授業では、予習を宿題とし、いかに授業に意欲的に取り組ませるか、あるいは、主体的に問題解決させていくかという工夫をすることができました。試行錯誤ではありましたが、学習意欲を高めるための宿題の出し方として重要な試みになったと思っています。しかし、これが単発的なものであっては意味がないわけで、各教科が単元の宿題構想をもって進めることが課題です。昨年度の3学期半ばに、本校では次年度用の「学習の手引き」を完成させましたが、単元のねらいや生徒の習熟の状況に合った本校独自の宿題計画も加えていきたいと考えています。

4 1年目の成果と課題

1年間、取り組んだ過程で見えてきた成果と課題ですが、まず成果としては、生徒に宿題の提出が意識づけられ、80%以上の提出率だったことと学習時間についても年度初めより少しずつ伸びてきていることです。一方で課題となったことは、教師側のチェックに負担が生じ始め、年度の後半には、保護者から「宿題が出ていないようだ」という声が聞こえるようになりました。このことに関しては、5教科の中で、生徒も保護者も毎回宿題が出ているという認識がもたれている、すなわち宿題が習慣化されている数学科のノウハウを生かしていきたいと思っています。数学科が習慣化できた要因は、年度当初の教科オリエンテーションで、数学の学習の仕方、宿題の出し方、評価の仕方について詳しく生徒に説明し、説明したとおりに確実に実行していったことでした。宿題チェックについてもABCDの4段階評価をし、その合計が学期の評定に入れるようにしました。これらのことから、宿題を定着させるためには、オリエンテーションのもち方が重要な鍵を握っていることが分かりました。年度初めの教科オリエンテーションを充実させるためには、次年度用の「学習の手引き」を年度内に作成しておく必要があります。



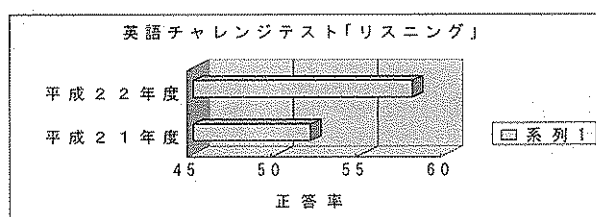
【次年度用「学習の手引き」】

もう一つの課題は、提示された宿題を消化できない生徒がいるということです。自分の力で問題を解くことができない生徒は、家庭学習の取りかかりが悪くなったり、答えを写すだけになります。自主学习ノートから宿題への転換を

図っても、これではさらに学力の低下を招いてしまうので、自力解決できない生徒には、個別に基礎力の強化を図っています。また、毎回、副教材や問題プリントだけではなく、新学習指導要領で求められている表現力や考える力を養う調査レポートや実験報告書など、書き方を十分に指導したうえで宿題としてまとめさせ評価していくことが必要だと考えています。

5 教科経営の充実

本校では経営の重点を教科指導へ実質的にシフトしていくことが課題と考えています。そこで教科部会の充実のため、「教科マニフェスト」を作成し、教科部内で目標を意識した教科経営を行っていくことにしました。これまで実施していなかった標準学力検査NRTの分析や対策の検討を今年度は教科部会単位で行いました。英語科では、3学年の下位生徒に対する基礎力回復のため、習熟度別学習を実施することにしました。実施後5ヶ月が経過した現在、生徒アンケートによると英語への興味が増し、内容が理解しやすいと回答している生徒が多いことが分かりました。3学年は非常に基礎力に課題があるのですが英語チャレンジテストでは昨年を上回り、特にリスニングが伸びていることが分かりました。その要因は、家庭学習で覚えた重要文を授業のペア学習で確認するサイクルができたためと考えています。



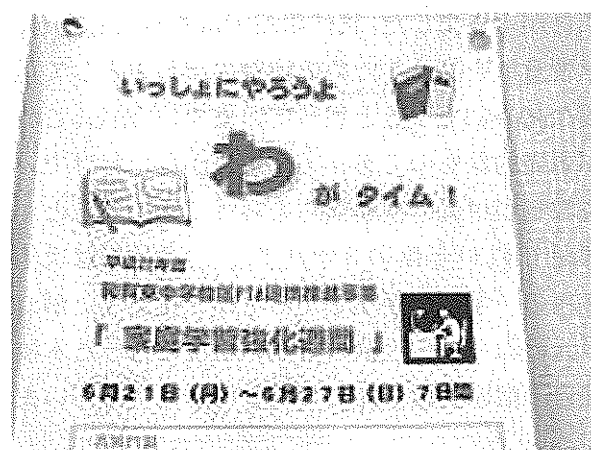
理科では、授業と関連した身近な科学の話題を紹介する教科新聞「サイエンス・アイ」を発行しています。星座や月食などの天体の話題、猛暑の頃には「気化熱」の話題などで、理科への興味と関心を高めています。新聞には、定期的に宿題の内容と提出期限を示し、計画的に取り組みやすい体制をつくっています。

6 家庭学習の習慣づくり

今年度から時間割を固定にしています。昨年度までは、本校が地区中体連事務局校で、さらに専門委員長を担当する職員も多く、出張や振替で空いた時間を埋めるために、毎日、時間割を組み変えていました。授業が自習にならない、課題準備の必要がないというメリットはありますが、本校の場合は、生徒が計画的に学習できない、宿題の計画が立たないなどのデメリットが大きいことから、思い切って固定時間割にすることにしました。当初、教師側が新しい方式に適応できずに職員室が緊迫した状況になる時もありましたが、今年度、恒常的に宿題が出て、家庭学習をする生徒が増えたのは、固定時間割によるところが大きいと思われます。さらに、固定時間割によって各学年の家庭学習指導もしやすくなり、1年生は、毎日の生活記録ノートと宿題ノートを担任がチェックしコメント指導をして返却しています。2年生は、学年から出された1週間分の宿題の中から、毎週金曜日にテストを行い定着を確認しています。3年生は、ワークブックを中心に計画的に宿題を出し、その中からピックアップした問題を月1回のペースでテストしています。

7 小中連携による学力向上の取り組み

本学区では、学期に1回ずつ小中3校で授業を参観し合い、学力向上のための研究会を行っています。その研究会で、家庭学習の習慣づけのため1週間の家庭学習強化期間「わがタイム」を定め、テレビ・ゲームを消して家庭学習を実施し



た時間を保護者の協力を得て確認・提出する共同活動を行っています。

7月に実施した結果では、本校生徒の7日間の平均は14.4時間で、1日平均2.1時間の家庭学習をしており、昨年度に比較し0.8時間ほど伸びていることが分かりました。

8 部活と学習の両立

本校には、スポーツ少年団の父母会とコーチ、そして学校の三者の連携を深め、スポ少活動を通して生徒の健全育成を図ることをねらいとした「クラブ育成会」(会長：PTA会長)という組織があります。結成の経緯は、4年ほど前に熱心なコーチのもとにスポ少活動が過熱化し生徒の生活リズムが崩れて学習にも影響したことから、三者が合意した基本的なルールのもとに活動することになったということです。昨年度までスポ少活動終了時刻を午後7時をめぐらすことを申し合わせていましたが、これが形骸化し、次のような問題が表面化していました。①部活とスポ少の時間を合わせると2時間45分ほどになり、長すぎる。また、部活とスポ少の区別がないこと。②年中7時までの活動で生徒の生活にメリハリがないこと。③学習時間が確保できていないこと。

また、保護者アンケートを実施した結果、「活動の負担を軽減し、家庭学習に当てる時間を増やすべき」という意見が多く出されました。父母会では出にくい声、アンケートには出ていたと思われる。この声を拾い、昨年度末に職員・PTA・スポ少父母会・コーチによる臨時クラブ育成会議を開催し、率直に生徒の健全育成を目指した部活とスポ少のあり方について検討しました。その結果、細かな取り決めはせず、むしろ部活とスポ少が責任を持って役割を果たすことを確認しました。コーチからは「生徒の実態を知るために学校の校報をコーチにも配布してほしい」という前向きな申し出があり、学校で行ってる指導をスポ少でもバックアップするようになりました。こうした流れの中で、生徒にメリハリのある部活動をさせるため生徒指導

部を中心に今年度から中総体と新人戦前3週間の部活延長の取り組みを行いました。生徒会部活委員会が学校に「時間厳守」と「学習との両立」を条件に延長の申し出を行い、自ら責任を持って点検活動を行いました。その結果は、部ごとに廊下に掲示され校報でコーチや父母会にも報告されました。新人戦に応援に来られた保護者から、「今年は、学校から宿題がきっちり出され、本人は部活も勉強もかなり頑張っています。今日の大会でも自分の目標を達成できてとても自信がついたようです」と喜びの声をいただきました。今年度の新人戦では11競技中、優勝2競技、県大出場3競技、3位入賞が7競技と、これまでの記録を大きく上回る健闘ぶりでした。

9 おわりに

昨年度の岩手県教育研究発表会シンポジウムで、宮崎県の木村誠校長先生が話された骨太の学校経営に強く感銘を受けました。通塾生徒が少ないなど教育環境が岩手に近いにもかかわらず、中学校で学力が向上しているという、その違いは何によるのでしょうか。二つ考えられました。一つは、学校の主体性です。「止む終えない」という後ろ向きの理由で仕事をしていないということです。ここは断固として譲れないという学校の姿勢が信頼を高め成果を上げているのだと感じました。二つ目は、人間としての基本的なルールとマナーを徹底して指導しているということです。部活後、制服に着替えて下校させるなど、人間としてけじめのある生活をさせたいという、ごく当たり前の願いを前向きに実行していく姿勢の大切さを学びました。

かわむら ようこ

北上市立北上中学校教諭、岩手県立総合教育センター研修主事、久慈市立久慈湊小学校校長、西和賀町立湯田中学校校長等を経て21年度から現任校に勤務。著書に『不思議の国の全校朝会』(文芸社)。



ワークショップ型授業研究会導入で 全員参加の校内研究へ

矢巾町立矢巾中学校

校長 畠山 秀一郎

1 はじめに

本校は、平成21年度～平成22年度の2年間、紫波郡地方教育委員会連絡協議会並びに矢巾町教育委員会の研究指定を受け実践研究を推進してまいりました。この研究に取り組み始めるときに考えたことは、研究主任や授業者が苦勞するのではなく、全職員が参加できる校内研究を創り上げたいと思っていました。

そして、岩手県立総合教育センターの研修主事の先生方のご指導・ご支援をいただきワークショップ型の授業研究会の構築に取り組みました。

2 本校の校内研究の課題

- (1) 中学校は、教科担任制の壁が高く、研究テーマが全員のものになりにくい。
- (2) 年数回の研究授業では、教師一人ひとりの授業力向上につながらない。
- (3) 部活動等で忙しく放課後の授業研究会の開催が難しい。

3 校内研究の課題解決のためのアクション

- (1) 外部の力を借りて校内研究会を活性化
(岩手県立総合教育センターからの支援)
 - ・職場の同僚だけでは、研究推進に時間がかかり、新たな発想が生まれにくい。
 - ・本校は、岩手県立総合教育センターの研修指導主事のご指導・ご支援をいただき、ワークショップ型の授業研究に取り組んだ。
 - ・研究主任への相談・助言
- (2) 全職員の合意形成を目指して
(教科の壁の克服)

中学校研究の最大の課題は、教科の壁を克服し、研究の方向性を共有すること。

①全員が参加できる

ワークショップ型授業研究会の構築

②研究のボトムアップ化

研究部のトップダウンではなく、話し合いの中から一つのもを作っていく。

(3) 「授業改善」のためのPDCAサイクルの確立を目指して

①授業力アップポートフォリオの実践

- ・自己課題解決シートの活用

②教科内授業研究会の実施

- ・全員が参加の校内研究会は、そんなに多く開催できないので、教科内の授業研究会を時間割操作により授業時間内で実施する。

4 ワorkshop型授業研究会の工夫

(1) 手立ての検証を中心としたWS

(岩手県立総合教育センターからの指導)



○授業前に「手立て」を示したことで授業を見る視点が明確になり、付箋に書く内容が焦点化された。

○どのグループからも同じ視点での意見が出されるため、まとめがしやすい。

●「手立て」以外には触れずらいところがあった。

(2) 時系列で検証するWS

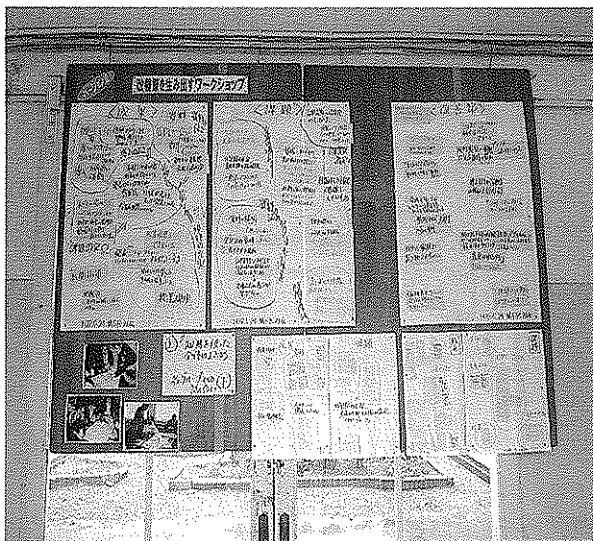
(東北技術・家庭科研究大会仙台大会参考)



- 時系列で考えることができ、グループでの意見の整理がしやすい。
- 指導案を見ながら話し合うので、授業を想起しやすかった。
- 指導案の細かな点に話題が散って、ポイントを絞れず、話し合いが焦点化しづらい。

(3) 改善策を生み出す WS

(東京都東村山市岱田小学校視察)



- 自由度が高く、多様な意見が出されグループの話し合いが盛り上がった。
- 付箋の操作がシンプルな分、話題を焦点化し易かった。
- 単に本時の授業評価にとどまらず授業をみんなでよりよいものにするためのアイデアを出し合い授業改善に繋がる。
- 改善点の話し合いをどう仕組むかコーディネーターのスキルアップが求められる。

5 成果と課題

<成果>

- (1) ワークショップ型の授業研究会の実施により同僚性を高めることができた。
- (2) ワークショップの持ち方も先進校視察等を実施し本校の実態に合ったスタイルを作ることができた。
- (3) 自己課題解決シートを活用し個人の課題を明確にし実践力への意識を高めた。
- (4) 研究部通信の発行により、研究の進行状況や内容の可視化が図られ、共通理解に役立った。
- (5) 全教科一斉授業研究は、実践の機会を多く設定でき非常に有効であった。
- (6) 研究公開の授業研究会をワークショップ方式で運営し参加者が参加して良かったと思えるような授業研究会にすることができた。
- (7) 紫波郡内でもワークショップ型の授業研究会を実施する学校が増えてきた。

<課題>

- (1) 研究の日常化
- (2) コーディネーターのスキルアップ
- (3) 研究のアウトプットの工夫
(分かる授業と表現力の検証方法の工夫)

6 おわりに

同じような校内研究の課題を抱えている学校がありましたら、まずはワークショップ型授業研究会の実施をお勧めします。必ずや先生方の校内研究に対する意識が変わると思います。

最後に、本校の研究にご指導・ご支援をいただきました岩手県立総合教育センターの皆様から感謝を申し上げます。

はたけやま しゅういちろう

川井村立川井中学校長、紫波町立紫波第三中学校長を経て、21年度から現任校に勤務



「読む力」が育てる「学ぶ力」

フリーライター・編集者

内澤 稲子

「岩手が取り組む学力向上」についての提言という、大きくて難しいテーマをいただいた。身近に子どもがいない私は、教職にある友人・知人、学齢期の子どもをもつ仕事仲間や従姉妹たちから聞く話、マスコミ報道などから得る情報をもとに、はるか昔の自分の身を振り返るしかない。提言などおこがましいが、はたから見える教育現場の印象を述べたいと思う。

学力向上のためには、一にも二にも学習だろう。しっかり自分のものになるまで繰り返し学ぶ必要がある。しかし、理解するスピードは、それぞれだ。授業をきちんと聞いてさえいれば分かる子もいるが、家で復習しなければ定着しない子もいる。学校でその差を埋めるために必要なのは、一人ひとりに目配りできる少人数学級の実現だろう。少人数なら、教師も子どもの習熟度を考慮した指導がしやすい。

しかし、少人数学級云々以前に、教師の負担は尋常でないように見える。早朝から勤務し、帰宅も遅い。職場だけでは終わらず、仕事を自宅に持ち帰る。行事やクラブ活動で、週末でも出勤する。子どもたちの学力向上だけに専念するゆとりなどなさそうだ。「ゆとりの時間」は、教師にこそ必要ではないかと言いたくなっていく。少人数学級ならトータルな仕事量も減り、少しは負担が軽減するのではないか。

先生も子どもも忙しすぎないか

教師の負担といえば、学校行事が多すぎはしないか。運動会、遠足、学習発表会、地区全体の陸上記録会……、学校によっては登山もあると聞く。それらの行事の準備のために、授業時間が費やされる。学力向上というならば、行事の絞り込みも必要だろう。学校が、勉強だけの場ではないことは十分にわかっているつもりだ。しかし、学習の時間が減ってしまっ

た末転倒だ。今まであったものを無くすることに抵抗感もあるだろうが、そこを乗り越えなければ、決して大きな変化は生まれまい。

昨今はスポーツ少年団の活動が活発だが、かつてそのようなものはなかった。少なくとも小学生の間、土曜の午後と日曜は、基本的に家庭で過ごす時間だったはずだ。しかし、現状はまったく違う。スポ少がなかった頃と同じだけの学校行事を続けていたら、子どもたちだって忙しくなるだけだ。スポーツでくたくたになったあと、勉強などしたくないのは当たり前。家庭できちんと授業の復習などできるだろうか。

そこで家庭学習の問題である。学年が上がるほど、家庭学習は必須のものになってくる。習慣化して、コンスタントに続けなければ力はつかない。しかし、それほど大切な習慣が、子どもたちの身に付いていないのではないか。そう思うのは、「全国学力・学習状況調査」の結果を見てのことだ。もちろん、この成績が学力のすべてを示すものではないが、ひとつの基準として例にあげたい。

この学力テストでは、小学生は全国でも10位あたりの成績で健闘しているが、残念ながら中学生になるとランクがずいぶん下になる。とくに数学の成績が芳しくない。中学校ともなると、授業だけですべてを理解するのは無理だろう。予習・復習をしなければ、教師の説明など通り抜けていくだけではないか。しかし、家庭学習の時間が極端に短いという調査結果を目にした。

ここからは、親の課題である。さまざまな親がいることは承知している。モンスターペアレントが、テレビドラマにまでなる時代である。担任が「家庭での学習を見てやってください」と言っても、そうそう協力的な親ばかりではない（というのも、そもそもおかしな話である。

自分の子どもの問題なのだから)。

全国学力テストの結果が、小中学校を通じて成績上位なのが、お隣の秋田県である。大都市圏ならともかく、北東北の隣県で学校教育の環境にそう大きな違いがあるとは思えない。秋田県の子どもたちは、それほど塾通いをしていないという報道もあった。それなのに学んだことが定着しているということは、家庭学習がきちんと行われているということだろう。

「うちの子は勉強しない」「成績が上がらない」と嘆く前に、親はまず家庭を顧みて欲しいと、現場の教師は切に願っているに違いない。塾に通わせればいいというものでもない。「自ら勉強する」という意識がない限り、せつかくの塾通いも実りは少なそうだ。しかし、教師が踏み込める領域でもない。ジレンマは続く。

「できたら嬉しい」という経験

ここで、私の小学校時代を振り返ってみよう。宿題だけはきちんとしたが、それ以上の勉強をした記憶があまりない。ただ、国語の教科書に掲載のお話が気に入ると、何度も繰り返して読んだ。しまいにはすらすらと暗誦できるようになって、自分でも驚いたほどだ。漢字を覚えるのが好きで、宿題でなくても書き取りをした。書ける字が多くなると、ちょっぴりお姉さんになったようで、ひそかに得意な気持ちになれるのが心地よかったのだ。地図も好きで、授業の合間に友達と地図帳を広げ、互いに地名のあてっこをして遊ぶこともあった。授業の進行とは違うところで、「自分の勉強」をしていたらしい。

しかし、中学生になると、そんな気ままなことではすまされなくなった。人一倍小さな身体にくせに運動部に入ったため、ふだんは長時間の家庭学習などできなかったが、とりあえず予習の真似事だけはした(本当に真似事だった)。どうやら数学や理科など、理系の科目が好きではないことが、自分でも分かってきた。できることなら避けて通りたいかったが、高校受験という関門が待っているから、そうもいかない。あとはお決まりの試験の前に頑張るパターン。それは、高校時代まで続いた。それでも、追い詰められれば机に向かって何とか頑張れたのは、「できたら嬉しい」という単純な喜びを知って

いたからだと思う。

私の「できたら嬉しい」の始まりは、読書だった。姉がふたりいるため、いつも身の回りに自分の年齢より上の子どもが読む本があった。背伸びをしたかったのだろう、ひとりだけで姉の本を読んだ。おそらく分からないところを飛ばし飛ばしにして、あとは想像力だけで読み進めたのだと思う。小学校に上がる前、3・4年生向けの童話の本を1日かけて読み通したときの充実感は、今でも覚えている。

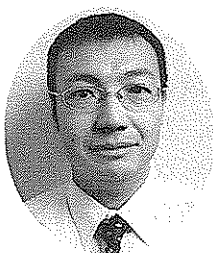
読書をしてきた経験は、私の基礎となって、現在の仕事をも支えている。小学校から大学までの学校で学ぶ時間も、「読む力」によって、かなり助けられてきたと思う。活字と向き合い、自分の頭の中に、さまざまな絵を浮かべる。子どもの少ない経験から想像できることなどたかが知れているが、それでも精一杯、空想の世界を広げていた。それは、ほとんど妄想と言ってもいいかもしれない。

決して漫画やアニメではなく、ましてやゲームなどではなく、あくまでも活字だけ。そこからどれだけ世界を広げられるか。活字を通じて想像力が育ってくると、さらに別の活字の世界にも入っていける。その繰り返しが、学校での勉強に役立ったのだと思っている(だからといって、苦手科目の点数が良くなったということではないが……)。

県内の小中学校では、朝読書を実施しているところも少なくないと聞く。本当は親が本を読む姿を子どもに見せて、本好きな子を育てるのがいちばんだが、それも難しいのであれば、学校で進めて欲しい。読書を続けたからといって、すぐには試験の点数に結びつかないかもしれない。しかし、将来にわたって、必要な「学ぶ力」が身に付くものと信じている。

うちざわ いねこ

岩手県生まれ。津田塾大学学芸学部国際関係学科卒業後、岩手日報社に記者として入社。退社後は、フリーのライター・エディター・プランナーとして活動を続けている。NPO法人いわて景観まちづくりセンター理事。



本県の家庭学習実施状況に関する調査報告

盛岡市立都南東小学校 教諭 大坂 越 郎
(平成21年度長期研修生)

花巻市立湯口中学校 教諭 三木 久 和
(平成21年度長期研修生)

1 はじめに

この調査は、本県児童生徒の家庭学習の在り方にかかわる傾向や課題を明らかにし、各学校における家庭学習指導の改善に寄与することを目的に平成21年度に実施した。調査及び分析は、総合教育センターの助言のもと小学校は大坂が、中学校は三木がそれぞれ担当した。

ここでの調査報告は、家庭学習の在り方にかかわる傾向や課題が顕著に現れたものについて重点的に取り上げた。考察についても同様である。紙面の関係からグラフ、全国学力・学習状況調査の分析、対比については割愛した。

詳細なデータ、分析については、岩手県立総合教育センターのWebページ(下記URL)に掲載しているので参照されたい。

URL : <http://www1.iwate-ed.jp/>

2 小学校の調査結果

(1) 調査対象及び回答率・回答人数

ア 公立小学校の教員を対象とした調査

<教務主任調査>

- ・県内小学校308校より回答(回答率75.3%)

<学級担任調査>

- ・第3学年及び第6学年の学級担任、各1名を対象
- ・県内小学校304校より回答(回答率74.3% 第3学年担任288名、第6学年担任294名)

イ 抽出公立小学校の第6学年児童及びその保護者を対象とした調査

<児童調査>

- ・県内小学校38校の第6学年1学級の児童を対象
- ・38校589名より回答

<保護者調査>

- ・同上の児童の保護者を対象
- ・38校563名より回答

(2) 小学校における特徴的な傾向

調査結果から小学校の課題と捉えられたのは、

家庭学習の時間の少なさ、ながら勉強、家庭学習の内容、具体的な指導方法に関する職員の共通理解などである。

以下に、これらに関する具体的な調査結果と、併せて、指導者、児童、保護者の意識について紹介する。

【家庭学習の実態】

- ◇家庭学習時間が「3時間以上」と回答した児童の割合は、平日で6.6%、休日で5.5%。どちらも全国平均より低い。
- ◇家庭学習時間が「1時間以上2時間より少ない」と回答した児童の割合は、平日で17.9%、休日で16.4%。どちらも全国平均より高い。

【ながら勉強】

- ◇家庭学習をするときに、「ながら勉強」をしていると回答した児童は76.2%。(保護者は75.8%)
- ◇別に実施したクロス集計では、普段(月～金曜日)のテレビの視聴時間が長いほど、「ながら勉強」の割合は高い傾向にあった。

【家庭学習に関する児童・保護者の意識】

- ◇帰宅後「時間のつかい方を考えて、そのように生活できた」と回答した児童は16.5%。(保護者は16.4%)
- ◇休日の家庭学習を「平日よりたくさんがんばろうと思ってやった」は18.7%。
- ◇休日の家庭学習を「しかたなくやった」「休みの日はやっていない」を合わせると、31.2%。

【家庭学習の指導(内容)】

- ◇ほぼ毎日、必ず出している「宿題」は、小学校全体で「音読」79.2%、「漢字の読み書き」44.2%、「計算問題」40.4%の順になっている。
- ◇自主学習への取り組み方についての児童からの回答は「授業の復習」68.8%、「学校で買った計算ドリル」64.5%、「同漢字ドリル」57.4%の順になっている
- ◇小学校学級担任調査では「宿題と自主学習の量を同程度に取り組みさせることが望ましい」と55.6%が回答。

【家庭学習の指導(共通理解)】

- ◇家庭学習に関する学校全体の指導方針が、教育計画の中に位置づけられている学校は83.8%。
- ◇「家庭学習の評価のしかた」「家庭学習で使用するノートの使い方」「帰宅後の生活の仕方」「家庭学習に関する個別指導」の共通確認をしている学校は30%を下回っている。

- ◇学校独自の家庭学習に関する実態調査を行った学校は、54.2%。
- ◇「帰宅後の時間を上手に使えるように指導した」は、全体で34.5%。
- ◇「コメントを記入して返却した」は宿題では51%、自主学習では68.9%。

【保護者の要望】

- ◇家庭学習についての保護者から学校や先生への要望は「個別に指導してほしい」36.1%、「やりかたを詳しく教えてほしい」32.7%、「他の子の家庭学習を紹介してほしい」23.6%の順になっている。

(3) 分析と考察

ア 児童の家庭学習の実態について

児童の学習時間の時間は短く、テレビの視聴時間は長い。ながら勉強も多く、帰宅後の生活は望ましいとは言い難い。

帰宅後の時間の使い方について、規則正しい生活ができるように指導する必要がある。保護者も問題意識を共有していることから、保護者と連携しながら、家庭学習の環境を整えていることが大切である。

イ 家庭学習の指導（内容）について

小学校では、学級担任のほとんどが、家庭学習は、「宿題」と「自主学習」の両方に取り組みたいと考えているが、児童が取り組んでいる「宿題」と「自主学習」は、内容面ではほとんど変わらないことも指摘されている。

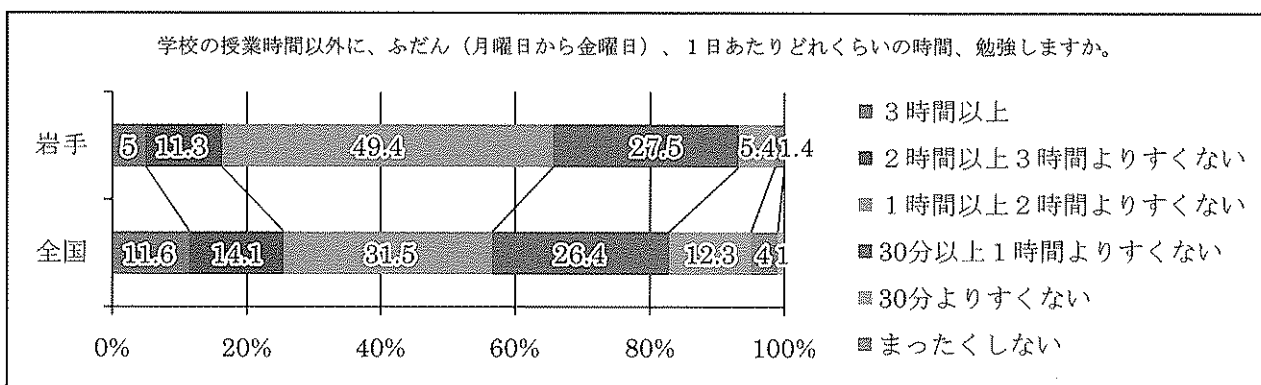
「宿題」と「自主学習」の目的を明らかにし、それぞれ内容を吟味する必要があるといえる。

ウ 家庭学習の指導（共通理解）について

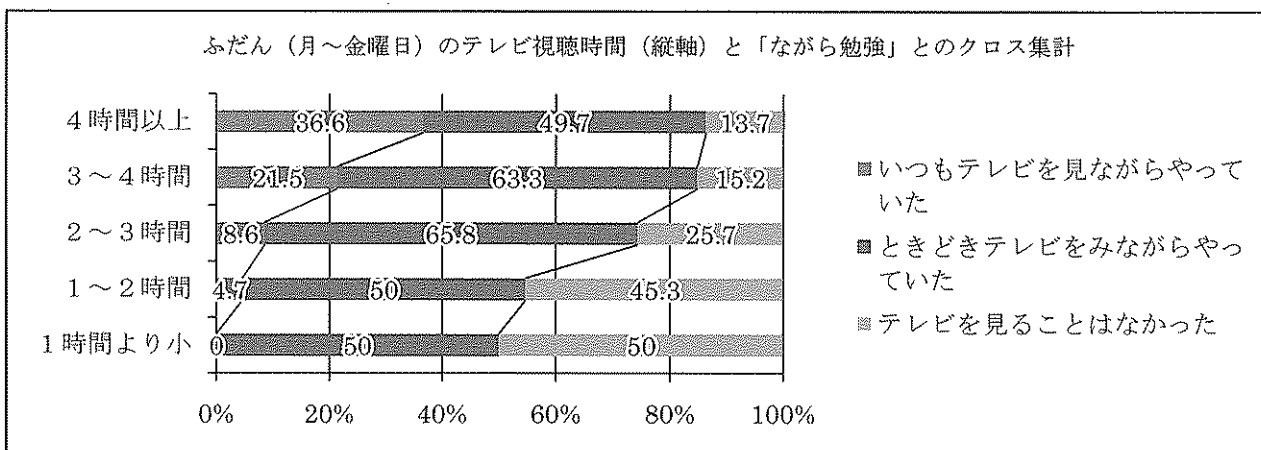
家庭学習について、多くの小学校は、学校全体の指導方針を教育計画の中に位置づけているが、コメントの記入の仕方など、家庭学習の評価のしかたや帰宅後の生活指導について共通確認をしている学校は少ない。

学校に家庭学習に対する具体的な指導を期待している保護者が多いことなど、保護者の願いについても共通確認しながら取り組むことが大切である。

参考【平成 21 年度全国学力・学習状況調査】児童（小学 6 年生）質問紙(16)



参考【家庭学習実施状況調査・テレビ視聴時間と「ながら勉強」】



3 中学校の調査結果

(1) 調査対象及び回答率・回答人数

ア 県内全公立中学校の教員を対象とした調査

<教務主任調査>

- ・県内中学校 119/190 校より回答(回答率 62.6%)
- ・教科担任調査(3学年の国語・社会・数学・理科・英語の教科担任各1名・計5名)
- ・県内中学校 114/190 校、553/950 名より回答(回答率 校 60.0% 人 58.2%)

<抽出公立中学校の生徒及びその保護者への調査>

- ・生徒調査(県内中学校より、25校の第3学年生徒を対象)
- ・25校 518名より回答
- ・保護者調査(同上の生徒の保護者を対象)
- ・25校 496名より回答

(2) 中学校における特徴的な傾向

調査結果から中学校の課題として捉えられたのは、家庭学習の時間の少なさ、ながら勉強、家庭学習の内容、具体的な指導方法に関する職員の共通理解などであり、小学校と同様、あるいは類似した傾向を示している。また、中学校に特徴的な傾向として、自主学習ノートの在り方や家庭学習と部活動との関わりなどがあげられる。教科別の調査では数学における家庭学習の指導方法が他の教科と大きく異なっていることも分かった。

以下にこれらに関する具体的な調査結果と、併せて、指導者、児童、保護者の意識について紹介する。

【家庭学習の実態(時間)】

◇普段1日あたりの岩手の「家庭学習」時間は、全国平均に比べ、2時間以上の学習をする割合が半分程度である。

【ながら勉強】

◇「いつもテレビを見ながらしていた」(15.7%)、「ときどきテレビを見ながらしていた」(41.7%)を合計すると、全体の57.4%がテレビを見ながらの「家庭学習」を行っている。

【家庭学習の内容(宿題と自主学習の割合)】

◇「宿題」と「自主学習ノート」の割合について、教務主任の回答は「自主学習ノート」を中心に「宿題」にも取り組ませた」が44.5%と最も多く、続いて「宿題」と「自主学習ノート」に同程度取り組ませた」が33.6%となっている。

◇普段(月曜日から金曜日)の「家庭学習」時間と、「自主学習ノート」にかける時間がほぼ一致する。

【自主学習ノートに関する意識】

◇「自主学習ノート」は「…学力向上に寄与していない」という声に対して、教科担任の回答は「そのように思う」が47.9%、「どちらかといえばそう思う」が15.7%となっている。

【基本方針に関する共通理解】

◇学校全体の指導方針が教育計画の中に位置づけられている割合は、69.7%である。

◇職員会議で情報交換等を行っている学校を含めると、95.8%が「家庭学習」に対しての方針を立てたり、共通理解を図ろうとしたりしている。

【具体的な指導方法に関する共通理解】

◇「宿題」の内容や出し方について、学校全体で協議や共通確認を行った中学校は、47.1%である。

◇「自主学習ノート」を、学校の方針に基づき指導しているのは45.4%であり、学年・学級の方針に基づき指導している方が多い。

◇「宿題」未達成者(「宿題を忘れてきた・やってこなかった生徒)に対してどう指導していくかを、学校全体で共通確認している中学校は20.2%である。

◇「宿題」の提出率や内容評価をどのように学期末評価に取り入れるか(または取り入れないか)に関し、学校全体で共通確認しているのは10.9%である。

【家庭学習と部活動との関わり】

◇家庭学習の集中を妨げるものとして、部活動・スポーツ少年団等からの疲労を47.2%の保護者があげた。

◇部活動やスポ少活動から帰宅後、休養をとってから学習を行っている生徒が47.9%である。

◇短時間に集中して学習を行おうとしていた生徒が、23.3%である。

◇「家庭学習」充実のため、活動時間への協力を求める働きかけの必要がない学校が26.9%であり、働きかけの必要があった73.1%の中で、実際に働きかけを行ったのが42.0%で、行わなかったのが、31.1%である。

【保護者の意識】

◇「家庭学習」の集中を阻害する要因として、保護者が最も多く回答したのが、「テレビに気を取られ、集中できないときがあった」(57.5%)である。

◇「子どもの学習意欲を引き出す『家庭学習』が出されている」においては、「よくわからない」を除いた64.3%の中で、29.5%が、否定的な回答をしている。

◇「丁寧な事後指導や評価がされている」においては、「よくわからない」を除いた63.3%の中で、24.0%が、否定的な回答をしている。

◇自由記述では、回答の9割以上が、学校の「家庭学習」指導に対する疑問や批判、改善を求める内容であった。

【数学の「宿題」指導】

◇予習に、週1回以上(ほぼ毎日、ほぼ授業日、週1・2回)取り組んでいる割合では、英語33.0%、次いで国語25.0%、社会16.3%、数学15.7%である。

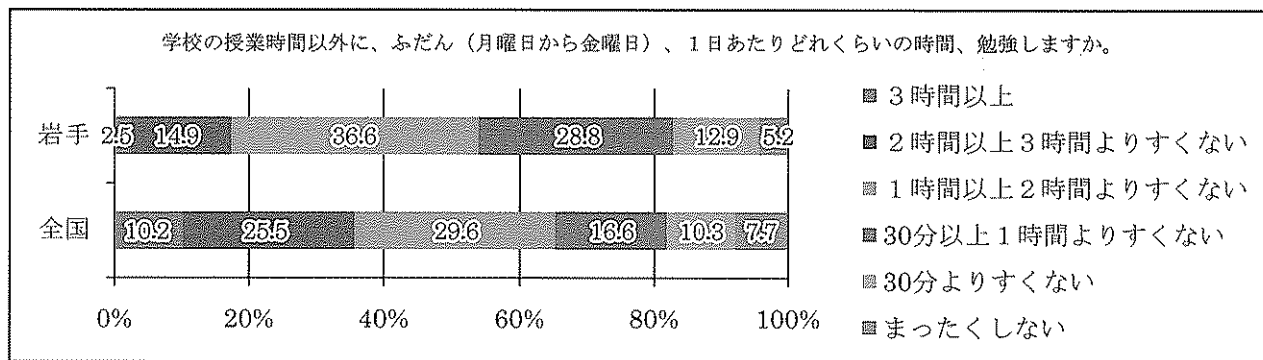
◇復習に、週1回以上(ほぼ毎日、ほぼ授業日、週1・2回)取り組んでいる割合が多いのは、数学80.5%、次いで、英語67%である。

(3) 分析と考察

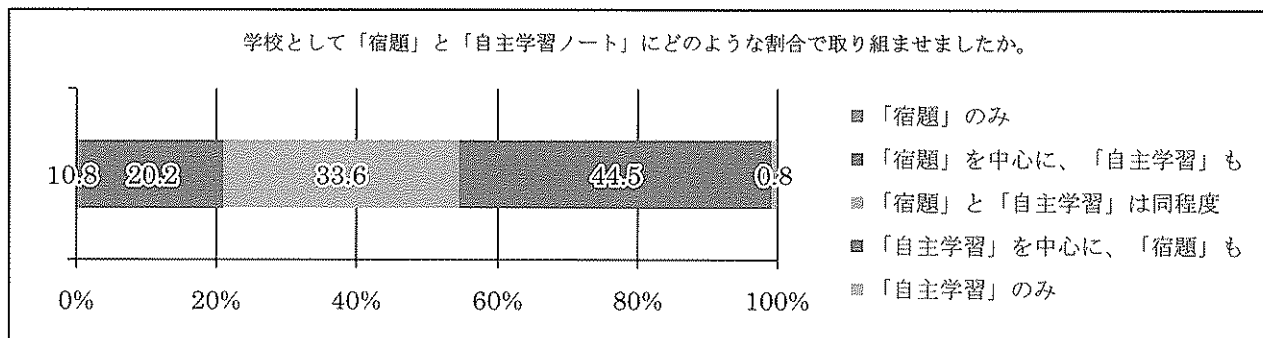
ア 家庭学習の取り組みについて

家庭学習の時間は短く、ながら勉強を行っている生徒は、小学校76.2%から比べると、中学校57.4%と減少はしているが、半数以上にのぼっている。家庭学習の妨げになっていると受けとめている保護者も多い。中学校においても、規則正しい生活習慣の確立が必要である。

参考【平成 21 年度全国学力・学習状況調査】生徒（中学 3 年生）質問紙(16)



参考【家庭学習実施状況調査・「宿題」と「自主学習」との指導の割合】



また、別の調査結果から家庭学習の習慣化には部活動も大きく影響していることが分かる。

イ 宿題と自主学習について

「自主学習」ノートの効果に関しては、疑問を感じている教務主任・教科担任が予想以上に多い。「自主学習」の意義を再確認しながら、取り組ませ方や「宿題」との時間配分については再検討が必要である。

ウ 家庭学習と部活動との関わりについて

家庭学習の集中を妨げる要因として、部活動等の活動等からくる疲労を考えている保護者は多い。生徒は帰宅後に休養をとることや短時間に集中することで家庭学習に取り組もうとしている。

生徒の課外活動時間、家庭で過ごす時間は限られており、適切な活動時間について学校、保護者、指導者間できちんとした話し合いが必要である。

部活動について具体的な働きかけを実際に行った保護者は全体の3分の1程度に止まっている。

エ 数学科の「宿題」指導について

教科別の予習に関する調査では、予習が難しいとされる理科を除くと、数学が最も低い割合を示し、数学科における「宿題」指導が、極端に復習

重視型であることが明らかになった。

復習重視の「宿題」指導が、本県に特徴的な指導なのか、さらには、この指導方法が全国学調における本県数学の低迷と関連があるのかどうかについては、数学を担当する指導者の協力を得ながらさらに調査・分析をする必要がある。

オ 指導方針・内容に関する共通理解について

小学校同様に、「家庭学習」の大まかな指導方針については共通確認を図っているが、具体的な指導方法や確認事項になると、学年や教科に一任されている現状が明らかになっている。

家庭学習の内容や事後指導の在り方について疑問を持っている保護者が多いことも真摯に受けとめる必要がある。

宅習（家庭学習）に取り組む生徒とその背景

— 宮崎市立宮崎西中学校視察報告 —

総合教育センター

1 はじめに

全国学力・学習状況調査の結果を受けて、本県は、特にB問題の平均正答率が中学校段階で低迷していることが指摘されている。

その要因を分析するために、本県と各県の小学校段階（第6学年）と中学校段階（第3学年）の平均正答率を比較したところ、宮崎県の調査結果に目が留まった。

宮崎県と本県とでは、小学校段階では平均正答率に大きな差は見られないものの、中学校段階では、本県が伸び悩んでいるのに対し宮崎県は大きく伸びていることが分かった。

この違いはどこから生じるのか。本県の教育を考える上で非常に興味深く、宮崎県の教育に注目し、宮崎県教育庁と同庁から紹介された宮崎市立宮崎西中学校を視察した。

2 中学校で大きく伸びている宮崎県

表1は、平成21年度に実施した全国学力・学習状況調査における全国の平均正答率と、宮崎県、岩手県それぞれの平均正答率との差を表している。

表1のとおり、小学校段階では、両県の平均正答率に大きな差はないことが分かる。強いて指摘すれば、岩手県は小学校段階では全国平均をやや上回り、宮崎県はB問題が、全国平均と比較して下がっていることが分かる。

ところが、中学校段階では、宮崎県では国語B、数学A、数学Bの平均正答率が全国平均に対していずれも高くなっているのに対して、岩手県では逆に国語B、数学A、数学Bの平均正答率が全国平均に対して下回っていることが分

かる。

【表1】全国学調 宮崎県と岩手県の比較（H21）

小学校	小国語A	小国語B	小算数A	小算数B
宮崎県（差）%	+1.9	-1.3	+1.1	-3.7
全国平均正答率%	69.9	50.5	78.7	54.8
岩手県（差）%	+1.3	+2.5	+1.3	+0.5

中学校	中国語A	中国語B	中数学A	中数学B
宮崎県（差）%	+1.0	+2.7	+2.1	+0.3
全国平均正答率%	77.0	74.5	62.7	56.9
岩手県（差）%	+1.2	-0.3	-4.8	-3.9

3 宮崎西中の実践から本県との相違を探る

(1) 沿革と教育目標

宮崎市立宮崎西中学校（以下宮崎西中）は昭和24年、宮崎市立宮崎中学校が宮崎東中学校と宮崎西中学校に分割され創立された。

南国宮崎を象徴する美しいヤシの並木で知られる橘通りの西側に隣接し、宮崎一の繁華街を学区に有する。

「自問清掃」と呼ばれる清掃活動を生徒の健全育成の柱の一つとして位置付け、文武両面において成果をあげている。校舎玄関脇には、生徒を見守るように「自問」のブロンズ像が立つ。

教育目標は「確かな学力をそなえ、豊かな体験をとおして、知性と感性を磨く」であり、教育目標の達成めざして五つの重点指導事項が掲げられている。

平成21年度4月現在の学級数は17。生徒数は578名。職員は45名。

宮崎西中の重点指導事項

- ・「確かな学び」を保證する指導の充実
- ・地域教育の推進
- ・小・中学校の連携教育推進
- ・積極的な生徒指導の推進
- ・教育環境の整備・活用

宮崎西中の宅習

- ・宅習の内容は、課題として学校が提示する。
- ・宅習の内容は、各教科から均等に提示する。
- ・宅習のノートが終わる度に学級で賞揚する。

(2) 3年生 51.5%が2時間以上勉強

宮崎県の中学生はなぜ大きく伸びるのか。全国学力・学習状況調査の調査結果を見ると、宮崎県の生徒は、家庭学習によく取り組んでいることが分かる。

宮崎県と岩手県の普段（月～金曜日）の家庭学習時間を比較してみると、1日当たりの勉強時間が「3時間以上」と「2時間以上、3時間より少ない」と回答した児童生徒を合わせた割合は、小学校では宮崎県が33.9%、岩手県は16.3%、中学校では宮崎県が43.1%、岩手県は16.5%となっている。小学校で2.1倍、中学校で2.6倍の開きがみられる。

その中でも、宮崎県教育庁から紹介された宮崎市立宮崎西中学校は、実に51.5%の生徒が、1日当たりの勉強時間が「3時間以上」または「2時間以上、3時間より少ない」と回答している。

(3) 家庭学習（宅習）の内容は課題が中心

それでは、宮崎県の生徒が毎日取り組む家庭学習の内容はどうなっているのか。

宮崎県では家庭（自宅）学習を宅習（たくしゅう）と呼んでいる。この宅習について、宮崎県教育庁の担当者は、「宅習は、担任が課題を出し翌日点検している。宅習に生徒が取り組むことは当たり前であり、県としては特に力を入れた取り組みはしていない」と説明した。宅習は、宮崎県に根付いた取り組みと受け取られる。

宮崎西中の事例では、平日の宅習の取り組みは概ね次のようになる。

(4) 週末は数学と英語の課題を集中的に

平日は各教科から均等に課題を提示するが、土日は「週末課題」と称して英語と数学の課題を重点的に提示している。

週末課題は、各学年の教科担任がプリントを用意し、学年として提示している。

金曜日の課題は、普段より多く出され、生徒はこの課題に土日に取り組んで月曜日にはきちんと提出するという。未提出者がいれば、月曜日の昼休みに取り組ませるといふ。

全国学力・学習状況調査の調査結果では、宮崎県も宮崎西中も、土曜日や日曜日に勉強する生徒の割合は、全国と比較して高く、週末課題に取り組む生徒の様子は、調査結果からも裏付けられている。

(5) 部活動は県内一斉終了、一斉下校

本県の中学校では、家庭学習と部活動の指導は切り離せないと考えている教員が多い。「部活動を終えた生徒が、家庭に帰って学年プラス1時間の家庭学習をすることは難しい」という声はしばしば聞かれる。

宮崎県ではどうなのか。宮崎西中に部活動の様子を尋ねてみた。

宮崎西中では、表2のように部活動時間が決められおり、部活動後にスポーツ少年団としての活用もなく、部活動と家庭学習が生徒の課外時間を奪い合うような状況にはないという。

終了時刻と下校時刻の間の15分間は、更衣の時間で、宮崎西中生は全員制服に着替えて下校し、生徒の下校時には先生方が街頭に立ち下校指導をしている。部活動の下校時刻は宮崎県内で統一され、下校時の街頭指導も県内一斉に行われるという。

宮崎西中は、地区大会・県大会での優勝、上

位入賞はもとより全国大会でも活躍している。限られた練習時間で大きな成果を上げているのは、部活動のねらいが生徒と指導者に浸透しているからかもしれない。

宮崎西中の部活動のねらい

- ・部活動は学校教育の一環として行う。
- ・学校教育活動と関連付け、生徒一人一人の全人格的成長を促す。
- ・生徒が自ら主体となり、日々の活動が実践されるように配慮する。

宮崎西中の部活動は、生徒の家庭学習の時間を十分保証しており、生徒は、制服に着替えて下校することにより、気持ちの切り替えもしっかり行っているという印象を受けた。

付け加えて、宮崎県の中学生は、家の人と、夕食を一緒に食べている割合や、家の人と学校での出来事について話をしている割合も高い。部活動の状況をみると、納得できる結果である。

【表2】宮崎西中の部活動終了時刻

時 期	部活終了時刻	下校時刻
4月・5月	18:30	18:45
6月・7月	18:45	19:00
夏季休業中	7・8月は別途計画	
9月(15日まで)	18:30	18:45
	30日までは18:15終了	
10月・11月・12月	17:30	17:45
	10月は秋季大会以降	
1月・2月	17:45	18:00
3月	18:15	18:30

(6) 清掃指導「自問清掃」による健全育成

授業中、中庭のある三階建て校舎には授業者の声と生徒の活動の音だけが静かに響く。どの学級を見ても服装や髪型に乱れのある生徒は見当たらない。宮崎西中から宮崎一の繁華街を学区に抱える学校という印象は全く受けなかった。気が付くのは、校舎の隅々まで行き渡った清掃である。

校長先生が「宮崎西中学校の誇りは清掃活動です。時間があれば、ぜひ清掃活動をお見せしたかった」というように宮崎西中は「自問清掃」と呼ばれる清掃活動を生徒の健全育成の柱の一つとして位置付けている。

宮崎西中の清掃活動「自問清掃」は、県内外から注目され、自問清掃を見るための視察も多

いという。

宮崎西中の生徒の一人は、自問清掃を「自分の心を見つめ直す時間」と題して「ざわついた校舎に／突然鐘が鳴り響く／一瞬のうちに静まりかえり／心を清める 集中する／鐘が鳴り止むと／掃除用具の音がする／十分間の短いようで 長い時間／自分の心を見つめ直すには／十分な時間／鐘が鳴り 静まりかえる／目を閉じて思う明日もがんばろう」と表現している。

校舎の隅々まで行き渡った清掃。戦前に建てられたという古い校舎が輝き続けている理由がうなずける。

宮崎西中の自問清掃

【自問清掃の目的】

自問清掃は、(生徒たちが)自分の清掃態度はこれでよいのか自分に問い直しながら、自分で考え、自ら進んで行う清掃であり、「自律の心」「自問の心」「敬愛の心」「感謝の心」の四つの心を養うことを目的としている。

【自問清掃の大まかな流れ】

- ①予鈴で清掃場所へ移動する。
- ②本鈴で黙想し自己決定する。
- ③10分間の無言清掃。
- ④終鈴で黙想し自己反省する。

(7) きめ細やかな表彰規定

宮崎西中学校では「常に生徒の生活全般にわたって十分に観察調査し、各種表彰に遺漏があってはならない」という表彰規定を設け、以下の項目に該当する生徒(団体)を日常的に表彰している。

ア 善行賞 イ 自治功労賞 ウ 部活動功労賞 エ 特別表彰 オ 皆勤賞 カ 他の団体からの表彰

これらの表彰は、校内の表彰委員会が行い、例えば、部活動功労賞は「人間性に優れ、特に率先して他の部員をリードし模範となった者」に与えられ、皆勤賞は、1年間無遅刻、無欠席、無欠課であった者には「若草賞」、3年間無欠席であった者には「青雲賞」、3年間無遅刻、無欠席、無欠課であった者には「フェニックス賞」が与えられる。

表彰は、きめ細かに行われ、「生徒の希望と

意欲を高めたい」、「生徒の人間形成に資する刺激を与えたい」という職員の願いが込められている。

(8) 筋の通った学校経営

宮崎県教育庁の担当者は「宮崎西中学校さんは、木村校長先生（平成21年度退職）の力強いリーダーシップのもとで、筋の通った学校経営をされている」と同校を紹介した。

全職員が学校経営に参画している様子は、宮崎西中の職員の応答からも強く感じることができた。一例に過ぎないが、生徒の服装や頭髮に乱れが見当たらないことに対する質問では、生徒指導担当者が「以前は、荒れた時代もあったと聞いていますが、今はこの通りです。大声で生徒を指導するような場面はありません。生徒に何かあれば、気づいた時にその都度声をかけてあげればほとんど直ります」と自信をもって応え、大学生がT2として机間巡視していることの質問に対しては、教頭先生が「近くに大学が多いものですから、大学生に授業のサポートをお願いしています。教職を目指す学生さんにとっても、本校にとってもメリットは大きい」と効用についても説明してくれた。

レポートは、平成21年度の岩手県教育研究発表会との関わりから、家庭学習と部活動を中心に報告をまとめている。同校の筋の通った学校経営は、これまでの紹介以外に、①めざす教師像や校長として努力したいこと、教職員の合言葉まで盛り込んだ学校経営の基本方針、②学校経営ビジョン、③各教科の数値目標、④NST（西中生徒タイム）と銘打った総合的な学習の時間、⑤学校と家庭と地域との連携が教育の基礎という考えに立った地域教育の推進、他にも地区生徒会と自治会の連携の推進、⑥ハートフル委員会の活用によるいじめの防止など、上げればきりが無いほど細部に行きわたっている。

これらの実践の詳細については、次の同校のWebページにも掲載されている。

<http://www.mcnet.ed.jp/miyazaki-nishi-c/>

(9) 本県との相違点

全国学力・学習状況調査の調査結果と宮崎西中の視察から、宮崎県と本県との相違点として「家庭学習時間」、「家庭学習の内容」、「部活指導」が浮かび上がった。

本県の学力向上対策の一環として、家庭学習の習慣化の指導、家庭学習の内容の吟味には早急に取り組む必要があると感じた。

あわせて、家庭学習の習慣化には部活指導の改善も同時に進める必要があると感じた。

4 おわりに

宮崎県は現在「明日の宮崎を担う子どもたちを育む戦略プロジェクト」の第2期目標として「県民総ぐるみで子どもたちの「人間力」を育む教育の推進」に取り組んでいる。

その中で最も力を入れているのが「学校・家庭・地域が一体となった教育環境づくりの推進」であり、成果を確認し合いながら着実に推進させているという。

成果は、全国学力・学習状況調査の調査結果にも表れ、以下の設問は、いずれも全国トップとなっている。

家庭学習に取り組む生徒を育む手立てとして「学校・家庭・地域が一体となった教育環境づくりの推進」は見逃せない活動である。

宮崎県が全国トップとなった設問

- ・自分にはよいところがあると思う。
- ・将来の夢や希望を持っている。
- ・家の人と平日一緒に夕食を食べている。
- ・家の人と学校での出来事について話をする。
- ・学校のきまりを守っている。
- ・近所の人に会った時に挨拶をしている。
- ・平日にテレビ、ビデオ、DVDを見る時間が2時間以内。
- ・外に出て遊んだり、運動・スポーツをして体を動かす。
- ・学校で好きな授業がある。
- ・算数の勉強が好き。
- ・学校の授業以外に平日1時間以上勉強する。

(報告者 鈴木利典・齊藤義宏)



「三高改革」の中での校内研修

岩手県立盛岡第三高等学校
指導教諭 鈴木 徹

1 OJT を担う経営企画課

平成18年の未履修問題では本校にも激震が走った。従来型の膨大な課題や早朝課外などに代表される、物量戦による進学体制は抜本的な見直しを迫られることになっただけでなく、本校のあるべき姿をあらためて考え直すきっかけともなった。いわゆる「三高改革」のスタートである。

一連の改革の中で強く叫ばれたのが、課外・課題のスリム化（現在は適正化という表現を使用）である。これに対応して、授業も1コマ5分増の50分×7コマとなり、量から質への転換が始まった。課題の量や課外で生徒に学力をつけていくのではなく、授業そのもので学力をつけさせるという方針である。これは改革の中での必然の帰結であり、本来のあるべき姿であろう。

授業で勝負するためには教員の授業力向上が欠かせず、そのためのOJT（On the job training: 勤務する学校での現場研修）を担当することとなったのが、「三高改革」の目玉として立ち上げられた経営企画課である。

2 三高スタイルの授業公開 ～見て学び、見られて磨かれるために～

本校のOJTの中核として位置づけたのが、授業公開である。

高校の授業の多くは専門に分化しており、教科担任制の中で教員は一国一城の主となりやすい。他者の授業を見て学び、他者に見られて磨かれることは理解しているものの、教科や科目の枠もあるため、実際には他者に学ぶ姿勢が育ちにくい土壌がある。そこで、授業公開を学校文化として定着させていくために、以下のような取り組みを推進した。

まず、公開の機会を増やすため、PTA関係の行事や、中学や、他の高校からの訪問、教育実習期間などの対外的な機会には、常にすべての授業を公開し、その授業は教員誰もが見学できるものとした。

これとは別に、いわゆる研究授業として行う授業公開は、各教科グループで年に複数回を行うこととした。この場合、指導案を課すことはなく、本校独自の「授業公開シート」（【図1】）を作成するものとした。

このシートは授業のコンテンツよりも「観点」や「方法」などの授業のスタイルを重視しており、専門の隘路に迷い込むことなく、教科や科目の枠を越えて誰もが学べるものである。なお、平成22年度は30回を越える授業公開が予定されている。

さらに大規模校で陥りがちな学年主導體制から生ずる弊害である学年間の連携不足を解消しようとして考え出されたのが、「教科・科目事例発表」である。これは、教科や科目で、3年間を見通した継続的な指導理念や方針、および成果を発表するものであり、蓄積した有用なストックを、学年を越えて共有しようとするものである。（【図2】）

両者とも、いわゆる「授業研究」や「研修会」などと銘打って実施するものではなく、前者は事後には参観者からコメントを記入したシートが授業者に返却され、改善の糧となすものであり、後者は職員会議での報告事項とし、共に過重な負担や堅苦しさは極力除外し、より身近なものとして学び合えるものとした。

こうした種々の取り組みの中で、本校では授業を公開することは学校文化として根付きつつあると言えるだろう。

3 「制度」から一步踏み出す校内研修

前述の三高スタイルの授業公開は、「授業力向上のためには授業公開は欠かせない」「授業は見たり、見られたりするもの」という空気を醸成してはいるものの、この段階ではいわば経営企画課による「制度」であり、そこにはある程度の強制の色彩が残る。「制度」から一步踏み出し、相互に刺激し合いながら、授業力向上をごく当然の業務として取り込んでいくには、これにプラスして自主的、自発的なムーブメントを期待したい。

この中で注目すべき動きがあった。平成21年度に本校の地歴科3学年を担当する3名が、学力向上をめざして共同研究を進めたのである。「制度」によるものではない、自己啓発的な研究および実践として評価したい⁽⁴⁾。

この研究は、3名の話し合いの中で、われわれ教員が生徒に「求めている学力」と、学習指導要領で「求められる学力」が乖離しているのではないか、そしてこの乖離が学力低迷の原因の一つになっているのではないか、という意見が提示されたことからスタートした。世界史B、日本史B、地理Bの担当者が学習指導要領をそれぞれの科目レベルで分析し、その中で、何が求められているのか、つまり「求められる学力」とは何かを適確に把握してゆこうとしたものである。そして、ここで把握した「求められる学力」に対応するために、どのような授業を展開すべきかを模索しあい、実践したのである。さらにこの実践の検証を、当該年度のセンター試験で得られた本校生徒の得点データから行ってみるといふ、過去に例を見ないものであった。結果として平成22年度センター試験での平均点は、3科目とも設定された目標値を大幅に上回るという画期的な成果を得た。

この一連の研究・実践を通して、結果として担当者の授業は「求められる学力」を定着させることを強く意識した授業スタイルとなり、生徒からの授業評価も極めて高い。「制度」から一步踏み出した研究および実践が、生徒の学力向上に確実に資することを示した好例である。

なお、この共同研究には、昨年度は途中から公民科担当者も参加、今年度は同様の試みが若手の地歴科教員の中で動き出している。また、これを聞きつけた他校の教員の見学もあり、さ

らなる連鎖反応も期待される。

4 「Dプラン」導入による教員の意識変化

上記の共同研究が「制度」から一步踏み出せた背景には、「三高改革」でもう一つの目玉と位置づけられた、「Dプラン」の存在があったと考えられる。

当初、この「Dプラン」は総合的な学習の時間に、ディベートを中心に進めていくものとされた。しかし、施行までのリサーチの中で、ゴールはあくまでもディベートの実施であるが、このディベートに至るまでの過程を重視していくことが、本校にとってふさわしいものと考えられるようになった。そこで「Dプラン」の基本理念を「自ら考え、自ら学び、自ら発信」とし、ディベートに到達するまでに、必要となる情報収集力や思考力、判断力、コミュニケーション能力等を涵養していくものとした。大局的には「生きる力」を育むものであると表現できよう。(【図3】)つまり、「Dプラン」でめざしているものは、われわれ教員が授業を通して追求すべき、「求められる学力」を涵養することと方向性を一にしており、その意味で「Dプラン」と授業は相乗し合うものである。

この「Dプラン」導入後は、教員の意識に明らかな変化が見られた。学校満足度調査によると「教員が重視していること」という項目では、「受験指導」が激減し、「考えさせること」「わかりやすさ」に大きくシフトした。教員の意識に変化が見られた時点で、「制度」から一步踏み出す素地はできたと考えられる。

5 なぜ、校内研修なのか

1から4において、本校の校内研修のあり方について述べてきたが、ここからは、なぜ校内研修が必要なのか、という根本的な問題について論じたい。

校内研修でめざすのは授業力の向上であり、それは生徒の学力向上と表裏一体の関係にある。特に、学力低迷という大きな課題を抱える本県では、すべての教員が授業力向上に正対しなければならない。生徒の学力に責任を負うべき教員である以上、自らの授業力の向上にも責任を持たなければならない。

以下は、本校での校内研修を通して見えてき

た、授業力向上にかかる「内容」と「方法」の改善の指針を示したい。

(1) 「求められる学力」を把握する

授業の「内容」については、3で提示した取り組みが示唆的である。学習指導要領において「求められる学力」と、われわれ教員が「求めている学力」に乖離はないだろうか。学習指導要領による学力観に対して、教員が抱く学力観が異なれば、当然ながら生徒の到達点は異なり、「求められる学力」に比しては低学力という評価が得られる。

この乖離について、ありがちなのが、知識量の増加を学力の向上とはき違えることである。これは経験を積んだ教員も、若手教員も、さらには生徒も陥りがちな問題でもある。

経験とともに教員には知識が蓄積していく。この場合、適切な精選を経ないと、結果として教科書レベルを大幅に超えた、知識注入型の授業になってゆく恐れがある。

逆に、経験が少ない教員は不安を抱えるが故に、あれもこれも知識網羅型に陥ってしまい、これも生徒に覚え込ませる知識量を増加させてゆくことが予想される。

また生徒についても同様で、例えば大学入試に直面した時に、学力に不安があるとどうしても短絡的に知識量にすがってしまう傾向がある。

ここに教員と生徒間の負のスパイラルが生ずる。この場合、両者とも知識量が学力であると錯覚し、それを増やすことに執心してしまうのである。

しかし、学習指導要領で「求められる学力」の中では、知識はその一部分でしかない。この一部分のために、教員も生徒もその労力の多くを使い、他の要素である思考力や判断力、技能や表現力を涵養することをおろそかにしてはいなかったらうか。

(2) 生徒が「参加」できる授業

続いて授業の「方法」について考えたい。ここでの「方法」は、授業をどうすべきか、ということであり、いわゆる「授業のテクニック」については、控えたい⁽²⁾。

「三高改革」が進む中で、確実に浸透してきているのが、「参加」型の授業スタイルである。

授業は、生徒がそこに存在していればよいのではなく、生徒がその授業に「参加」していなければならない。生徒自身がプレイヤーとして主体的に「参加」できてこそ、授業は「求められる学力」を会得する場として機能するのである。

では、生徒を主体的に「参加」させるためには、授業はどうあるべきか。

それには、教員は情報の発信にとどまらず、発信と並行して、生徒が確実に情報を受信できるシステムを作り上げることが重要である。確実な受信があればこそ、授業の様々な場面で発信される教員からの情報を基に生徒は思考し、判断し、他者へ表現していきける。この一連の動きの中での生徒は、まさしくプレイヤーであり、生徒が「参加」することによって、授業での理解や定着も確実に促進されていくのである。

われわれ教員は、情報の発信にはかなりの工夫を凝らすのが、この受信システムの構築にはほれだけ配慮していただろうか。その授業に生徒は「参加」できていただろうか。

(3) 学力向上と授業力向上

(1)で示したとおり、学習指導要領で「求められる学力」とわれわれ教員が「求める学力」が乖離している限り、いくら教えても、いくら生徒が覚え込んでも、学力としては評価されにくいのである。また、(2)で示したように、すべての生徒が主体として授業に「参加」しているのであれば、学力として現れる諸データの数値は大きく異なってくるはずである。

われわれ教員は、「求められる学力」を適確に把握し、そして、いかにして生徒を授業に「参加」させていくかを考え、実践していく必要がある。これがまさしく授業力であろう。

この授業力を向上させるために、重要になるのが、2で触れた授業公開である。授業公開は、授業の「内容」と「方法」を学ぶ場として極めて重要であり、他者の授業を見て学び、他者に見られて磨かれるのは、この授業力に他ならない。授業力向上の本質は、まさにこの点にあり、これが本校のOJTの核心部分でもある。

6 「三高改革」の中での校内研修

かつての本校の体制は、本来めざすべきであった「生きる力」を正面から捉えたものではな

平成22年度 教科・科目指導 事例研究

かったことは否めない。

その意味で、原点に立ち帰ったのが、「三高改革」であるといえる。原点に立ち帰ったことによって、われわれ教員がめざすべきことが明確になったと言えよう。

前述した「Dプラン」の導入前の段階で、「生徒を変え、教員を変え、学校を変える」という考えが示されたが、まさしく今、それが現実になりつつある。ただし、現実になった時点で「三高改革」が完結するというものではない。そこからは「改善」が止むことなく続いてゆくのである。

したがって、本論のテーマである校内研修についても、あるいは授業に関しても、そこには完成型は存在せず、日々の、あるいは授業時間毎の改善型が登場してくるはずである。

【注】

- (1) 学力向上をめざした三高地歴チームの取り組み 岩手県立盛岡第三高等学校地歴科3学年担当【2010岩手県高等学校教育研究会 地歴・公民部会年報 社会科研究 第51号】で報告
- (2) 地理の学力向上と「わかる授業」の工夫について 岩手県立盛岡第三高等学校 鈴木徹【2010岩手県高等学校教育研究会 地歴・公民部会年報 社会科研究 第50号】で具体例を報告

事例発表	平成22年 6月21日	3年 国語科
1年次の状況	<ul style="list-style-type: none"> ・「国語は勉強しなくてもできる」という思い込み。 ・英語、数学に比較して学習時間の絶対量が少ない。 ・漢字力を含む、読解力の低さ。 ・文章の論理展開を追いかけろ力の弱さ。 	
方針・対応・対策等	<ul style="list-style-type: none"> ・学習習慣の定着を目指し、現古とも丁寧の読解を徹底。 ・教科リーダーを併り、授業案を共有。「書かせる」指導に重点。 ・現代文の週末課題は週2回ペース。古典の週末課題は基礎的な問題集から、月例テストで取り組みを促進。 ・漢文は白文音読テストを実施。 ・読書は漢字の問題集に。 	
2年次の状況	<ul style="list-style-type: none"> ・学習習慣は定着。 ・記述問題への抵抗感はさほどない。 ・受験学力測定テストでは比較的好成績。 ・模試平均点の激しい落ち込み（通年度比較では常に埼玉に劣る）。 ・上位者と下位者の開き拡大。が、上位層、中位層ともに高い。 ・弱点は漢文と小説。知識問題の得点率の低さ。 	
方針・対応・対策等	<ul style="list-style-type: none"> ・古典での単語テストの導入（全48回分を週2回ペースで2〜3冊） ・漢文は基礎からやり直し。丁寧な説明。 ・古典は週末課題の本文を全文口読かせ、提出の徹底指導。 ・朝学習では文法事項の復習（特に助動詞と敬語）。 ・現代文中心に読解指導（希望者60名程度）。 	
3年次の状況	<ul style="list-style-type: none"> （6月初旬現在） ・受験学力測定テストで好成績。弱点は漢詩と判別。 ・即戦ミテテストへの取り組みは今のところ良好。弱点は漢字の意味の類推。 	
方針・対応・対策等	<ul style="list-style-type: none"> ・漢文の最初の単元は漢詩。 ・知識問題の徹底習得を期したクイズの導入と効果的な小テストの実施（即戦ミテ、現代文単語、文法問題復習）。 ・早期の読解指導の導入（成績別による段階分け）。 ・土曜課外で2次の記述問題。平常課外で和歌の解釈対策。 ・意味類推の力をつけ、漢文を得点源にできる生徒にしたい。 ・2次科目で国語を学ぶ生徒が多いようなので、記述問題に堪える思考力と表現力を、授業や読解指導を通して身につけさせたい。 ・目標はセンター全国平均+2.0点。 	
その他・今後の展望等		

【図2】教科・科目指導 事例研究

校訓

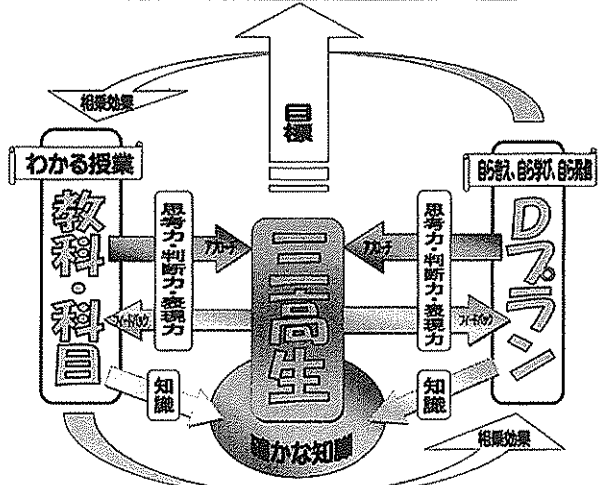
随処為主

「どんな場合にも主体性をもって臨みなさい。
そのことは、世界のいかなる変化にも対応できる生き方なのです」
※学習指導要領「生きる力」と同様

校内研修用 授業公開シート			
実施日 時間	平成22年6月14日(金) 3時間目		
授業担当	佐々木直人		
教科・科目	地理B	対象クラス	3年3・4組(3-4)
単元等	オーストラリア地誌		
本時の狙いやポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・地誌分野は、教科書前半の系統地理学的内容が基本となっているため、新しく習う内容も多いが、復習の役割もある。生徒には過去の内容を思い出させながら、タテ(系統地理)とヨコ(地誌)の両面から、総合的に地理理解を深めていく。 	参観者コメント	
指心・意欲を促すための工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・視物の提示(過去の地図、オバールの原形) ・授業者が訪れたことがある国なので、エピソードを交えながら説明する。 ・自作のプリント使用。()に単語ばかりを入れるだけにならないように、地図や統計、短文なども記入できるようにしている。 	参観者コメント	
思考力・判断力をつけるための工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・地図や統計を作成させながら、地形・気候・産業・植生・貿易といった複数の要素からオーストラリアを総合的に理解していく思考力や判断力をつけさせる。 	参観者コメント	
表現力や理解を深めるための工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・地図を指かせて、地図上に直接内容を記入することで、理解を深めていく。地図を通して緯度経度など基本的な事項を常に留意させる。 ・地図や資料の判別は、受験地理(特にセンター試験)には必要なスキルである。授業を通して見方、考え方を養っていく。 	参観者コメント	
基本的な知識等を定着させたり、理解を深めさせるための工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・2年生で習ったものについては、質問しながら進めていく。 ・板書の地図は素早く描き、生徒にアドバイスをを行う時間を伴う。 ・本日は行わないが、普段は1つのテーマが終了したときに、若干の問題演習(10分間テスト、模試過去問等)を行うことで、内容の理解を深めている。 	参観者コメント	
その他の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書の順番で授業を行っているが、科目の特性で全ての地域を教科書で扱っていないという現状がある(入試は全ての地域から出題)。教科書ではオーストラリア地誌のみを扱っているが、模試では次回地誌、ニュージーランドやオセアニアなど近隣の地域を引き続き授業する。 	参観者コメント	

※ コメントのある方は、記入の上、授業者まで直接お願いします。

【図1】授業公開シート



【図3】Dプラン概念図(平成21年度版)

すずき とおる

盛岡第四高校、県教育委員会事務局、大船渡高校等を経て、17年度から現任校に勤務。22年度より現職。



■花巻東高等学校硬式野球部の指導を通して 人間は言葉をエネルギーにしてがんばれる

花巻東高等学校教諭・硬式野球部監督 佐々木 洋

先生方から学ばなければいけない立場ですが、今日は実践していることをお話します。

私は、将来プロ野球か社会人野球に行きたいと思って大学に行きました。でも、ひたすらさぼることばかり考えていました。その結果、プロ野球選手にも、社会人野球選手にもなれないどころか、ベンチにも入れませんでした。

なぜこんな人生になったのかと思って、時間があつたので、ひたすら本を読み始めました。そして、とんでもないことに気がきました。それは、小学校から何回もみんなに言われていた目標の話です。子どもの頃から夢を持ちなさい、目標を持ちなさいと言われ続けてきました。でも、右の耳から左に抜けていたのです。なぜその言葉が残らなかったかということ、目標の立て方は誰も教えてくれなかったからです。次に、夢がどうやったら実現するのか、実現の仕方に気がきました。そして、手帳に書きました。先日母校の黒沢尻北高校で講演があつて、その大学4年生の時に書いた手帳を生徒に見せました。それにはなんと、28歳で甲子園に出る、しかも最年少監督で出場すると書いていました。また、黒沢尻北高校で講演するとも書いていたのです。実はこの講演は12年前からスケジュールが決まっていて、校長先生からお電話をいただきましたが、電話するようにし向けたのは僕だよということを話しました。実際、28歳の時に甲子園に出ました。最年少監督の夢は達成できませんでしたが、分かりました。目標を立てると、達成できるかどうかは別に、目標に近づくのです。日本一、日本一と言っていると、達成できなかつたけれど、近づくのです。

そのことが分かり、今生徒に教えているのは、人生が夢を作るのではなくて、夢が自分の人生を作っていくのだということです。夢しか実現しません。私は医者にも弁護士にも歌手にもなりません。夢に描かなかつたからです。夢は逃げません。逃げるのはいつも自分でした。そこで目標がいかに大事かを生徒に教え

ています。目標がその日その日を支配します。目標が人を動かし、言い訳は人をダメにします。あらゆる分野の方が共通して言っているのはこのことです。目標は二通りに働きます。一つはあなたが目標を目指すようになる。もう一つは目標があなたに働きかけてくれるようになるのです。

私は菊池雄星を育てた監督だと言いたいのですが、ほとんど育てることはできませんでした。彼は元々ああいう人間でした。ただ一つだけ、彼に目標、ハードルだけ与えていました。彼が高校に入ってきた時に、ドラフト1位でなければプロに行かせないと言いました。そうしたら、2年生になるといよいよ行きそうになったので、「おい雄星、複数の球団から来なかつたら行かせないぞ」と、どんどんハードルを上げていきました。そうすると本人もハードル越えようがんばったのですが、目標も雄星を引っ張ってくれたのです。

今生徒に一生懸命教えているのは、ゴールからさかのぼって現在の行動を決めなければいけないということです。未来の自分にとって正しいかどうかで今の行動を判断しなければいけません。医者になりたいから医学部に行く、そのために勉強しなければいけないというようにです。ある時菊池雄星に目標設定をしろと言ったら、プロに行つて日本一のピッチャーになることと言ったので、それは中間の目標だぞと言いました。日本一のピッチャーになるのはおそらく30から35歳の間です。でもまだ人生はあるので、その後の目標を立てさせました。ずうっとは投げられないよ、80歳まで140kmは投げられないよ、引退した後どうしたいかときいたら、学校の先生になりたいと言うので、では大学に行かなければいけないねということで、大学に行くことしました。今日、東北福祉大に合格しました。このように、ゴールからさかのぼって、先のことを描いて、今の行動をさせるようにしています。

「人生の悲劇は目標を達成しないことではなく、目標を持たないことである」という言葉が好きで、何か書かせてもらおう時に書いています。夢は、描いた瞬間に向こうから勝手に近づいてくれます。夢は、紙に書いた瞬間にさらに向こうから近づいてくれます。夢は、口に出した瞬間にもっと向こうから近づいてきてくれます。夢は、具体的な目標と具体的な計画で行動を起こすと、もっともっと向こうからもこちらからもお互いに具体的に近づきます。夢は毎日口に出し、目標を張り出し毎日確認すると、毎日毎日お互いに近づきます。生徒には「目標設定7原則」を作って配っています。①ワクワクするような目標（どきどきすること。こうなったら最高だ！）②はっきりと具体的に数値・順位・日にち目標は細分化し、具体的な行動ステップゴール日指定（大中小のステップ目標と長期・中間・短期、30年先・10年先・1年先・半年先・1ヶ月先・一週間・一日）③達成された時のご褒美と失敗した時の罰を用意する（喜びを書く。達成されないとどんな痛い目にあうかを書く）④目標が達成されたイメージを常に楽しむ⑤行動を起こす（見える所に張り、何度も読み直し、情熱をもって行動する）⑥代償を理解する⑦ライバル設定、以上7点です。ある生徒は、30歳になったらボストンレッドソックス、年収10億、25歳で西武ライオンズ、3年生になったら大学にスカウトされるとか、目標を描いています。また、ある生徒はみずほ銀行に入りたいと書いて、そのためにどうするのかというシートに具体的に考えて書いていました。今その子は大学に行っています。具体的にセルフトーク、自分自身に投げかける言葉を書かせています。先生に言葉をもらってやる気もらえましたとか、それだといつも誰かに声をかけてもらわないと育たない人間になってしまいます。自分自身に投げかける言葉を自分で決めさせていきます。

野球部からの大学進学は、監督になってから1人だけだったので、進学率を上げようと思いましたが、絶対に国公立大学に行かせようと思い、今5年連続で岩手大学に行っています。東京6大学にも行かせるぞ、社会人にも出すぞ、プロにも出すぞと、ほとんど私が立てた夢は今のところ実現しています。

目標を具体的に紙に書かせて、室内練習場に貼っています。私が見ているからがんばるとか、先生がいるから勉強する、お母さんに怒られるから勉強するというようになると、お母さんが階段

を上がって来た瞬間は教科書を開いていますが、下りていった途端に閉めて、また漫画を開くことになるのです。だから、いつも自分の目標に管理されるように、目標を室内練習場にもウエイト室にも貼り出させて、目標にミサイル、ピストルを向けられて練習するスタイルをとっています。天井も目標だらけです。自分の貼ったものでもやる気になりますが、人を見てやる気になってきます。人間は言葉をエネルギーにしてがんばれるのです。

生徒にはなぜそこを目指すのか、どうやったら体重が増えるのかとか、自分で答を出させます。具体的な数値も挙げさせます。敵と戦う時間はとても短く、自分との戦いこそが明暗を分けません。目標設定に時間をかけて練習しています。

恩師に怒られて気付いたことがあります。私はどうしても野球を一方向的に教えてしまうきらいがあります。恩師が私の練習を見て「邪魔をしている」と言いました。邪魔をしているとは何事だ、俺も成長したのに、と頭に來ましたが、とにかく選手に練習メニュー立てさせてみると言われて、一冬取り組みました。負けたことで変わる自分がいたのです。恩師の言葉を受け止めて、練習メニューを立てさせました。そうして、春先になったら恩師の言う私が生徒の邪魔をしているということの意味が分かりました。4月になって、生徒の声がグラウンドに飛び交うようになっていました。何を邪魔していたかということ、生徒に考える力があるにもかかわらず、私が答を先に先にと出して、ひたすら考える力を奪っていたのです。

そういうことがあって、選手に考えさせる、魚を釣って与えるのではなくて、釣り方を教えてやるのが我々の仕事だということをも今思っています。ただ、子どもですから、所詮全部任せられるわけにはいきません。強力な規律のもとに、自由で壮大な発想力と、自分の力で生き抜く力を、監督として指導していくことが大事だと思いつつ、日々取り組んでいます。

どうもありがとうございました。

ささき ひろし

横浜隼人高校を経て、12年度から現任校に勤務。14年度より、野球部監督。

平成21年度第53回岩手県教育研究発表会 発表記録
実践発表 「生徒を育む」■不來方高等学校音楽部の指導を通して
音楽は幸せの魔法 — 歌い続けることの意味 —

不來方高等学校教頭・音楽部顧問 村松玲子

ただ今ご覧いただいたのは、今年度の全日本合唱コンクール全国大会の映像です。私はこのようにいつも世の中に背を向けて仕事をしております。今日は正面を向いてお話するので緊張しております。

私の高校の時の夢は何だったのか、先ほど佐々木先生のお話を伺って思い出していました。全国大会の指揮台に立つのが高校時代の夢の一つでした。また、生徒を海外の演奏旅行に連れて行くという夢もありました。その夢を不來方高校でかなえてもらったと今改めて思っています。私たちは、今まで応援して下さった方々にコンクールの金賞をプレゼントしたいという強い思いをいつも持っています。でも、賞のためだけに歌うのではなく、私たちは何のために歌うのか、この発表の機会に改めて考えてみたいと思います。

私たちにも活動目標があります。生徒が毎年立てます。活動内容は、まず年に1回の定期演奏会があります。それからコンクールやコンテストへの出場。そして不來方ならではの国際交流事業。2年に一度の割合で海外に公演に行っています。海外からの団体も受け入れています。そして年に30回ほどの、年間通して行われる訪問演奏、イベントへの参加があります。

まず、定期演奏会ですが、7月中旬の土曜日の夜と日曜日の昼の2回公演で、矢巾町の田園ホールで開催しています。今年度本校は完成年度から20年目を迎え、20回目の定演となりました。30曲ものさまざまな歌詞の曲を覚える1年生。裏方の仕事一切を引き受ける2年生。最後の定演に美しい涙を流す3年生。各地から集まってくるOG。そんな私たちを見守るたくさんの方々。定期演奏会は、夢をたくさんの方に味わっていただくステージです。そして歌い継がれていく「さとうきび畑」。この「さとうきび畑」については、後ほどまたお話しします。今年の定演では、校長先生も一緒に「高校3年生」を歌っていただきました。

一般的にはコンクールの成績は、評価の基準になりやすいと思います。私たちは全日本合唱

連盟主催の全日本合唱コンクール全国大会に出場16回を数えました。金賞を10回、文部科学大臣賞も3回いただいています。ラッキーなことに昨年度、今年度と、金賞と教育委員会賞を頂戴しています。でも、コンクールは自分を磨く場としてとても大切な場ですが、採点競技なので、結果がうまくいく時もそうでない時もあります。一生懸命最高の練習をしたら結果にはこだわらない、そう思えるようになるまでとても時間がかかりました。

ステージの袖では、「3年間がんばってくれてありがとう」と3年生と握手をします。この時、3年間がんばった自分との出会いが、3年生のその後の人生を支えていてくれると思います。コンクールは努力の成果を発表する場ではなくて、音楽に身を捧げる喜びを共有する場でありたいと思っています。コンクールは自分を磨く場。そしてこんなにもがんばれる自分との出会いが3年間の財産になるのです。高校3年間が、どんな苦勞もいとわずにこれから社会の荒波に立ち向かう力を培う3年間であるとしたら、切ない涙や悔し涙、悲しい涙を流しながら、結果がついてこない時もあった方が、人生の糧にはなると思う時もあります。いつも金賞でいたいのは当然です。今年も全国大会3位で悔しいと生徒は言いましたが、1位を目指してがんばりたいという気持ちとともに、私たちよりもっと上手な合唱団があったことに拍手を贈れる生徒を育て、コンクールを勝利の場所ではなくて、芸術の場として、自分を磨く場にしていきたいと思っています。

次に国際交流事業についてお話しします。最初に海外に行ったのは、1998年（フランスにおける日本年）に、文化庁から南フランスに派遣していただいた時でした。それから、ほぼ2年に1度、公立高校として海外公演を実施し、父母会ははじめ周りの方々のおかげと本当に感謝しております。でも実は行けなかった時がありました。2003年、イラク戦争が起こった時です。12月ごろまでは行くつもりで準備しておりましたが、1月になって状況が厳しくなっ

て、断念せざるをえませんでした。その時に出会ったのが、「さとうきび畑」という曲です。日本で唯一地上戦があった沖縄で、戦争で死んだお父さんを捜しながら歌う、ザワザワという曲です。戦争で海外公演に行けなくなった1年間、私たちはどうして歌うのだろうということを深く考える機会を得ました。翌年2004年の3月には、大学や社会に出て行った3年生、4年生、5年生、6年生まで一緒にフランス、イタリアに行きました。海外では、音楽だけが世界語であって、翻訳される必要がない、そこでは魂が魂に語りかけるといふ言葉を思い出します。歌わなければただの旅人、ただの高校生にすぎない私たちが、ひとたび歌い始めると、見知らぬ国の人々がたくさん寄ってきて、はじける笑顔とたくさんの拍手をくださいました。歌は国境を越えていくことを実感しました。そして私たちは平和への祈りを込めて折った2000羽の鶴を持って行き、聞いてくださった方々へ差し上げました。歌声は平和への祈りということを実感した時です。

イタリアではゴンドラの上でも歌いました。オーストリアでは現地のオーケストラやコーラスとご一緒しました。ウィーンのシュテファン大聖堂の前でも歌いました。歩いていけばただの高校生ですが、立ち止まってそこでひとたび歌い始めると、たくさんの方と一つになれる、心と心を結ぶことができるという、胸が熱くなるような経験をしました。子どもたちは、日本へ帰ってきても、どこでも歌っていました。いつでもどこでも誰とでも歌えるという、たったひとつの、たったそれだけのことによって、たくさんの方と心と心をつなぐことができました。シュテファン大聖堂でのミサでも演奏しました。リンツの教会でのコンサートでは「千の風になって」を歌いました。実はこのコンサートの前の日に、パートナー合唱団のメンバーの一人がガンで亡くなったのです。私たちは急遽「千の風になって」を英語で朗読して、手話を付けて歌いました。そこの教会にいらしゃった方々は、みんな涙、涙で、ありがとうと言っていたいただきました。海外からの団体もたくさん受け入れました。フランスやイタリア、去年はエストニア・タリンからエレルヘイン少女合唱団をお招きしました。

それから、訪問演奏、イベントへの出演です。年にたくさんの依頼をいただき、矢巾町内の保育園、幼稚園、そしていろいろな小学校にも行っています。中学校、また病院や老人施設等にも伺っています。歌声の源は愛、夢をかなえる力。その愛を歌声に変えれば、私たちはたくさんの方に愛を届けることができます。元気

づけようと思って行ったのに、勇気をもらってくるのは私たちの方です。そして、努力の先に誰かの笑顔があると思うと、自然に力が湧いてきて、どんなことでもがんばれると生徒は言います。いつでもどこでも誰とでも歌える、それは簡単なようでいて、そうでもない時があります。でも子どもたちはたくさんの方々と出会って、このような気持ちで歌えるようになりました。どこかに行って帰って来ると、必ず全員が一人一枚ずつお礼の手紙を書きます。最初は便箋の半分も書けなかった子どもたちが、だんだんに書きたいことがたくさんになってきます。文章を書くことで、「ありがとうございました。歌って楽しかった」「また歌いに行かせてください」といふ言葉が、最初は書いただけだったのが本当の気持ちになっていくのだと思います。たった一人のために心を込めて歌える合唱団になってほしいと思っています。

音楽は幸せの魔法だと言えます。被害者支援フォーラムの時には、半分以上の生徒がインフルエンザにかかり、12人で歌うこともありました。ある時、焼き肉食べ放題の店に行った時に、ここではまさか歌わないだろうなと思ったら、生徒が「先生、ご飯のお礼に歌おうよ」ここではアルバイトのお兄さんが一人でブスとしてお皿を運んでいました。食べ終わった後で、彼のために1曲歌いました。お兄さんは、今日働いていてよかったと笑顔で答えてくれました。その時、全国大会の指揮台に立つことも、海外に生徒を連れて行くことも私の夢でしたが、こうしてたった一人のために心を込めて歌える合唱団を育てることこそ、本当の夢だったのではないかなと思いました。

私たちの歌う意味、それは何だったのでしょうか。私たちは医者のように病気の方を助けることはできません。また、お金もありません。遠くで苦しんでいる方に寄付をすることもできません。世界中の苦しんでいる方とどうやってつながることができるか。私たちは歌うことでしかそれはできません。でも歌うことは私たちにしかできないことです。国境なき合唱人たちが、世界の人たちの幸せを祈って歌い続ける時、いつか世界平和が訪れると信じて、これからも歌っていきたいと思います。

ありがとうございました。

むらまつ れいこ

青山養護学校、軽米高校等を経て、2年度から現任校に勤務。

平成21年度第53回岩手県教育研究発表会 発表記録
実践発表 「生徒を育む」■ 雫石高等学校保健委員会の指導を通して
本当の自分と向き合う子どもたちを応援したい

雫石高等学校養護教諭・保健委員会顧問 折 館 美由紀

本日の発表では、驚くことがたくさんあるかと思いますが、包み隠さずお伝えします。

本校の保健委員会は、ライフスキル教育の一環としてピア・エデュケーション（仲間教育）の活動を行っています。

本校の生徒数は200名程度で、生徒たちは雫石町、盛岡方面、田沢湖方面から通学しています。私は平成13年度から勤めておりますが、生徒の問題行動が非常に多くあり、平成13年度の時点でも生徒数の約11%が、退学したり特別指導を受けたりしておりました。このままでは、学校本来の教育環境が整わないことと、勉強したいという生徒の意識を醸成できないと思いました。そこで本校が抱えている様々な思春期特有の課題を学校保健委員会で提示したところ、早期対応が必要であるとの結論となり、その席上で生徒たちが「自分たちの課題は自分たちで解決したい」という意見を述べ、ライフスキル教育を平成14年度から導入しました。本校のライフスキル教育は授業での学習とピア・エデュケーション活動（保健劇）の二本柱で行っております。保健劇を開始した次の年、平成15年度から問題行動が減少しました。並行して「Q-U心理検査」も実施し、効果を検証しています。

保健劇とは造語で、東京の西川路先生が始めており、「Don't Do DRUGS」（日本教育新聞社出版）の中に掲載されております。では、保健劇をお見せします。

>>>保健劇映像>>>

映像にもありましたが、生徒たちが自分たちで台本を制作し、パソコンで映像編集も行います。

劇のメンバーは基本的に保健委員会で、有志の参加もあります。メンバーの所属している部活動は、野球、バスケットボール、サッカー、

吹奏楽、郷土芸能委員会など多岐にわたり、そろって練習する時間はほとんどありません。保健委員会の活動時間は、生徒がそれぞれの部活動が終了した後になります。土日の部活動終了後や、練習試合が終わり、帰校するのを待ってから、練習を開始することもあります。このように過酷な委員会活動ですが、開始当時から伝統になっており普通に活動をしています。

劇のメンバーは、停学経験者、小中学校で不登校の生徒、自傷行為のある生徒、進級が危ぶまれるほど授業出席率が低い生徒、いじめの主犯格とその被害者、家庭事情のために部活動・他委員会活動ができないが何か活動をしたい生徒、逆ギレで暴言・暴れる生徒、勉強が大嫌いな生徒、教師・大人が大嫌いな生徒、優等生という殻を被った責任転嫁の生徒、生徒会役員など、様々な背景のある生徒がいます。この生徒（画像）は、いわく付きで入学をしてきましたが、素晴らしい変化を遂げました。その過程を映像でお見せいたします。保健室の様子も一緒に見る事ができますので、ご覧ください。

>>>テレビ映像>>>

映像のように保健室は毎日多様な状態です。

そして、この生徒たちはいつも話してくれます。「私たちは1回の失敗をわかってもらえず、許してもらえなかった。認めてもらえなかった。だから自分で自分を傷つけてきました。そして他人も巻き込んできました。そうして助けてと発信したのですが、その結果、見捨てられてきました」と。「でも変わりたい。でもその方法がわからない。教えてください」と。高校に入学して2年生の途中くらいまでは、トラブル続きで落ち着きません。保健劇に参加させ、本気で自分で答えを見つけることを約束して、1年がかりで劇を制作します。この制作過程が自分と向き合う、とても重要な時間になります。中心となるテーマは

「人権と命の尊厳」で、薬物乱用防止、出会い系サイト、性の問題、虐待、いじめ、エイズ、自殺、DV、携帯電話の誹謗中傷等を、現在までに制作してきました。台本テーマは、文化祭後、全校生徒にアンケートを取り、その結果から来年度の劇のテーマを決めます。台本制作は、実体験も入れて制作します。よりリアルにするために、盛岡西警察署を訪問し、法的根拠や文言、台本の中にある事件の現状等、様々な指導を受けます。指導を受けた生徒が保健劇関係者全員に指導内容を説明します。そこで、自分たちがどれだけ無知であったかを知り、ここから次第に生徒たちがスキルを磨きながら行動に変化が現れてきます。

また、夏休み中に2日間ほど岩手県立教育センター情報教育室の協力で生徒たちが動画編集技術を学びます。この様な準備をして、全体練習に入ります。演技担当者、パソコン担当者、音楽担当者等、普段経験したことのない練習に入ります。

ここからの過程が、とても重要になります。この過程の中で自分と向き合う場面に、何度も遭遇します。自分たちで制作している台本なので自分と重なるところがあり、辛いのです。しかしきちんと正面から向き合わせます。そうして「自分たちも社会の一員だったのだ」と気が付き、自分の経験が誰かの役に立っていること、自分の経験をさらけ出すことで、自分に自信が付いていきます。活動が進んでいく中で、どんなこととぶつかるのか、その様子を映像で、お見せいたします。

>>>テレビ録画映像>>>

活動を通して様々なことに気が付いていきます。生徒たちは「全てを失ってこそ得るものがある」ということを知ります。「今までは、みんなから非難されたり、厄介者扱いされたりしてきたのに、自分の経験が役に立っていて、感謝されているんだよ」と、驚きながら、うれしそうに教えてくれます。

この女子生徒（画像）は、友人関係のトラブルが原因で中学校2年生から適応教室に通学して、雫石高校に入学しました。入学式以降、ほとんど登校していなかったのですが、文化祭の保健劇を見て、劇に参加するようになりました。さらに2年生から教室に復帰し、卒業しました。その彼女を支える学年団の連携と家庭の協力も素晴らしかったです。サングラスをし

て、ピースをしている男子生徒（画像）は、学校を途中で辞めました。辞める前は校内で、かなりやんちゃなことをしておりました。保健室では保健劇のDVDを見ながら「先生が嫌い。あいつヤダ、こいつヤダ」と話していました。学校を辞める時、仕事だけは絶対に辞めるなど約束しました。今は会社の方々に可愛がられて仕事をしています。よく仕事の様子を報告しに来ます。その度に表情が引き締まり社会人らしくなってきます。この女子生徒（画像）は、対大人・教師不信が強い生徒でした。ある日、母親から数日帰宅していないと連絡があり、探しに行きました。彼女はいましたが、自宅には帰らないとの一点張りでしたので、本人は無事だという連絡を母親にして、その日は一緒に過ごしました。ある日、自殺未遂をしました。家族の了解のもとに入院をさせました。いろいろありましたが、無事卒業し、現在はバスガイドとして働いています。

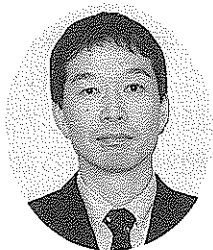
このようにいろいろな生徒が入学してきますが、さりげなく遠目で、そして時には近く関わっています。私は雫石高校に入学してくる生徒たちが大好きです。生徒の本質は「誰か見つけてください」と、堅い鎧の中に、ひっそりと隠れています。それを見つけて、存在価値を十分に感じさせる時間を作ります。そして絶対に孤立させず、自分の力で自立させていく援助をしています。それが保健委員会の保健劇チームであり、ピア・エデュケーション活動です。とても大変です。しかし、次世代を担う生徒たちの可能性が開花する喜びは、何にも変えが難いと思っています。

9年間は決して平坦な道のりではありませんでした。

活動には、校内の先生方、そしてたくさんの方にお世話になっております。本当の自分と向き合いながら活動をしている子どもたちを応援して下さっている皆様に本当に感謝したいと思います。

おりだて みゆき

広田水産高等学校、釜石北高等学校を経て、13年度から現任校に勤務。



中学校国語科・数学科・英語科における学力向上を図るための研究
 - 「いわてスタンダード」から「Gチャレンジ」までの取り組みについて -

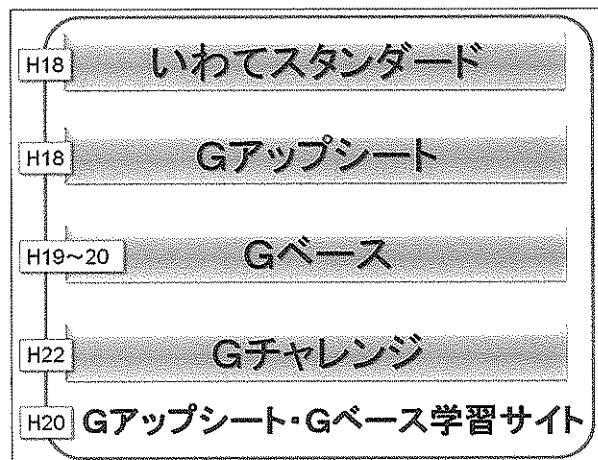
岩手県立総合教育センター
 研修指導主事 奥田昌夫

はじめに

岩手県教育委員会と岩手県立総合教育センターは、平成18年度に中学校国語科・数学科・英語科の指導と評価の一体化を図るための参考資料として「いわてスタンダード」を作成し、これに対応した評価問題を「Gアップシート」として作成した。平成19年3月下旬には13種類の冊子を、同年4月上旬には、CD版を各中学校へ配付している。

さらに、当センターでは、「Gアップシート」の活用を促進するために、作成した問題をコンピュータやインターネットでも利用できるような教材「Gベース」を開発し、本年度は「Gベース」を基にした「Gチャレンジ」も実施している。

本研究は、平成18年度から22年度までの5年間にわたり取り組んできた一連の取組をまとめたものである。



【図1】研究の経過

I 研究目的

国際的な学力テスト(PISA2003、TIMSS2003)

の結果を受け、学力向上が国の教育施策の最重要課題となった。本県においても平成14年度より学習定着度状況調査を実施し、児童生徒の学力の把握とともに、「事後指導の手引き」を作成し、学力向上に努めている。

研究がスタートする以前の平成17年度の学習定着度状況調査の結果では、前年度より平均正答率は上がっているものの、国語、算数・数学、英語では、学年が進むにつれて正答率が下がっていた。さらに、正答率の分布を見ると、上位層の生徒と下位層の生徒の割合が同程度であり、ばらつきが大きかった。また、平成17年度の学力統一テスト(岩手、宮城、和歌山、福岡の4県による共同実施)の結果では、小学校で実施した全ての教科において4県の平均正答率を上回っていたが、中学校では数学、英語が下回っていた。論述式の設問において無回答の割合が高く、論理的に理解・表現する力が不足しているというのが当時の分析である。これらのことから、中学校の国語科、数学科、英語科では、学習内容が十分に定着していないことが裏付けられ、この要因として、学年や単元で身につけるべき指導目標の明確化が不十分なままに指導していることや、生徒自身に学習状況の振り返りをさせるための手だてが不足していることなどが考えられた。

そこで、このような状況を改善するために、それぞれの教科における評価規準を基に、授業の目標をより明確にし、個別の学習状況に応じた指導を展開していくことや、生徒自身に現状状況を把握させながら学習に取り組ませることが必要であると考えた。

具体的には、朝学習・授業・家庭学習等で繰り返し活用することをねらいとした、基礎・基本として最低限度身に付けるべき内容と発展的内容を含んだ学習教材を作成することも必要であると考えた。

この研究は、中学校の国語科、数学科、英語科について、評価規準に沿った学習教材の開発と活用をとおして、中学校国語科、数学科、英語科における学習指導の改善と学力向上に役立てようとしてスタートした。

II 研究の方向性

中学校国語科、数学科、英語科における学力向上を図るために、本県の課題に対応できるように内容を整理した評価規準と、それに基づいた評価問題で構成した教材を開発し活用する。併せて、開発した教材の活用を促進するために、作成した問題をコンピュータやインターネットでも利用できるようにする。

III 研究の経過

1 平成 18 年度

中学校国語科、数学科、英語科における学力向上を図るために、本県の課題に対応できるように内容を整理した評価規準「いわてスタンダード」を作成した。それに基づいた評価問題で構成した学習シート教材「Gアップシート」を作成し、授業実践を行った。

2 平成 19 年度

「Gアップシート」の活用の研究を行った。「Gアップシート」を利用したコンピュータ教材「Gベース」の作成を行った。

3 平成 20 年度

「Gベース」を活用した授業実践を行った。「Gアップシート・Gベース学習サイト」のシステム作成と、教材の一部公開を開始した。

4 平成 21 年度

「Gアップシート・Gベース学習サイト」で教材の公開を行った。

5 平成 22 年度

復習問題「Gチャレンジ」の作成と授業実践

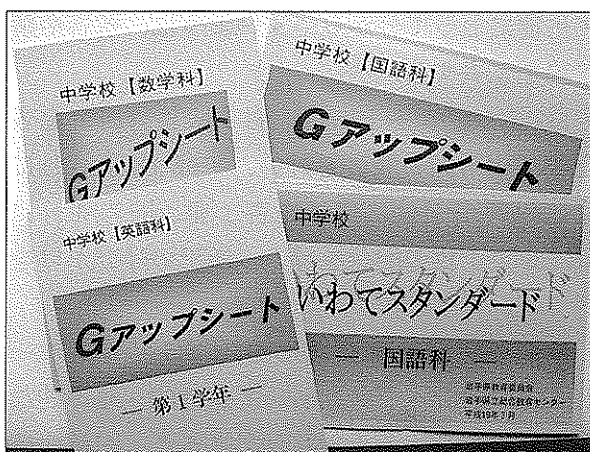
を行った。

IV 研究内容と研究結果及び分析

1 開発した教材

(1) 「いわてスタンダード」について

学習指導要領及び国立教育政策研究所作成の評価規準を基に、本県の生徒の実態を踏まえて、3教科において生徒に身に付けさせたい「中核となる力」を明確に示した岩手県独自の評価規準を作成した(図2)。

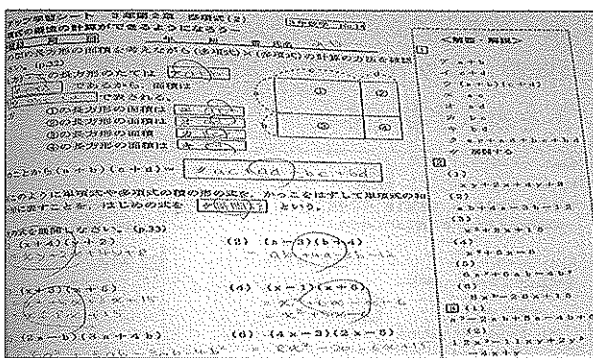


【図2】いわてスタンダードとGアップシート

(2) 「Gアップシート」について

「Gアップシート」とは、「いわてスタンダード」の「中核となる力」に準拠した評価問題で構成した学習シートであり、中学校国語・数学・英語3年間の全学習内容(各学年各教科70枚、合計約600枚)を作成した(図3)。

「Gアップシート」は、以下の点について工夫を加えて作成した。



【図3】Gアップシート

・「いわてスタンダード」の「中核となる力」に対応した評価問題を中心に、評価規準及び各指導事項に対応する評価問題を網羅的に取

り扱う

- ・関心・意欲・態度は除き、ペーパーで測定できるものとする
- ・生徒のつまづきを発見し、手だてを講じるための資料とする
- ・重点内容について、意図的に繰り返し出題する
- ・発展問題も出題する
- ・それぞれの問題に「中核となる力」を生徒に分かりやすい言葉で明示する
- ・生徒にとって分かりやすいように、解答や解説を工夫する

「Gアップシート」は、岩手県教育研究発表会で活用事例の発表を行い、平成18年3月には県内の中学校に冊子を各1冊、同年4月には、CD1枚の配付を行い、活用の呼びかけを行った。

検証データは割愛するが、「Gアップシート」は、研究ベースにおいて基礎的・基本的な内容の定着を図る上で有効であることが確かめられている。

(3) 「Gベース」について

「Gアップシート」の問題をだれでも使うことができる環境を整えるために、インターネットの利用を考えた。また、学習結果を記録して一覧表で示すことにより、学習の進捗状況を確認させることができると考え、コンピュータで学習できるようにした教材「Gベース」の開発を行った。開発においては、以下の点について工夫・留意した。

- ・「解説」をクリックすると問題の説明、ヒントを表示する（図4）

【図4】 Gベース

- ・「解答」をクリックすると正答が表示され、正しい場合には○を表示する
- ・記述式解答や選択式解答、分数や $\pm\sqrt{\quad}$ の入力やグラフの描画にも対応する
- ・「採点記録」をクリックすると、○の数から得点を計算して表示する
- ・得点、学習日時、学習した回数を学習者ごとにコンピュータに記録する
- ・「採点記録」をクリックすると、○の数から得点を計算して表示する
- ・得点、学習日時、学習した回数を学習者ごとにコンピュータに記録する
- ・学習の記録は、そのシートの学習回数、最高得点、最終学習日を表示する
- ・学習の履歴の一覧を表示する（図5）

	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
0	得点 100点	70点	88点	100点	100点	84点	88点	100点	33点	
10	未習	/	/	100点	未習	未習	25点	100点	100点	12点
20	100点	未習	未習	未習	未習	33点	未習	75点	未習	未習
30	未習	未習	未習	40点	未習	未習	87点	未習	未習	未習
40	未習	未習	未習	未習	未習	100点	/	/	/	未習
50	未習	100点	87点	未習	44点	53点	未習	33点	33点	44点
60	39点	未習	未習	/	未習	100点	66点	未習		
70										

【図5】 学習の記録

平成19年度の開発途中からCDによる配付を行い、平成20年度には、英語と数学のほぼ全ての「Gアップシート」についてコンピュータ教材を作成した。国語については、記述文の自動採点が困難であるため、文法の10シートについてのみ作成した。3教科で合計400教材を作成した。

「Gベース」についても、検証データは割愛するが、研究ベースにおいて、「Gベース」は、生徒の学習意欲を高めながら、学習内容を定着させる上で効果があることが確かめられている。

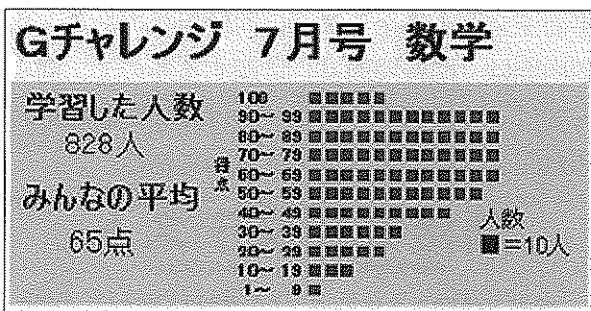
(4) 「Gチャレンジ」について

「Gチャレンジ」は、「Gアップシート」を基に作成した中学3年生数学・英語の復習用コンピュータ教材であり、以下の点について工

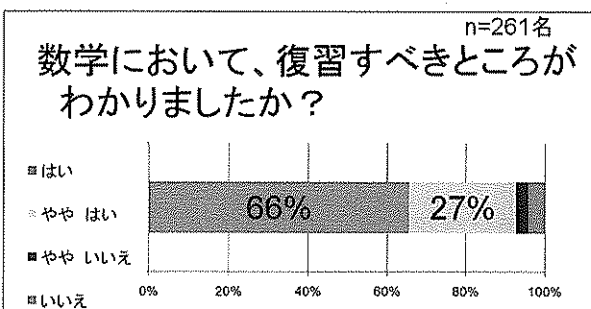
夫・留意をしながら作成した。

- ・内容を中学校3年生の学習進度に合わせた復習問題とする
- ・制限時間になると自動採点する
- ・採点后に得点と全員の度数分布を表示する(図6)
- ・年4回(7月、9月、11月、1月)の指定期間内に実施する
- ・学校単位での任意参加とする

生徒は、「得点」、「復習すべき『Gアップシート』の番号」、「度数分布」が表示されることで、自分の力を確認することができる(図6)。「Gチャレンジ」実施後の生徒アンケートでは、「数学において復習すべきところがわかりましたか?」という質問に対して66%の生徒が「はい」と回答している。(図7)



【図6】得点の度数分布図



【図7】「Gチャレンジ」実施後のアンケート結果(生徒)

先生には、「生徒の得点表」(図8)、「正誤一覧表」(図9)、「各問いの正答率(クラスと全体との比較)」を提示することで、全体指導が必要な問題や個人指導が必要な生徒の問題の情報を提供することができる。

番号	得点	正答率	正答数	誤答数	無答数
1	22点	24%	6	3	16
13	45点	44%	11	8	6
14	26点	28%	7	3	15
15	46点	48%	12	6	7

【図8】生徒の得点表(一部)

番号	得点	1問	2問	3問	4問	5問	6問	7問	8問	9問	10問
1	22点	○	○	○	×	○	○	○	×	無	無
13	45点	○	○	○	×	○	×	○	×	無	○
14	26点	○	○	○	○	×	○	○	×	無	無

【図9】正誤一覧表(一部)

(5)「Gアップシート・Gベース学習サイト」について

会員制サイトを構築し、本県の児童生徒のみが学校や家庭から「Gアップシート」「Gベース」で学習できるようにしたものが「Gアップシート・Gベース学習サイト」である。

岩手県内の中学校・高等学校・教育関係機関に「ログインID」「パスワード」を発行し運用している。

<http://www1.iwate-school.jp/common/>

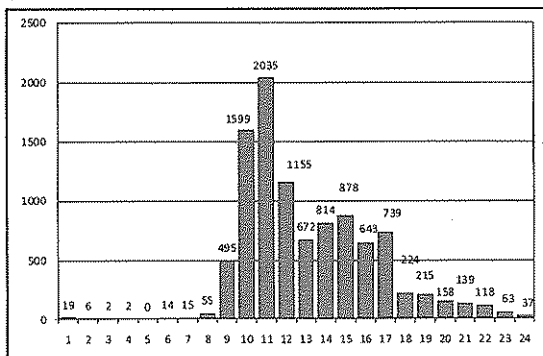
【図10】Gアップシート・Gベース学習サイト

インターネットに接続できる環境であればどこからでも利用できるもので、授業や放課後学

習、家庭学習で利用されている(表1)(図11)。

【表1】利用回数(2009年4月~2010年11月)

	G7ソフト 利用回数	Gベース 利用回数	Gベース 平均点
英語1年	1740回	1478回	66点
英語2年	1257	1514	58
英語3年	1248	1359	62
数学1年	2611	2001	65
数学2年	1645	1399	62
数学3年	1731	747	58
国語1年	412		
国語2年	205		
国語3年	292		
国語文法	336		



【図11】ログイン時間と回数
(2010年4月~2010年11月)

2 授業実践 (Gベースを活用した実践)

(1) 実施日と対象

平成20年9月2日(火)

奥州市立前沢中学校 第3学年2学級

(2) 授業者

奥州市立前沢中学校

教諭 青沼徹(研究協力員)

(3) 単元名

英語科「Unit 4 An American Rakugo-ka」

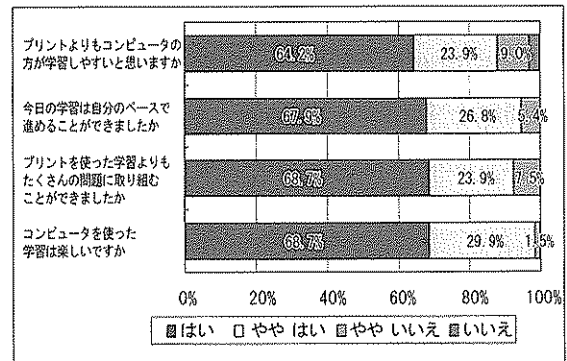
(4) 学習内容

how (what) to 不定詞や It is...to 不定詞を含んだ英文の用法を理解し、適切に使用できるようになる。

(5) 授業実践の分析と考察

(図12)はGベースを活用した授業に関するアンケートの結果を示したものである。

「プリントよりもコンピュータの方が学習しやすいか」、「今日の学習は自分のペースで進めることができたか」、「プリントを使った学習よりもたくさんの問題に取り組むことができたか」、「コンピュータを使った学習は楽しいか」の



【図12】Gベースを活用した授業に関するアンケート

4つの質問のいずれにおいても、「はい」「ややはい」を合わせた回答の割合は、約90%となっている。以上のことから、ネットワークを活用した学習活動によって学習意欲を高めることができたと考える。

図13は、Gベースを活用した学習に関する事前テスト・事後テストの問題用紙である。出題内容は「間接疑問文」に関するもので、問1~3は3つの語を、問4~5は4つの語をそれぞれ正しい順に並べ替えるものである。

間接疑問文テスト

~疑問文が別の文の中に入った形を覚えよう~

次の日本語が表す英文になるように、()内の語を正しく並べかえて、英文を書きなさい。

- その本が値段がいくらか知りません。
I don't know (how/the book/much) is .
↓

- 彼がCDを何枚持っているか知っていますか。
Do you know (how/CDs/many) he has ?
↓

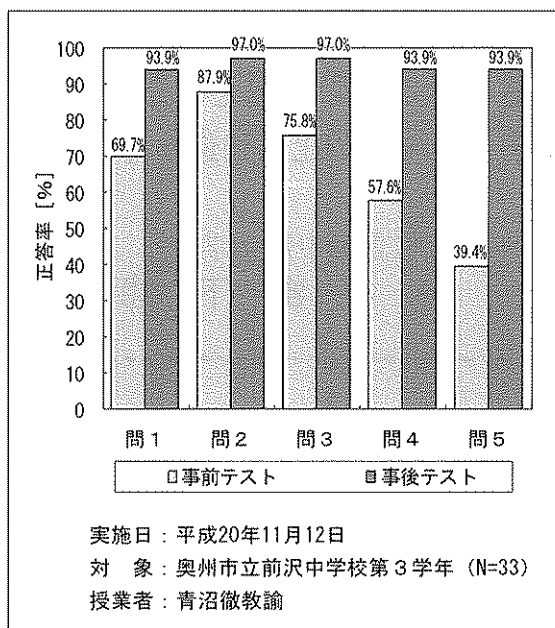
- 彼が昨日ミーティングで何を言ったか理解できますか。
Do you understand (he/said/what) in the meeting yesterday ?
↓

- 日曜日だれがここに来るか知っていますか。?
Do you know (come/here/who/will) on Sunday ?
↓

- どこでそのペンを買うことができるか教えてください。
Please tell me (I/can/where/buy) that pen.
↓

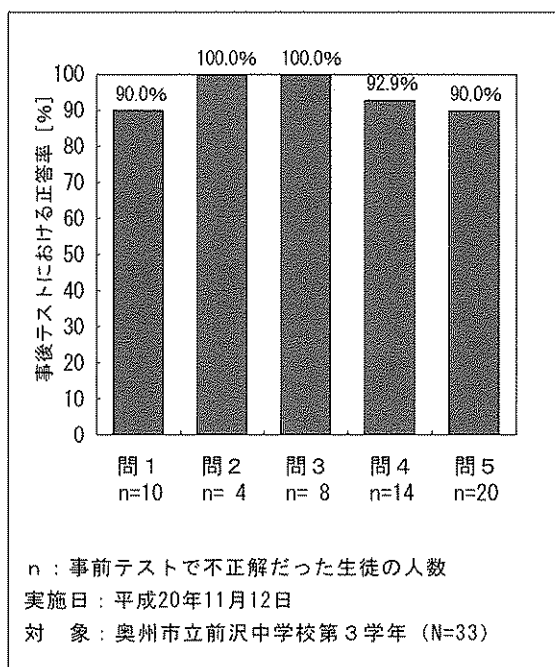
点

【図13】事前テスト・事後テストに使用した問題用紙



【図14】『Gベース』を活用した学習に関する事前テスト・事後テストの正答率

図14は、図13の問題用紙を使用した事前テスト・事後テストの正答率を表したものである。問1～5の5つの問題の事前テストの正答率が約40～90%弱であるのに対し、事後テストの正答率は、いずれも90%を越えている。



【図15】事前テストで不正解だった生徒の事後テストにおける正答率

図15は、図13の問題用紙を使用した事前テストで不正解だった生徒の事後テストの正答率を表したものである。

事前テストで不正解だった生徒の人数は、問1：10名、問2：4名、問3：8名、問4：14名、問5：20名であったが、事後テストでは、これらの生徒の正答率は、いずれも90%以上となった。このことから、ネットワークを活用した学習活動によって学習した内容の習得が図られたと考える。

以上のことから、「Gアップシート」を基に作成した「Gベース」を用いた授業は、学力向上に効果があると考えられる。

V まとめ

平成22年度全国学力・学習状況調査において、本県の児童生徒は、小学校6年生が国語、算数とも全国平均を上回る水準であるが、中学校3年生の数学は、4年連続で下回っている。数学は、従来から課題とされる応用的な問題で全国との差が縮まってきたが、課題解消のためのさらなる対策が必要である。

平成23年度は、新学習指導要領に対応した評価規準に基づいて、「いわてスタンダード」の改変を行い、「Gアップシート」の改訂に取り組む予定である。「Gアップシート・Gベース学習サイト」で新しい教材を学校に提供していきたいと考えている。

【参考文献】

- 岩手県教育委員会(2005)、『平成17年度学習定着度状況調査結果報告書』
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター(2002)、『評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料(中学校)』
- 地方分権研究会(2006)、『平成17年度統一学力テスト報告書』



自らの思いや考えを表現できる子どもの育成をめざして — 国語科の説明的な文章における指導の工夫を通して —

西和賀町立越中畑小学校

教諭 岩下 恵子

1 はじめに

本校は創立136年目を迎える学級数3、児童13名の極小規模校である。昨年度、町の指定を受けて国語科の授業公開を行った。本稿は、その取り組みの一端を紹介するものである。

2 主題設定の理由

学校教育の各教科及び領域において、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させるときの「学び」の基本は、国語を正確に理解し適切に表現していくことにある。「学び」の対象の多くは、説明的な文章で書かれている。そこで、国語科の説明的な文章の指導において、内容及び書き表し方について、児童一人一人に自分の思いや考えを確かにもたせること、それらを表現し伝えることのできる子どもを育成していきたいと考えた。

本校のめざす児童の姿の一つは、「人の話を良く聞き、自分の考えをしっかりと伝えられる子」である。それは、児童が自分なりの思いや考えをもち、お互いの思いや考えを生かしながら、交流し合う学習の中で育てられると考えた。

昨年度、入学生が無く、単式1学級、複式2学級であった。児童は、少人数であるがゆえに自分の思いや考えをきちんと言葉で伝えることをしなくても、お互いに察し合っていることも多い。自分の思いや考えを進んで発表したり友だちの話に対して自分の思いや考えを話したりすることは多いとは言えない。文章の読み取りにおいても、文章から答えを指摘することで終わってしまいがちで、自らの思いや考えを表現し交流するまでには至らない。一昨年度の標準学力検査や県の学習定着度状況調査の結果から、「読むこと」の領域に関して、定着が図られていないことが分かった。そこで、国語科の説明的な文章における指導において、文章の解釈にとどまらず、内容を正確に理解し、内容や書き表し方について、自分の思いや考えを適切に表現できる子どもを育てる授業の工夫をする必要があると考えた。

3 研究仮説

国語科の説明的な文章において、次のことを

行えば児童一人一人に思いや考えをもたせ、表現できる子どもを育成することができるであろう。

- | |
|---|
| 1 自力解決の場における一人一人に思いや考えをもたせるための指導の工夫
2 交流の場における児童の思いや考えを広げ深めるための指導の工夫 |
|---|

4 研究内容

(1) 仮説1について

- ・ 思いや考えを形成させる場の設定
- ・ 思いや考えを形成させるための学習の内容と方法の明確化

(2) 仮説2について

- ・ 単元計画及び一単位時間の中での他と交流するための方法

(3) 発表する力を育てる指導の充実

- ・ 発表することへの抵抗感を少なくするための全校的な発表の場の設定

5 研究の基本的な考え方

○めざす子どもの姿として、次のようなことが身に付いている子どもと考える。

- ・ 「読む」「書く」「話す・聞く」の基本が身に付いている子ども
- ・ もの・こと・人に対して興味・関心をもち、それらについて思ったり感じたり考えたりする子ども
- ・ 思ったこと、感じたこと、考えたことを話し言葉や書き言葉で表現できる子ども
- ・ 互いに相手に分かりやすい言葉のやりとりができる子ども

○「自らの思いや考え」とは、学習内容に主体的に関わりをもち、児童一人一人がまず自分なりの思いや考えを形成することが大切とおさえた。それは、一人一人の学習を確かにするもととなることを考える。

○「表現できる子ども」とは、相手に対して、自らの思いや考えを書き言葉や話し言葉で表わすことのできる子どもである。お互いに思いや考えを表わし合うことが、交流することにつながり、思いや考えを広げたり深めたりすることとなる。集団で学習することの意義

がここにある。児童は、社会の中で多くの人とかかわり合って生活していく。その意味では、自らの思いや考えを相手に分かりやすく表現できることは、大切な力の一つである。

○「国語科の説明的な文章における指導の工夫を通して」とは、説明的な文章を理解することによって形成された自らの思いや考えを友だちと交流し、その相違点や共通点を見極めることで、自分の思いや考えを確かにし、広げ深めるための工夫をすることである。安易にワークシートやプリントばかりに頼らず、自分の考えを練り上げて発表するという学習がより大切となる。新学習指導要領「C読むこと」における「自分の考えの形成及び交流に関する指導事項」の新設からも、受動的な読みから、読んだことをもとに自分の考えをまとめ、伝えるという能動的な読みへの転換が図られていると言える。「読むこと」領域において、表現する力を育成することから、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域とも関連づけた指導を工夫していくこととらえる。

○仮説に関わって

1) 自力解決の場における一人一人に思いや考えをもたせるための指導の工夫

	低学年	中学年	高学年
難かな表現	サイドラインを引く 押絵や写真や図などに書き込みをする。 吹き出しを書く。 字がけの線を見つめる。 問いと答えの文を見つめる。 疑問文を見つめる。	キーワードを書き出す。 キーワードを書き出す。 推定文や仮問文を見つめる。 要点をまとめる。 大切な語や文を引用する。 要約する。	文章構造図に書き出す。 事実と感想・意見の関係を押さえる。 要約を書く。 自分の考えを明確に書く。
第二次	時間を表す言葉に印を付ける。 時間を表す言葉に印を付ける。	頭目と要約をかける。 読者の立場を押さえるために 読者の役割を書く。 事実と意見をわけてその関係を押さえる。	文章構造図に書き出す。 事実と感想・意見の関係を押さえる。 要約を書く。 自分の考えを明確に書く。
表現方法	既学理由を述べる。 読者と結びつけて思いや考えをまとめる。 読者や感想から書く 簡単な図解を作る。 そのほかの表現を書く。	理由や根拠を指図する。 一人一人の感じ方に違いのあることに気づく。 読者・小冊子などを書く。 紹介する文章・説明する文章・学 礼状などの手紙を書く。	根拠を明確に表現する。 自分の考えを広げたり深めたりすることに気づく。 まとまった考えを書く 報告文・意見文・種別文・解説文などを書く。 資料提示しながら説明したり発表したりする。 新聞記事を書く。

2) 交流の場における児童の思いや考えを広げ深めるための指導の工夫

ア単元計画の中で他と交流するための基本的な指導過程

段階	過程	児童の主な学習活動	形成及び交流に関する指導事項
第一	つかむ	1 学習の見通しをもつ ・ 題名を読む。 ・ 全文を読む。 ・ 初めの感想を交流し合う。 ・ 単元全体の学習の見通しをもつ。 ・ 新出漢字や難読語を調べる。 ・ 形式次第に分ける。 ・ 問いの文や感想等から読解や読みの視点をつかむ。	・ 題名について思いや感想をもち、交流させる。 ・ 感想をもち、発表し合い、感じ方に違いのあることに気づかせる。
第二	深める	2 読みの課題を解決する。 ・ 学習課題や読みの視点によって読習事項等を使いながら読み進める。 ① 読習を考えたがら読む ・ 要点をまとめるがら読む ・ 読者相互の関係をつかみながら読む ・ 要約しながら読む ・ 表現を学びながら読む ・ 読習事項など交流する。 ・ 新しく学んだことを確かめる。	○ 次の方によって、自分の思いや考えをもたせる。 ・ 大事な言葉、文にサイドラインを引いたり書き出したりする。 ② 読習を考えたがら読む ・ 要点や筋節に注意しながら読み、引用要約する。(中学年～) ・ 内容と自分の読解を結びつける。(低学年～) ○ 交流において、指導すること。 ・ 感想し合い、感じ方に違いのあることに気づく。(中学年～) ・ 自分の考えを広げたり深めたりする。(高学年～)
第三	広げる	3 教科で学習したことを活用しながら身に行う。 ・ 教材で学んだ知識、技能を使って、発表を語る。(特に表現的に重点を置く。) ・ 積極的な発表をする。 4 単元全体のふり返りをする。 (学習内容と学習姿勢について)	【説明的な文章から学んだ内容や表現形式を確とした学習活動を行うことにより、単元の目標に迫ると共に、児童の表現できる力を育む。】

イ単位時間の中で他と交流するための基本的な指導過程

段階	学習活動(下学年)	指導	学習活動(上学年)	指導
つかむ	1 課題把握をする。(前時の学習確認) ・ 本時の学習の課題を確認する。 2 見通しをもつ ・ 読みの視点や方法の確認。	共通 共通	1 課題把握をする。(前時の学習確認) ・ 本時の学習の課題を確認する。 2 見通しをもつ ・ 読みの視点や方法の確認。	共通 共通
深める	3 音読をする。 4 内容を読み取る。 ・ 教師と共に本時の学び方を確認しながら読み取る。	共通 共通	3 音読をする。 4 内容を読み取る。 ・ 読みの視点をもとに自分自身で読む。(仮説(1)の表による)	共通 共通
広げる	5 直接指導の学習内容・方法のまとめと整理。 ・ 読みの視点をもとに自分自身で読む。(仮説(1)の表による) 6 読解指導の内容を確認する。 ・ 教師と共にお互いの考えを交換し合った。強め合ったり、深め合ったりする。(仮説(1)の表による) 7 学習したことをまとめる。	共通 共通 共通	5 教師と共に読み取ったことを確かめ合ったり深め合ったりする。 (仮説(1)の表による) 6 学習の課題のまとめをする。 7 読解の確認をして異なる読解に取り組み。 ・ 読みの視点をもとに自分自身で読む。(仮説(1)の表による) 7 教師と共に読み取ったことを確かめ合ったり、強め合ったりする。 (仮説(1)の表による)	共通 共通 共通
まとめ	8 まとめ ・ 学習したことを上学年と交流する。 ・ 自己評価する。 9 次時の学習内容を確認する。	共通 共通	8 まとめ ・ 学習したことを上学年と交流する。 ・ 自己評価する。 9 次時の学習内容を確認する。	共通 共通

本校では、交流の場を大切にするという考えから、教師の直接指導に交流の場を設けている。

ウ交流の場について

交流においては、対話・3人以上での話し合い活動を中心とする。交流の場は、単なる情報交換ではなく、文章に沿って自分の思いや考えを話すことができることを目指している。お互いの共通点・相違点・修正する点・付け足す点・新たに生み出された考えなどを明らかにして、自分の思いや考えを深める場である。教師は、その様子を見守りながら、指導したりまとめたりする。そのためにも、交流の場を直接指導とし、教師が児童の活動を見取ることができるようになっている。

* 話し方の基本型

低学年	中・高学年
○～について、話します。(発表します。)	○～について、話します。(発表します。)
○私は、～と思います。 わけは、～だからです。	○私は、～考えました。(思います。) わけは、～だからです。
○私も、○○さんと同じで～と思います。 わけは、～だからです。	○私も、○○さんと同じで～と思います。 わけは、～だからです。
○私は、○○さんと同じで～と思います。 わけは、～だからです。	○私は、○○さんと違って～と思います。 わけは、～だからです。
○つきました。	○○○さんに つきました。
○もう一度、言ってください。	○～のところが、よく分からなかったので、もう一度、言ってください。 ○～のところをもう少し詳しく話してください。
○どうして、～と思ったのですか。	○なぜ(どうして)、～と思ったのですか。
○わかりました。	○わかりました。～ということですね。 ○まとめると、～ということですね。



6 研究の実際

(1) 仮説1の実践例

① 3年「ありの行列」(第6時/8時間)

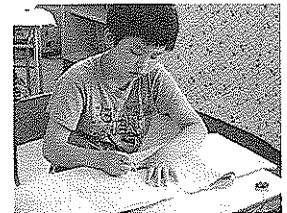
ア 本時の目標

- ・ありの行列ができるわけを読み取り、ウィルソンの問いに対する答えをまとめる。

指導の工夫と働きかけ	児童の反応
<p>《段落⑥からの要点をまとめる場面》</p> <p>○学習内容からクイズを作らせることで思いや考えを持たせる。</p> <p>・3年生に二つのことを言います。⑥まできましたね、その中から4年生に出すクイズを作ります。書き終えたら⑥～⑨まで、どんな大事な文があるか探して下さい。約10分間です。</p>	<p>授業後半の交流に向けて準備をする。クイズの問題は、前時の学習内容から。</p> <p>全：はい。</p> <p>全：作業に取り掛かる。</p>
<p>《大事な文を見つけまとめる作業の場面》</p> <p>・3年生はクイズができたようなので、まとめる作業に入ります。</p> <p>・⑦⑧⑨を読みましよう。</p> <p>・先生はこんなふうにとまとめてみました。一部を隠した紙板書を提示する</p> <p>・⑦と⑧は大体同じですね。⑨はよくくらべてみて下さい。落とせないところがあります。</p>	<p>全：はい。</p> <p>R：⑧⑨を読む</p> <p>A：⑦⑧を読む</p> <p>全：「段落の大事な文をまとめて、行列が出来るわけを見つけよう」</p> <p>・見つけた。</p>
<p>各段落の中心文は大体見つけることができた。友達のもとと一致すると、安堵の声が出ていた。</p>	<p>全：はい。⑨まで出来ました。</p> <p>全：自分のまとめで見比べて、続きを考えている。</p> <p>R：「ウィルソンはありの行列ができるわけを知ることができました。」です。</p> <p>A：#</p> <p>A：はたらかしは道しるべとして・・・においをかいで歩きます。</p>
<p>《行列ができるわけが書かれた段落を見つける場面》</p> <p>・これは大きな問題が最初にありますね。それは何でしたか。</p> <p>・このことのお答えが出てきました。何書だと思えますか。</p>	<p>R：ありの行列です。</p> <p>A：「ありの行列はなぜできるのでしょうか」</p> <p>A：「なぜ行列ができるのか」が書かれた段落を、すぐに指摘することができなかった。具体的な段落の内容の方が、強く印象に残ったようだ。</p>

イ 成果

- ・文を音読し、サイドラインを引いたり、中心になる語を見つけたりする活動を通して、内容の理解は図られた。
- ・教師がまとめた文を板書して示すことにより、文章を短くまとめるとはどのようなことか、文の中心とは何かについて考えさせることができた。



ウ 課題

- ・「ありの行列がなぜできるのか」に対する答えが、予想に反してとらえ切れていなかった。段落⑨に書かれているのだが、段落⑥も段落⑧も、児童にとっては答えに見えたのかも知れない。しかし、前後の関わりをよく考えれば正解にたどり着けるはずである。理解できていないと言うよりは漠然と読んでいたためであり、「本当に残すべき文はどれなのか」が絞られていなかった。そのことから、思い切って短く、すっきりした文章にまとめる練習が必要である。また、教師側も、常に課題を意識させた指示を出すことが大切である。

② 5年「千年の釘にいだむ」(第4時/15時間)

ア 本時の指導

- ・現代の釘と古代の釘のちがいを比べ、古代の釘の見事さの2つ目と3つ目をつかみ、自分の考えを持つ。

学習活動と指導の工夫	児童の反応
<p>《音読を聞きながら、大切な事柄にサイドラインを引かせる場面》</p> <p>○2種類のサイドラインを引かせ、現代の釘と古代の釘の記述にわけさせた。</p> <p>・SさんとYさんが音読します。他の人達は、サイドラインを引ながら聞きましょう。</p> <p>・サイドラインは、どんなところに引くのですか。</p> <p>・では、音読を始めて下さい。</p>	<p>①全員が「現代の釘と古代の釘のちがい」と「古代の釘の見事なところ」を見つけることを把握できた。また、サイドラインのひき方(現代の釘に関するところは「一線」、古代の釘に関するところは「一線」)については、前時までに指導してある。</p>
<p>《ワークシートに書き込む場面》(15分程度)</p> <p>○「書くポイント」をワークシートに明示し、書かせた。</p> <p>・サイドラインを引いたところを使いながら、図に書き込みましょう。書いていないところは、違いがわかるように想像して書き込みましょう。</p>	<p>指示線や対比線を使いながら、古代の釘と現代の釘の説明を自分なりに図(教科書の図をカラーコピーしたもの)に書き入れ、まとめることができた。</p>
<p>必要に応じて想像した事柄や考えたことを入れるなどして、自分なりに深めることができた。</p>	<p>「書くポイント」を明示、何を書けばよいか明確になり、必要な事柄を落とさずに書くのがかりとすることができた。</p>

イ 成果

- まずサイドラインを引かせて、現代の釘と古代の釘のちがいを見つけさせた。そして、サイドラインを引いた事柄とシートのさし絵が対応するように書き込みをさせた。そのため、違いを明らかにしながら読むだけでなく、必要に応じて自分の考えを付け加えて書くことができた。また、以前より根拠を持って発表したり、自分の考えを明確に話したりできるようになった。
- 書き込んだシートをみんなに見せ、それぞれのまとめ方の交流を図った。このことで、読み取ったことを整理して書く意欲がましたり、シートをもとに相手に伝える楽しさを味わったりする児童が増えた。



ウ 課題

- 自分の考えや思いをもたせる時間を十分に確保するために、発問を厳選したり、読み取りに時間をかけすぎずに進めたりすることを留意して教材分析を行う必要がある。

(2) 仮説2の実践例

① 2年「たんぼぼのちえ」(第7時/15時間)

ア 本時の目標

倒れていた花の軸が起きあがりのびていく様子とそのわけから、たんぼぼの三つ目の知恵を読み取る。

指導の工夫と働きかけ	児童の反応
<p>《倒れていたたんぼぼがどうなっていくか読み取る場面》</p> <p>○<u>サイドラインをもとに話し合わせる。</u></p> <p>・いつのことですか。</p> <p>(たんぼぼの軸の様子を動作化させた後)</p> <p>・他に様子はありませんでしたか？</p> <p>・どうして、誤だと思いましたか？</p> <div data-bbox="411 1265 742 1400" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>友だちの発言に違う考えを言うことは、なかなかできない。この場面では、すかさず、足りないと思うという発言があった。そのおかげで、誤を考え合うことができた。</p> </div>	<p>Y:「このころになると」にいつの印を付けました。</p> <p>Y:「このころ」って、綿毛ができる頃だと思えます。</p> <p>Y:綿毛のことが書いてあるからです。</p> <p>I:二つあって、それまで倒れていた軸がまた起きあがりますと、花のじくがぐんぐん伸びていきます。</p> <p>R:私は、「たおれていた花の軸が、起きあがり」と「背伸びするようにぐんぐんのびていき」にしました。</p> <p>Y:「それまで倒れていた花のじくがまた起きあがります。」に様子の線を引きました。</p> <p>全:「起きあがります」「のびていきます。」(文末を読む)これは、様子です。</p> <p>I:背を高くする方が風が良く当たって種を遠くまでとばすことができるに線を引きました。</p> <p>Y:ぼくはちよっと違つて、短く引きました。「背を高くする方が綿毛に風が良く当たって。」に誤の線を引きました。</p> <p>I:それは足りないと思えます。</p> <p>R:良く当たって、とばすことができるからだからです。</p> <p>I:「それは」がついているか、誤だと思ったからです。</p> <p>R:「なぜ、こんなことをするのでしょうか」と言っているからです。</p>
<p>○<u>児童を拡大した挿し絵の写真に注目させ、気づいたことをお互いに話させる。</u></p> <div data-bbox="367 1478 582 1624" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>全員が前に出て、黒板の写真を見ながら、たんぼぼの様子についてつぶやく。</p> </div>	<p>(挿し絵のたんぼぼを示しながら、遠くに行かないことや地面に届かないことを確め合う)</p> <p>I:背を高くすると風とかが当たって、種をとばすことができるけど、下にあると葉っぱとかがじゃまになってできません。</p> <p>R:背が高くなると、風も良く当たっていいし、綿毛を遠くまで飛ばすことができます。</p>

イ 成果

- 全員がサイドラインを引けたことから、それらをもとに読み取ったことを交流させることができた。
- 本時では、黒板の拡大した挿し絵の写真に集中させたことが有効だった。たんぼぼの様子について、写真からいろいろ見つけ、つぶやくこと、自分の思ったことをまとめて話すことができた。

ウ 課題

- 自分の思いや考えを発表することはできるようになってきているが、友だちの話を聞いて、自分の思いや考えとの違いに気づくことはほとんどない。低学年として、教師がお互いの思いや考えの違いやよりよい表現の仕方に気づかせていきたい。思いや考えを発表しあい交流させるには、日常적으로お互いに話の内容をしっかりと聞き取らせ、相手に分かるように伝えていくようにしなければならない。

② 6年「生き物はつながりの中に」

ア 本時の目標

- ・ ロボットのイヌと本物のイヌの違いを挙げ、生き物の特徴の2つ目と3つ目をまとめ、自分の考えを持つ。

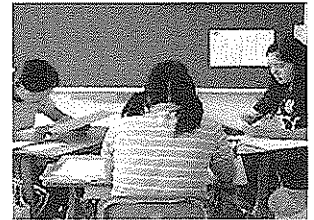
学習活動と発問	子ども達の反応
<p>《読み取った事柄を3人で話し合う場面》</p> <ul style="list-style-type: none"> ○読み取った事柄が正しいかどうか確かめたり、一人一人の考えを深めたり、広めたりして欲しいため話し合いを行わせた。 ・シートをお互いに見せ合いながら、読み取ったことを話し合ってください。 <p>①小グループ（2〜3人）内で話し合う時間を設けることで、効果が期待できると考えた。</p> <p>《生き物の特徴を話し合う場面》</p> <ul style="list-style-type: none"> ○キーワードを入れてどのようにまとめたか紹介し合い、よりよい文にするようにさせた。 ・生き物の特徴をどのようにまとめればよいか、話し合ってください。 <p>②キーワードを漏らさずに使われているか、正しい表現となっているかについて確認させた。</p> <p>《下学年と交流する場面》</p> <ul style="list-style-type: none"> ○交流の視点をはっきりさせて、発表を聞いた感想を話したりさせた。 ・今日の学習から、自分の考えや思ったことを紹介し合いましょう。（代表児童） <p>③下学年にはこれからの学習の見通しをもたせること、上学年には以前の学習を振り返らせることをねらいとした。</p>	<p>・本物とロボットのイヌのちがいを区別しながら、発表し合った。</p> <p>友達の発表を聞いて、同じところや違うところを発表し合うことができた。また、自分で考えた事柄についてもふれながら、特徴の違いについて発表できた。しかし、自分の考えた事柄について、なぜそう思うのかなど考えを深める質問を出し合うことがなく残念だった。</p> <p>・使用するキーワードを正しく判断し、つなげ方を考えながら制限時間に合うように書いた。</p> <p>短くすることを意識しすぎたため、筆者が意図して用いている言葉「長い長い」をそのまま使わず、「長い」としてまとめていた。話し合いの際、どちらが筆者の意図に沿っているのか考えさせながら深めていければよかった。</p> <p>・本時で読み取った生き物の特徴について、納得したことや生活の中で強く共感したことを発表した。</p> <p>5年生の発表に対しては、今の釘のことにふれながら、古代の釘のよさについて納得したことを話すことができた。</p>

イ 成果

- ・話し合う内容や進め方を理解し、自分たちで進めることができた。

ウ 課題

- ・3人での話し合いの場を設けた。5年生同様、話し合い（対話）の方法が未熟であり、深まりが感じられなかった。原因も、5年生と同様のことが考えられる。直接指導しながら話し合いの仕方を明確にし、双方向で意見や質問がやりとりできるようにする必要がある。
- ・友達の発表や、話し合いで出された意見や質問から、必要に応じて自分の読み取った内容に加筆・修正を行わせた。その際、消して書き直す場面が見られた。始めに自分はどう考え、他人の考えを聞きどのような修正を加えたのかがわかる書き方を指導する必要がある。



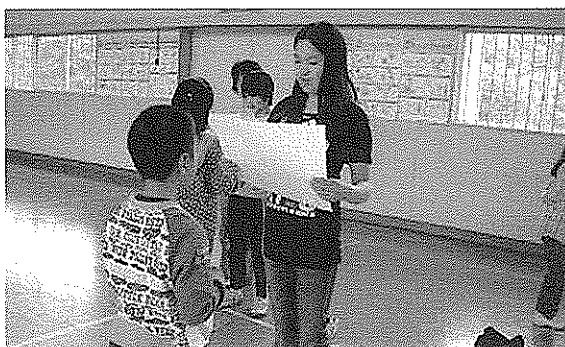
(3) 発表する力を育てる指導の実践例

① ことばの花畑集会〈題材例〉

- ・色から思いつくもの、景色、イメージなどを発表しよう。
- ・わたしは、だれでしょう。（果物、野菜、動物から問題をつくる）など。

② 一ヶ月の振り返り会

- ・毎月、生活や学習を振り返り、自己評価した内容をみんなに紹介し合う。

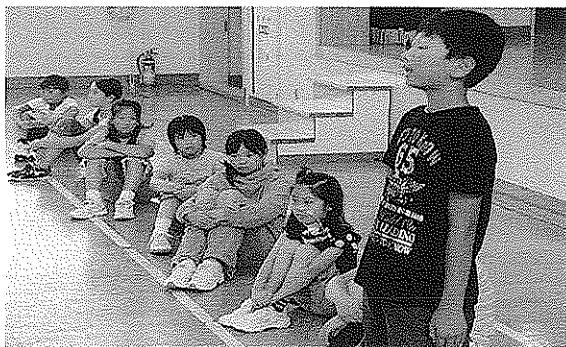


③ ありがとう集会

- ・毎学期の終わりに、メッセージカードを作成し、対話の形でメッセージを読んでカードを渡す。お互いの顔と顔を見合って話す。相手に届ける気持ちでメッセージを読む。読んでもらったなら「ありがとう」などの言葉を返す。

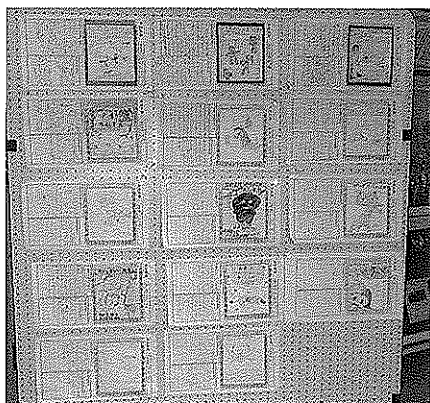
④ 始業式、終業式での全校作文発表。少人数であるため、毎回、全員が学期の振り返

りや次へのめあてを書いた作文を発表し合うことができる。発表するための話し方や姿勢、声の出し方、また聞く姿勢など、経験することで身につけている。どの子も作文用紙1枚程度は、ほとんど暗記して話すことができ、また全校の前で話すことに抵抗もなく、自信を持って話すようになってきている。



⑤「本は友だち」のカード紹介

図書委員会による読書週間の取り組みで、「本は友だち」のカード紹介を行っている。読書に関心を持たせることがねらいである。給食時間の終わりに時間をつくり、毎日2人程度、発表し、図書委員が一言コメントを言う。発表者の学年や本の内容等に合わせ、その場に対応した言葉で話すことができるようになってきている。紹介したカードは、図書室前に掲示する。



7 研究のまとめ

(1) 成果

○仮説1について

- ・一人一人の児童が自分なりの思いや考えをもつ活動（サイドラインを引く、吹き出しを書く、挿し絵や図・写真等にキーワードやキーセンテンスを書き込む、自分の考えを書き込む等）は、個々の思いや考えを形成する手だてとなった。
- ・理由や訳をつけて話をさせるように指導したことで、文章や語句に基づいた読み取り方が

身についてきつつあり、筋道の通った話し方ができるようになってきている。

○仮説2について

- ・交流の場を設定することにより、読み取ったことをきちんと整理し、相手意識をもって話すことができるようになってきた。
- ・自分の読みや友だちの読みの良さや不十分な点にお互いが気づき、自分の読み取りを確かなものとするようになってきている。

○その他

- ・様々な活動の中で、分かったことや感想を話したり書いたりする活動を取り入れてきた。その活動の積み重ねにより、自分の思いや考えを書き表す量や内容も充実してきている。
- ・書き表すことは面倒だと思っている子どもでも、相手意識をもって多くの人に伝えるようにすることで、集中して書く姿が見られるようになってきている。

(2) 課題

○仮説1について

- ・自力解決を行う間接指導につながる直接指導の在り方を工夫すること。
- ・自力解決の手だての明確化及び指示の与え方について、実践を積むこと。
- ・自力解決等の学習への児童の構えを作ること。

○仮説2について

- ・思いや考えの単なる情報交換から、交流するための対話及び話し合いの仕方と基本的な対話の方法を明確にすること。
- ・直接指導の中で、対話やグループの話し合いという学年内交流の場を取り入れるための授業展開（交流の場に教師がつくための授業展開）の工夫をすること。
- ・共通終末の交流の場において、他学年の発表の大事なことを落とさないように聞く力を定着させること。

○その他

- ・教材研究の充実を図ること。
- ・表現力の検証方法を明確にすること。
- ・他教科においても思いや考えの形成と交流の場と方法を明らかにしていくこと。

いわした けいこ

種市町立種市小学校から西和賀町立湯本小学校等を経て、19年度から現任校に勤務。



岩手県の幼児教育の充実を目指して

— 第57回全国国公立幼稚園教育研究協議会岩手大会報告 —

岩手県国公立幼稚園研究協議会
研究部会部長 菅原良子

第57回全国国公立幼稚園教育研究協議会岩手大会が、7月30日、31日に盛岡市で開催されました。本県での開催は初めてで、岩手県国公立幼稚園協議会では、平成21年より実行委員会を組織し、企画・運営にあたりました。

今大会では、大会テーマを「未来を拓くイーハトーブの子どもたち～一人一人が輝いて～」とし、遊びを通して学ぶという幼稚園教育の本質を見極め、学校教育の始まりとしての幼稚園教育を改めて問い直し、「子どもたち一人一人が輝き、たくましく未来を拓くことができるような教育」を目指したいという願いがこめられています。岩手の先人宮沢賢治が描いたイーハトーブ「理想郷」を「幼児期にふさわしい生活」と重ね合わせ、豊かな人間性や、自ら学び考える力をはぐくみ、たくましく生きる力の基礎をはぐくむ保育、教師の在り方を探ることにしました。

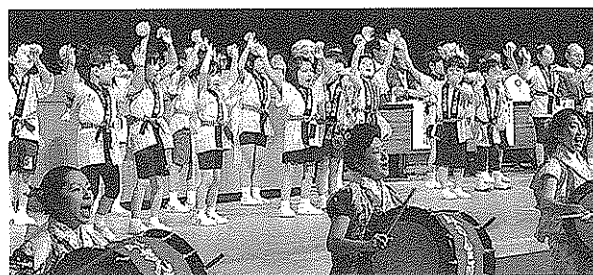
当日は全国各地から、幼児教育関係者1200名を超える参加者を迎え、岩手らしさをアピールしながら、1日目は開会行事、記念対談、全体会、2日目は分科会・ポスターセッション・ワークショップを行いました。

全体会では、「園経営」「教育内容」「教育課題」について3県から提案発表、研究協議、文部科学省初等中等教育局幼児教育課教科調査官より指導講評をいただきました。

分科会では、8分科会構成で16園が提案発表を行い、本県から8園、北海道、東北各県等より8園が発表しました。各分科会とも提案発表をうけて、短時間ながらも、全国各地から来県された会員と熱意あふれる研究協議が展開されました。そして今後の保育の指針となるご助

言をいただき、大きな成果を得ることができました。今大会を通して多くのことを学ばせていただきましたことを、深く感謝し、今後の岩手の幼児教育の充実発展のために生かすよう、努力してまいりたいと存じます。

以下、各分科会の岩手県の発表と指導助言を掲載いたします。



【第1分科会】

研究主題 協同性をはぐくむ保育
助言者 東京大学大学院教授 秋田喜代美
提案園 北海道 大空町立女満別幼稚園
岩手県 一関市立萩荘幼稚園

■提案概要〈萩荘幼稚園〉

幼児が互いによさを発揮し合いながら、友達とのかかわりを深めていけば、協同性をはぐくむことにつながるのではと考えた。教師が幼児の気付きや得意なことを拾い上げることで自信をもち自己発揮する。友達とのかかわりが深まるにつれ、今まで溜め込んだものを発揮しながら、遊びを工夫し進めていくようになった。

■協議の柱

共通の目的に向かって協同して遊ぶようになるためには発達の時期に応じて、どのような環境の構成や援助が必要か。

■指導助言

「協働」とはコラボレーションできる関係づ

くりであり、一緒にプロセスを協働することで共に育ち合っていく過程であり、その過程を大切にしていきたい。教師はどの時期においても長期的な見通しをもち、連携し合いながら育てあげていくことが大事である。また、遊びの中の協働がどのように展開しているかを保護者と共に喜び合える関係をつくるのが大切であり、子どもたちが協働の中で醸し出す「その子らしさ」をお互いに味わっていくことが、協働を育む上で、めざしたい保育者の在り方であるとする。

【第2分科会】

研究主題 健やかな心と体をはぐくむ保育
 助言者 岩手県立大学准教授 井上 孝之
 提案園 青森県 南部町立名川幼稚園
 岩手県 奥州市立佐倉河幼稚園

■提案概要〈佐倉河幼稚園〉

戸外遊びを通して、幼児が自ら遊び出したくなるような環境の構成と教師のかかわりの工夫をすることにより、幼児の健やかな心と体をはぐくんできた。戸外遊びの場を園外にも広げ、歴史的遺産や自然等、地域のよさや人の温かさにも触れられるようにしたことが、幼児が自ら体を動かして遊ぼうとする意欲につながった

■協議の柱

「幼児が進んで体を動かし、その心地よさを味わえるような環境の構成や援助の在り方」

■指導助言

幼児の健やかな心と体をはぐくむには、幼児の生活リズムを整えることが基本となる。遊びの充実、食育、家庭との連携が効果的に行われることにより、健やかな心と体をはぐくむことができる。幼児期に大切なことは、幼児が自己発揮と自己抑制をしていく経験を積んでいくことで、自ら判断して動けるようになることである

幼稚園は生涯教育の入り口であり、幼児のその後の教育の基礎づくりをする場である。幼児はもちろん、保護者、地域の方々等社会全体を育てていくことが幼稚園の役割である。そのため、何よりも教師自身が育っていくことが大切である。

【第3分科会】

研究主題 共に育ち合う家庭・地域・幼稚園
 助言者 文部科学省初等中等教育局
 幼児教育課教科調査官 津金美智子
 提案園 宮城県 東松島市立矢本中央幼稚園
 岩手県 北上市立更木幼稚園

■提案概要〈更木幼稚園〉

保護者の子育てに対する不安を解消し、子育て力を支えるためには、教師と保護者が共に幼児の成長を理解し合い、子育ての喜びを共有していくことは大事である。指導計画の見直しを図り行事内容を工夫したこと、連続した支援の中で親子の成長を支えたこと等、それぞれの実践において互いに幼児の成長を確認できたことが、幼稚園と家庭との育ち合いにつながった。

■協議の柱

教師と保護者が共に育ち合うための家庭との連携の在り方はどうあればよいか

■指導助言

家庭・地域・幼稚園が共に育ち合っていくために、三者の連携が重要である。そのために幼稚園は、家庭・地域に対し子育ての本来の在り方を啓発する場としての役割を果たさなければならない。家庭との連携において保護者の幼児期の教育への理解を深めていくためには、各年齢の内面的な発達も含め、今の姿を具体的に伝えていけるよう教師の質も高めていくことが大切である。また、積極的に地域とのつながりを感じられるような活動を計画し、その場に保護者も引き入れ家庭と地域をつなげるきっかけ作りもしていきたい。

【第4分科会】

研究主題 学びの連続性を踏まえた幼小連携
 助言者 お茶の水女子大学大学院教授
 高濱 裕子
 提案園 秋田県 八郎潟町立八郎潟幼稚園
 岩手県 金ヶ崎町立三ヶ尻幼稚園

■提案概要〈三ヶ尻幼稚園〉

幼稚園教育の充実と小学校教育への円滑な接続に向け、双方の学びが成り立つような交流の

在り方を探り、互いの教育内容の理解を深め、育ちをつなぐ支援の工夫を行った。

幼児の十二期と一年生（入学期）を見通した交流計画を立て、事前・事後の話合いを行った。それにより、子どもの捉えや評価の違いを確認し、発達についての共通理解や教師間における歩みよりの姿勢の大切さを確認することができた。

■協議の柱

幼児教育の成果を小学校教育につなげ、生活及び発達や学びの連続性を確保するためには、どのような幼・小の交流活動や教師間の連携が必要か。

■指導助言

子どもの学び（発達）を、個人あるいはグループ・集団の中で捉え、心情・意欲・態度の育ちを確認してほしい。これらが小学校へとつながるからである。幼小連携における検討の観点からは、現在実施されている活動を幼児や児童の視点から見直す、情報公開や外部評価を含めて発信力を高める、行政へ働きかけるなどがあげられる。全国的にみても、年間指導計画に位置付け、見通しをもった連携を継続することが課題である。

国公立幼稚園の役割として、地域で子どもを育てる、発達を支えるといった発想で、幼・保・小との連携の推進に努められるよう期待をしたいところである。

【第5分科会】

研究主題 思考力の芽生えをはぐくむ保育
助言者 聖心女子大学教授 河邊 貴子
提案園 山形県 山形大学附属幼稚園
岩手県 一関市立舞川幼稚園

■提案概要〈舞川幼稚園〉

興味をもち、自らかかわるが、興味や遊びが持続しない子どもたちの姿が見られた。身近な環境にかかわり、幼児が発見し心を動かしている姿を受け止め、じっくり取り組めるよう時間や場を保障したことで、試行錯誤したり、工夫して遊んだりする姿が見られた。人や物とかかわりながら遊ぶことで遊びが持続し、深まり、

広がることがわかった。

■協議の柱

幼児が身近な環境に好奇心を抱き、心を動かしたり、自ら考えようとする気持ちが育つようになるための環境の構成や援助の在り方は、どうあればよいか。

■指導助言

思考力とは、何かで測定できるものではなく、行動となって表れるそのものである。生きる上で必要なことが知識や経験に基づき、状況に応じる能力である。幼児でも、幼児なりの思考力がある。それは、教えられて育つものではなく、子どもたちが自律的に活動したり遊んだりする中でしか育たない。だから、遊びが大事である。心を動かされることに会うことで関心が向き、探究心が生まれ、やがて知識や知恵を生み出す。幼児が遊びの中で、試行錯誤して工夫していることが生きる上で重要な学びになっている。

【第6分科会】

研究主題 言葉で表現する力をはぐくむ保育
助言者 岩手大学教授 藤井 知弘
提案園 福島県 いわき市立四倉第一幼稚園
岩手県 釜石市立平田幼稚園

■提案概要〈平田幼稚園〉

親子関係の変容、地域の間関係の希薄化から言葉で伝える機会の減少という実態を捉え、言葉をはぐくむ基礎として、気持ちの安定、共感できる相手の存在、豊かな経験を挙げた。教師は、幼児の心の育ちに沿ってかかわることが大切であり、言葉にならない表現はもちろん、子どもたちの声をじっくり聞くことで、子どもたちの安心して自分を表わし言葉で伝える姿につながっていった。

■協議の柱

感じたことや考えたことを自分なりの言葉で表現したり、先生や友達と言葉で伝え合う喜びが味わえるようになるための環境の構成や援助の在り方はどうあればよいか。

■助言指導

言葉は本来、人とかかわるためのものだが、

幼児の場合、他者とかかわると同時に自分と向き合うために発せられる。教師はその状況が、自分に向かっていく言葉が友達とつながるために話す言葉かを読み取り、タイミングよく働き掛けていくことが大切である。単に量を増やすのではなく、正しい言葉、美しい響きの言葉を使いたい。そのために読書は有効である。言葉を育てることは心を育てることであり、教師の言葉そのものが言語環境であることを認識し、個に対して丁寧に向き合えるこの時期を大切にしてほしい。

【第7分科会】

研究主題 教育力を高める評価
 助言者 秋田大学准教授 奥山 順子
 提案園 岩手県 北上市立藤根幼稚園
 岩手県 九戸村立伊保内幼稚園

■提案概要〈藤根幼稚園〉

子どもの成長を助け、教師の教育力を高めていくため、個の育ち、クラスの育ちの実態把握を全職員で行い、共通の話し合いの場を多く設けたことで、幼児理解及び援助の方向性が見えるようになってきた。また、保育記録を工夫したことで、課題意識をもつことができ、見直しがいやしくなり、保育の充実につながった。

〈伊保内幼稚園〉

幼児との温かい関係を基盤に保育の充実を図るため、保育記録を工夫・改善したことで、幼児理解を深め、明日の保育へつなぐ手立てとなった。また、日々の保育を振り返りながら、教師間で内面理解し合ったことで、子どもを幅広く、様々な視点でみられるようになってきた。

■協議の柱

幼児の発達を適切に理解し、指導の改善を図るための反省・評価はどうあればよいか。

■指導助言

幼児一人一人の理解をもとに、保育を計画デザインし、それが実際の生活の中での具体的な子どもの姿として、どのように実現されているのかを省察することが保育の評価であるといえる。そのためには、具体的な幼児の姿を丁寧にとらえた記録をもとに、職員同士の多様な見方

も出し合う中で幼児の内面を考察し推察することが大切である。幼児の理解は、発達のみちすじを理解した上で、「教師と子ども」という固定的な関係にとらわれずに、一人の人間を理解しようとする姿勢が大切である。教師自身が人間として他者からどのように理解されたいのかを考えることも、幼児の理解と保育の振り返り、すなわち評価につながる大切な点ではないか。

【第8分科会】

研究主題 園運営の改善につながる学校評価
 助言者 東京学芸大学教授 岩立 京子
 提案園 東京都目黒区立ひがしやま幼稚園
 奈良県大和郡山市立郡山南幼稚園

■指導助言

自己評価の項目は各教員のもつ資源を理解し、それぞれが自信をもって出しやすいようにしながら園全体でまとめていく。やりやすいところから始め、徐々に質を上げながらそれを共有していく過程を大事にする。園の実情を考慮し最終的には各園が経営方針をしっかりと立てる。教育目標を実現するための具体的な方策は各園に任されている。難しいが整理していく営みの過程で視点が構造化され学びがある。とにかくやってみると積み重ねの中で精緻化されてくる。幼稚園教育が目指す目標である心情、意欲、態度を高めていけるように試みている部分を見えるように整理する。教育目標、教育課程と重点目標、項目指標のより一層の対応関係を考えていくことが具体的な改善につながっていく。

すがわら りょうこ

奥州市立前沢東幼稚園勤務(園長補佐)。
 岩手県国公立幼稚園研究協議会研究部長として、岩手大会の運営に携わる。



生活単元学習における学習材開発

矢巾町立矢巾北中学校

教諭 佐々木 弥生

1 はじめに

＜教材＝学習材としての捉え＞

生活単元における教材の主体的な活用による確かな学びには、机上の学習のように般化の難しさが無い。生徒一人一人にとって何がヒットして、それぞれがどのように関わり合って生きる力となっているかは分からないもので、生徒の内に育まれるものは、教育者の目的（つけさせたい力）の範囲を超えるほど豊かである。

この主体的な学びを支えるものとしての教材を、教えるための「教材」より広い概念である学ぶための「学習材」として捉えている。（以下も「学習材」で表記）

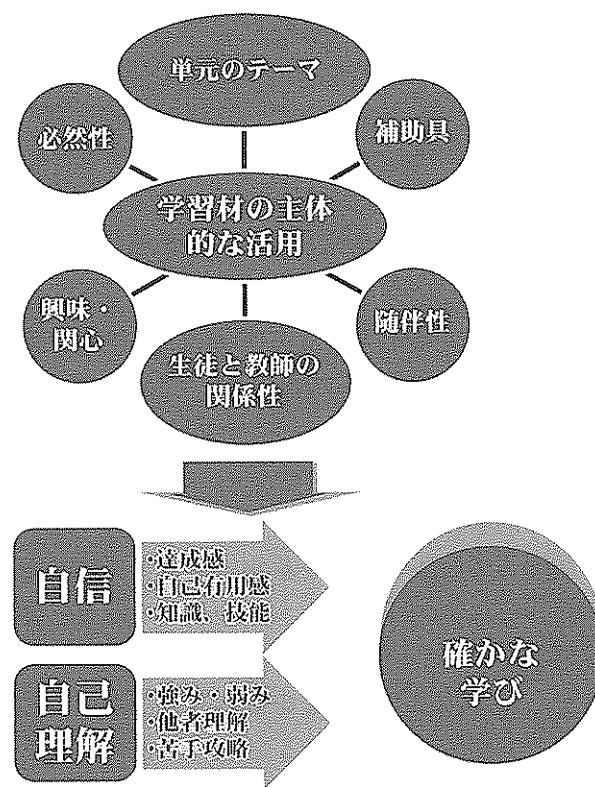
生活単元における学習材は、テーマとの関連性が強く、制作物そのものであることが多い。このテーマ設定や学習材づくりは、学習活動に向かう生徒の表情や姿を想像し、生徒が興味関心を持続できるほどのやりがいのある学習活動となり得るかどうかの思案に始まる。

＜学習材の主体的な活用＞

生徒の内に育まれる確かな学びは、学習材の主体的な活用によって実現される。テーマや活動内容が与えられたものであっても、「できた！」という達成感が、「できる！」という自信とやりがいによって変わっていく過程がある。作業のコツなどを発見できたりすれば更におもしろくなっていく。できなかったことができるようになる技能の開花や向上もさることながら、自分のbefore afterを知り、内界の広がりを感じることができる喜びは、生活を支える強力なバネになる。この快感を自らが求めるようになる自発が主体的な学習活動の継続につながる。

＜主体性を支える要素＞

生徒の主体性を支える要素はさまざまである。生徒や学習活動の内容によってその重要度も変わってくるが、これらが学習材の主体的な活用のきっかけや原動力となっているようである。



＜自信と自己理解＞

深まりや広まりのある確かな学びが育まれていく過程には、生徒自身が自分の強みや弱みを知り、自分と向き合う挑戦もある。刹那的な楽しさではなく、やりがいのある学習の継続は、将来の社会生活や家庭生活をも楽しくするとともに、たくましく生きる力となるであろう。

自信を獲得し、自己理解を通して適応していく学習活動の過程は、自立を確立していく一歩一歩であると思える。

2 学習材 実践例 (テーマと特徴)

① テーマ「がくぶちを作って展覧会を開こう！」



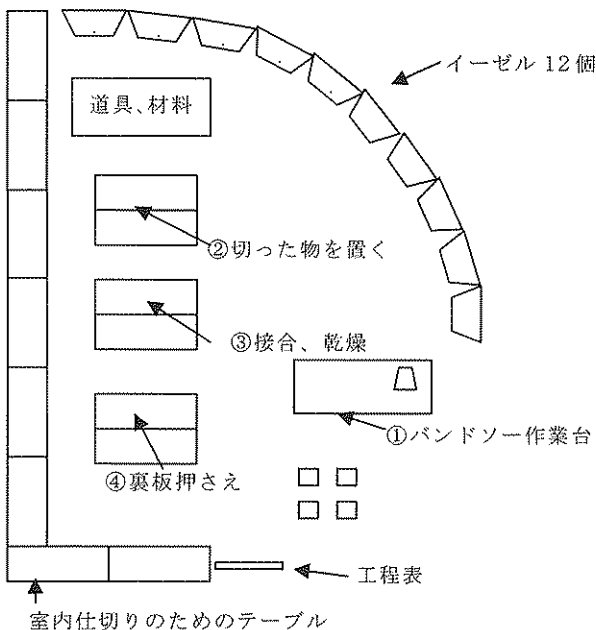
「展覧会」

○生徒の好きなことを生かしたテーマ

- ・自由時間には、いつも絵を描いている生徒。

○場の設定の工夫

- ・イーゼルを配置
→展覧会のイメージと作る額縁の数の見通しがもてるように
- ・作業テーブルの配置
→作業毎、行程順で仕事ができる。



「作業場」

※全校共有スペースのランチルーム半分を借りて常設

② テーマ「畑を作ろう！みんなで工事」



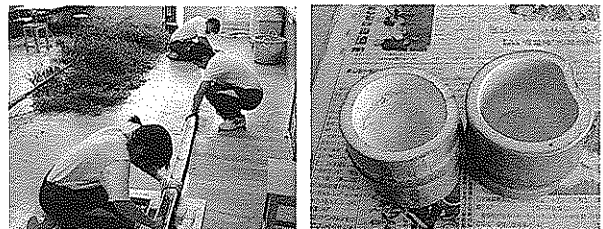
○校庭裏の荒れた草むらを開拓。12トンの土を入れて畑に。

○地域の苺生産者の方を招いて苺の苗植え。

○苺、サツマイモ、南瓜栽培を収穫、加工、学校祭での販売へつなげる。

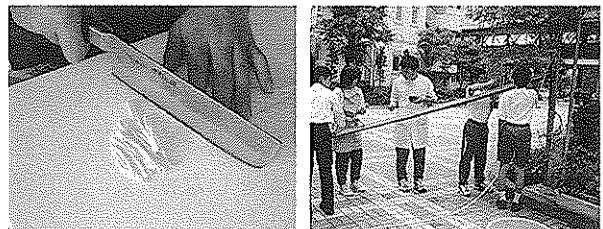
○3年目には、小動物の被害を防ぐための柵作りを基礎工事から行った。周囲、上部を取り外し可能なネットで覆う。

③ テーマ「手打ちうどんを作って流しうどんをしよう」



孟宗竹のやすりがけ

輪切りにして作った器



手打ちうどん作り

中庭で毎日ゲストを招いて

○作る喜びを道具作りから食までトータルで。

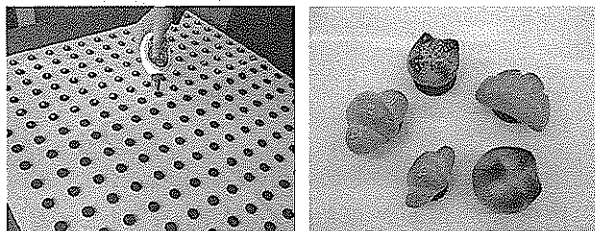
○学校職員の他にも縁ある方々をゲストに招いて、楽しさを共にする喜びを。

○季節を楽しむ。

○雨天時は屋内で。毎日、うどん作り、道具出しから、後片付けまでアクティブに。

④ テーマ「銀河祭で星組ショップを開こう！」

＜パン細工マグネット作り＞



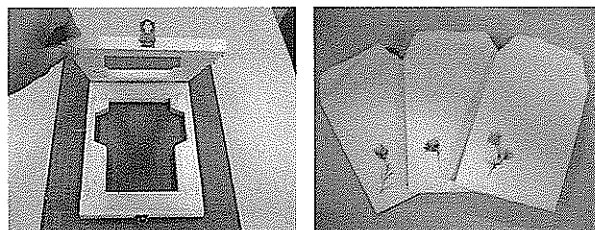
- 全工程、全員で同時進行。
- 3種類、600個の大量生産

＜紙漉をしてポチ袋作り＞



パルプ液作り

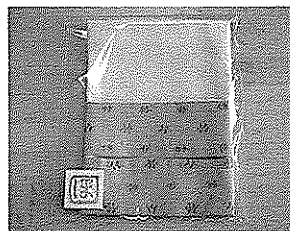
押し花の位置を視覚提示



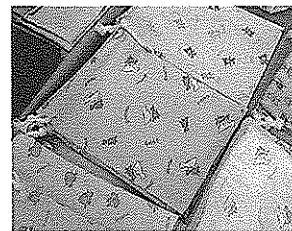
展開図型の漉き枠

- 全校生徒に牛乳パック提供を募集した。
- 得意と思える作業、挑戦してみたい作業などを理由にそれぞれが作業分担を自己選択。流れ作業。担任は主に紙漉をしながら、全工程を支援。
- 質の高い物作りと作業のしやすさを追求し、紙質とパルプ液の研究、漉き枠の改良を重ねた。
- ◇紙漉2年目は、種をまいて育てたピオラの花で押し花を作り、漉き込んだ。4色のバリエーションも楽しんだ。
- ◇紙漉3年目は、A4の紙を漉いて、名刺作りをして、校長先生にプレゼントをした。

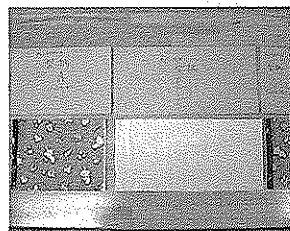
＜布製品作り＞



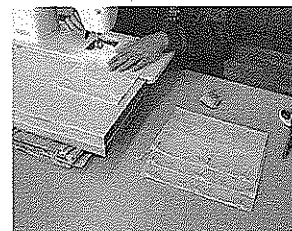
ティッシュケース 30枚



巾着小20枚、大10枚



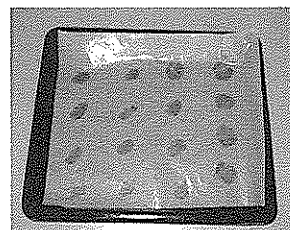
厚紙で作った型紙



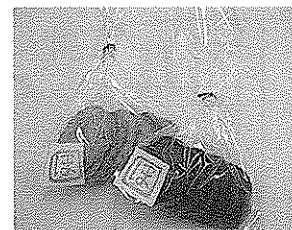
ミシン台の高さを延長

- 生徒が作業しやすく、同じ規格で量産できるように、型紙、縫い代の印付け用のガイド、三つ折り幅を決めるアイロンがけ用ガイドを厚紙で制作。
- 縫製中の布が安定して送られるよう、ミシン台の高さを延長した。

＜クッキー作り＞



等間隔に置くために



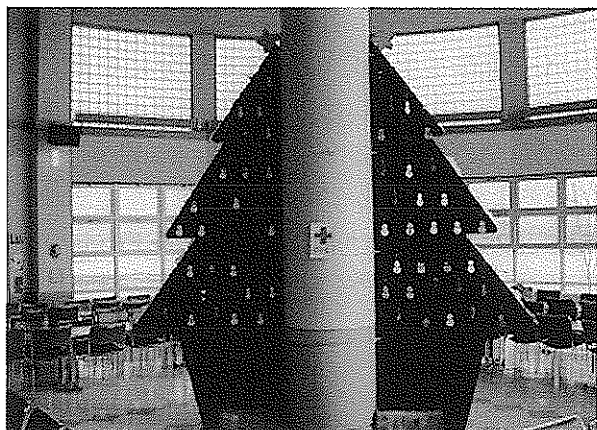
384枚×2種類

- 焼成時のオーブン皿に並べる作業も、報告や確認なしでどんどん進められるように、サラダ油を塗った上にクッキングシートを置く。しみ出た油が目安になる。
- できあがった品物の袋詰め作業も、うれしく楽しい。袋には星組の「ほ」シールを。

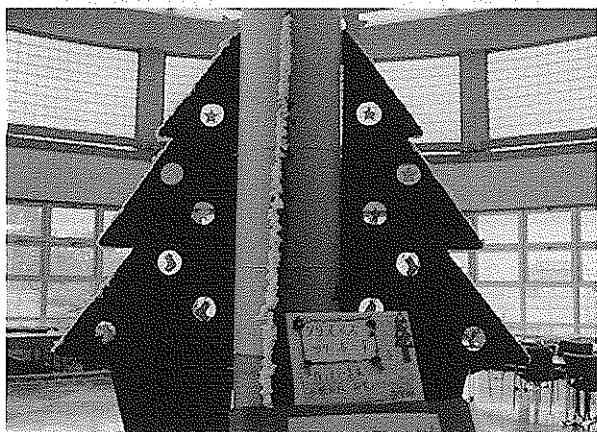


販売会当日は、100人を超える盛況ぶりであった

⑤ テーマ「みんなでクリスマスツリーボードを作ろう」



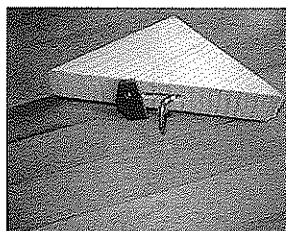
2007年製



2008年製

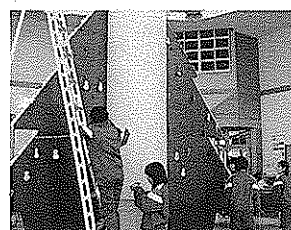
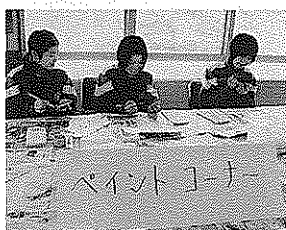
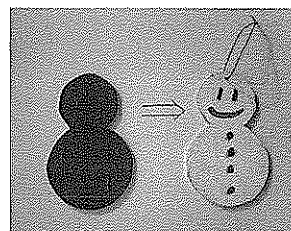
<ツリーボードづくり>

- ベニヤ板と、柱となる角材を主な材料とする高さ4mのダイナミックな木材加工。
- 2人で制作した2007年は、オーナメント(飾り)をかけるフックを128個取り付けるデザイン。メンバーが4人になった2008年は、更に穴あきの2枚を制作、合わせて4方向に広がるデザインにした。
- 造形が好きで得意な生徒はバンドソーを使って木製オーナメント作りを、仕事が丁寧で正確な生徒は円切りカッターを使用して穴をくりぬく作業を、可愛い物好きな女子生徒はミシンで布製のオーナメント作りを担当。担任は布製のオーナメント作りをしながら、木材加工の2人に気を配る。
- 前年度の128個のねじ込み作業の痛い経験から考案した補助具である。ねじ込み作業がクルクルらくらくおもしろいほど快適にできるので、まっすぐねじ込む技に挑戦できる。



<オーナメント作り>

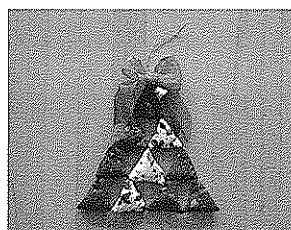
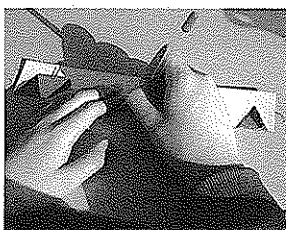
○2007年は校内に宣伝して交流の機会を設けた。



昼休みを利用したオーナメント作り、飾り付け

○2008年は、ツリーボード用のオーナメントと全校の各教室や職員室の出入り口に飾る布製のオーナメントをつくった。

布製の場合、一つずつ印を付けていく型紙では、一つ一つの面倒感を増長させてしまう。配置の仕方を見通しももてず布を無駄にってしまうことも想定できる。そこで、補助具として下の写真のような連結型紙をつくった。布端に合わせてクリップで固定すれば1度に16枚の印を付けられ、一気に沢山できるうれしさや楽しさが作業の継続につながる。裁断の効率もよい。



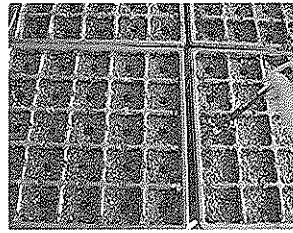
⑥ テーマ「種をまいてピオラを育てよう！

3000株～春をプレゼント～

＜種まき・育苗＞



土入れ作業



種をまく穴開け

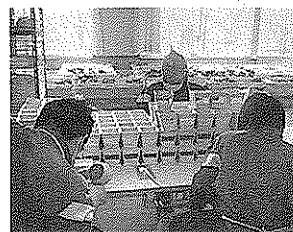
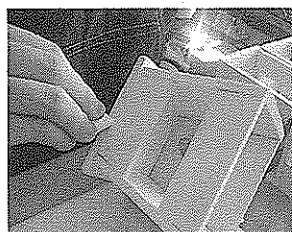


咲き誇る3000株 ビニルポットへの植え替え作業

＜鉢カバー作り＞

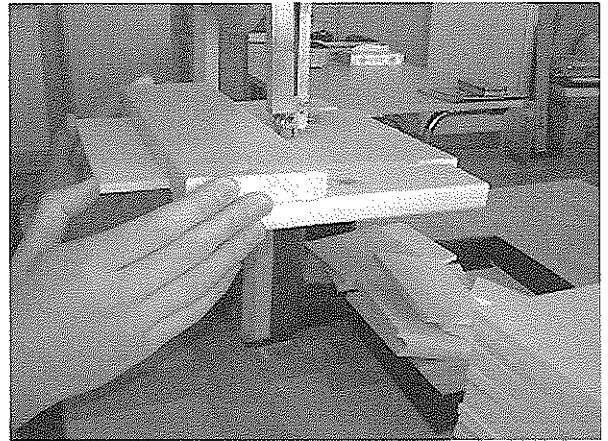
○卒業生へのプレゼントとして185個を制作。

2月の予餞会で体育館に花道をつくった。



○バンドソーの安全ガード

木材を隙間に入れて押し込むと、薄い板が半分に分れる補助具。この單元では、200個の鉢カバーを作るために100枚を半分にした。手が触れる危険の無いよう、バンドソーの刃を覆ったが、切っている実感を持ち、作業への集中できるよう、木材が切れていく様子を確認できるほどの隙間も設けた。



＜プレゼント訪問＞

学区内の保育園、小中学校、町役場、盛岡市内の特別支援学校へも訪問して、プレゼントをした。



町内4つの小学校に



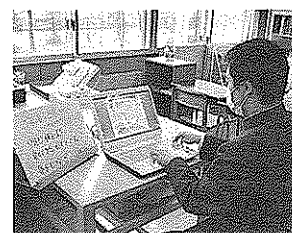
特別支援学校には600株を



卒業式や入学式の昇降口、中庭の花壇をかざった

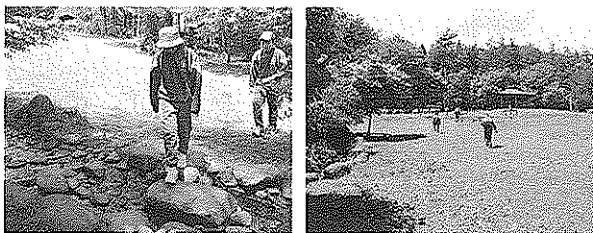


＜チラシをつくって販売＞

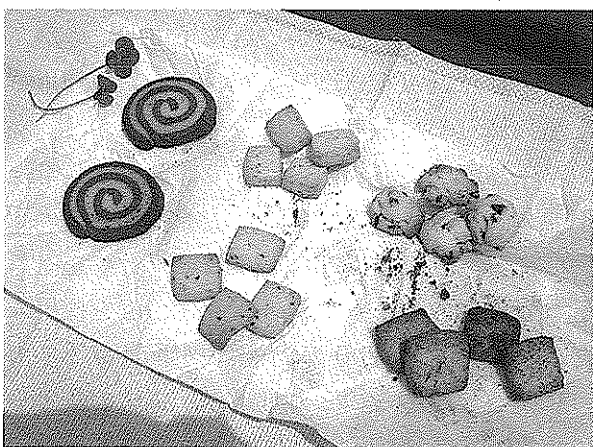


授業参観日に、昇降口前で

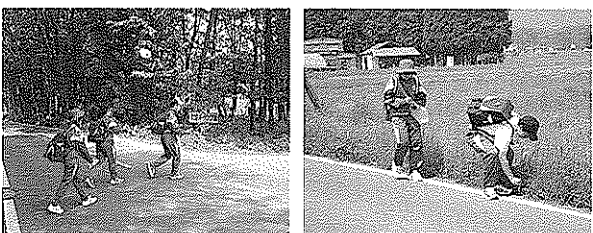
- ⑦ テーマ「つどいの森へハイキングー！！」
 <おやつを作って、ハイキング>
 ○新緑の美しい初夏の自然を満喫する季節単元。



- 1週目は、後半2週間毎日のハイキングに向けて5種類のクッキー作り。



- 2週目のハイキングは、町営キャンプ場まで片道4km、往復8kmを歩いた。
 ○帰り道は、「町をきれいにしよう！」という活動を入れて、道ばたのゴミ拾いをしながら帰校した。

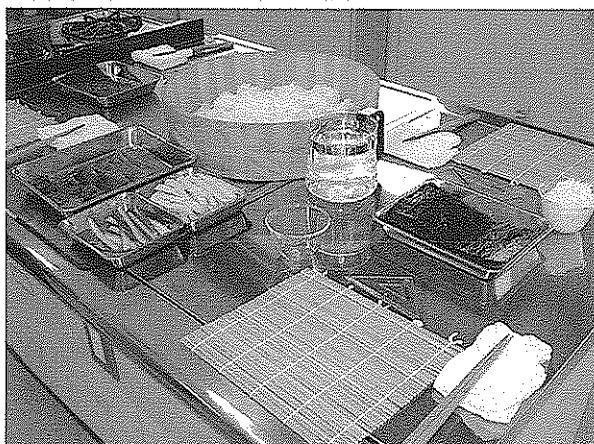


- 3週目は、「つどいの森」へ片道8kmをあるいた。8kmは体力の限界を感じるほどの道のりなので、帰路はバスを使った。



管理人の方と仲良くなり、クッキーじゃんけんをして楽しむ触れあいがあった。

- ⑧ テーマ「のり巻きを作って、節分に恵方巻を販売しよう！」
 ○季節単元
 ○先生方を対象に校内販売。
 ○チラシ、注文書作り



3 おわりに

中学校では、思春期の難しい時期に直面することがある。マイナス思考になっている時は、共に歩み始める前の十分なインテークと理解を促すための説明が必要になる。これが生かされるか否かは、生徒との関係性によるところが大きいと感じている。そして、チャイムに関係なく向かえる居場所とやりがいのある生活が常にあること。生徒は、必ず、自分で始める。しばらく作業に集中していると表情が和らいでくる。

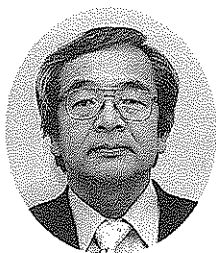
「なんか、こういうのっていいなあ。布を触って、こうしている時間って・・・。」

「心が落ち着くんです。楽しい、この作業。」

そこにいつでも向かえるように、戻れるように、生活の準備をしておきたい。

ささき やよい

滝沢村立滝沢南中学校、紫波町立古館小学校、盛岡市立乙部中学校、岩泉町立岩泉中学校を経て、現任教に勤務



「岩手教育情報交流ネット」の構築と運用について — ICT に吹きはじめた新しい風 —

岩手県立総合教育センター
主任研修指導主事 鈴木利典

1 はじめに

(1) 小・中学校を結ぶネットワークの必要性

平成14年に、光ファイバー専用回線で岩手県内の行政機関、病院等を結ぶ高度情報通信網「いわて情報ハイウェイ」を利用した「いわて教育情報ネットワーク（以下EDネット）」が整備された。これと併行し、各市町村も独自にLANの整備を推進したことから、県立学校はEDネットに、市町村立学校は各市町村単位のLANに接続され、今日に至っている。

結果として、県内の小学校、中学校、高等学校等の間、特に小・中学校間において、ネットワークを利用した情報の共有ができない状況が長く続いてきた。

「岩手教育情報交流ネット」は、このような状況を解決し、県内の教職員が自由に情報（電子ファイル等）を共有できるネットワークの構築を目指して当センターで研究・整備したのである。

(2) ネットワークの構築に求められた条件

当初、小・中学校のコンピュータ（以下PC）もEDネットに接続することが提案された。理想でもあり、うまくいくかに思われた。

しかし、設置者である市町村のLANとの関わりや、市町村のLANとは別に億単位の設備投資、維持費がかかるという財政的な課題がどうしても解決されず、小・中学校のPCがEDネットに接続されることはほとんどなかった。

「岩手教育情報交流ネット」を構築するためには、市町村のLANとの関わりをどうするかという技術的な面と、新たな負担をどうするかという財政的な面との二つの課題を解決しなければならなかった。

(3) 屋久島町の実践

これら二つの課題を解決する一案として、インターネットを利用した仮想のネットワークの可能性を探った。その中で目に止まったのが、後で詳しく説明する“NetCommons”を活用した屋久島町の実践である。

屋久島町は、平成の大合併で、旧上屋久町と旧屋久町が合併して誕生した。その際、島の6カ所に分散している庁舎からコンテンツをそれぞれ管理できるようにNetCommonsを採用した。導入費用は100万円弱、構築期間は1カ月未満、公開から約2カ月半で、従来の数年分に相当する11万回以上のアクセスがあった。当初、専用回線を利用したネットワークの構築も検討したが、コスト面からNetCommonsを選択した。導入経費100万円の主な内訳はレンタルサーバー、ドメイン名、デザイン費、コンテンツの収集費という。

小・中学校も利用できる新たなネットワークを構築しようとして直面していた技術的、財政的な課題は、屋久島町が採用したNetCommonsを導入することで解決できるという期待のもとに研究を進めた結果、「岩手教育情報交流ネット」の運用が現実のものとなった。

信じ難い話に聞こえるかもしれないが、現在、半年間で延べ2万人以上の教職員が、講座事務やアンケート調査の回答等に利用している本県の「岩手教育情報交流ネット」の初期の導入費用も、屋久島町同様に100万円を切っている。

以下、本格運用を開始している「岩手教育情報交流ネット」の概要を説明しながら、ICTに吹きはじめた新しい時代の風について紹介する。

2 「岩手教育情報交流ネット」の特徴

「岩手教育情報交流ネット」の基盤となっている NetCommons は、国立情報学研究所の 新井紀子教授が中心となって開発したソフトウェアで、次世代の情報共有基盤システムと呼ばれている。

「岩手教育情報交流ネット」は NetCommons の機能を取捨選択し、本県の実情に併せてカスタマイズしたシステムである。

(1) CMS による簡単なサイト構築と運用・更新

NetCommons は、インターネットが利用できる環境であれば、専用のホームページ作成ソフトを使用することなくサイトの作成、更新ができる CMS (Contents Management System) を採用している。ワープロで文章を作成する程度の技術で、誰でも情報発信することができる。

実際に、各学校に自動配信されている学校公開の案内等の情報は、各学校の担当者が校内の PC から直接書き込みを行っている。

CMS の登場で、専用ソフトを購入し勉強しなければインターネットに情報を発信することができなかつた時代は終わりつつある。

(2) インターネットを利用した情報共有

NetCommons は、ユーザーどうしの情報共有の手段（回線）としてインターネットを利用できる。そのため、経済的にも技術的にも既存の ED ネットや市町村 LAN に大きな影響を与えることなく「岩手教育情報交流ネット」を構築することができた。

現在、「岩手教育情報交流ネット」上の電子ファイルは県立学校の PC から、市町村立学校の PC から利用が可能となっている。(幼稚園・私立学校は希望による参加)

(3) 会員制サイトの構築と会員のグループ化

NetCommons は、一般の人が利用する普通のホームページの作成の他に、ID とパスワードを発行された人（会員・ユーザー）だけが利用できる会員制サイトを容易に作成できる。

この機能を利用することで、県内のすべての教職員が、あたかも専用回線で結ばれた大規模イントラネットを利用するように、共通の電子ファイルや情報を扱えるようになった。言い換

えれば、「岩手教育情報交流ネット」は、本県の教育関係者が利用する会員制サイトである。

さらに、この会員制サイトは、会員を目的別にグループ分けして運用することも可能であり、「岩手教育情報交流ネット」では、会員であれば誰でも利用できる「@ひろば」というサイトや県立学校と中学校のみが利用できる「高校一日体験入学」のサイト、授業力向上研修の関係者が利用する「授業力向上研修」のサイトなどをグループ別に構築し運用している。当然のことであるが、参加資格のないグループのサイトは、表示されず、閲覧は許可されない。

(4) 県内の教育関係者を結ぶグループウェア

NetCommons は、グループウェアとしての機能も充実している。グループウェアは、ネットワークで結ばれたユーザーどうしが情報の交換や共有を行うものであり、組織の外部からはアクセスできないのが一般的である。県（知事部局等）は「イービエント」を、ED ネットに接続している学校では「GWW2000」を、グループウェアとして利用しており業務の効率化を図っている。近年では、小・中学校でも校内 LAN でグループウェアを利用する学校が増えてきている。

グループウェアとしての NetCommons の機能（NetCommons では「モジュール」と呼んでいる）と「岩手教育情報交流ネット」における活用例は次のとおり。

① 「お知らせ」モジュール

HTML を使用しないで Web サイトに、文字の入力・編集、画像の挿入、リンクの挿入等をワープロ感覚できる。「岩手教育情報交流ネット」からの基本的な情報発信は、この「お知らせ」を利用している。

通知内容等を時系列で整理し掲載したい場合は、「日誌」モジュール、カレンダーに情報を記載して置きたい場合は「カレンダー」モジュールも用意されている。

② 「キャビネット」モジュール

PDF やワード、エクセル等の電子ファイルの掲載とダウンロードが可能であり、会員どうしが電子ファイルを共用する際に利用する。

「岩手教育情報交流ネット」では主に、研修講座の実施要項や様々な様式の提供に利用している。

③ 「掲示板」モジュール

グループ内の会員どうしが情報を交換したり論議したりする際に利用する。書き込んだ内容は、設定により、グループ内の会員に電子メールで自動送信される。各学校に電子メールで配信されている「実施要項の掲載」「学校公開情報の掲載」に関する情報は、当センターの講座担当者が掲示板に書き込んだ内容が、自動で県内の学校に一斉送信されている。

NetCommons では「掲示板」モジュールの他に「チャット」モジュールも利用できる。

④ 「汎用データベース」モジュール

文字、画像等の情報を会員が直接掲載し、データベースを共同で作成する機能。「高校一日体験」の案内や「学校公開」の案内は各学校の担当者がデータベースに直接書き込んで登録している。実際の運用では、セキュリティ等への配慮から、登録作業に承認機能（チェック機能）を設定し、管理者がデータを承認した時点で、登録された内容は公開され、電子メールで会員に一斉送信するように設定している。

データの内容が静止画像の場合は「フォトアルバム」モジュール、動画の場合は「動画配信」モジュールが利用できる。動画配信はAVIやMPEG形式の動画ファイルをアップロードし、Flash形式で配信する。掲載と視聴の操作感覚は、@YouTubeに近い。

⑤ 「登録フォーム」モジュール

会員の登録や参加申込み受付などに活用する。機能的には「汎用データベース」に近い。「岩手教育情報交流ネット」では、基本研修の申込みや事前調査、岩手県教育研究発表会の申込みに利用している。インターネットによるホテル予約のように、登録内容を、登録者に電子メールで自動送信することも可能である。

⑥ 「アンケート」モジュール

択一式、複数式、記述式等によるアンケート調査が可能であり、「平成22年度全県調査」や「授業力向上研修の事前調査」、「家庭学習に係

る調査」などに実際に活用している。

ユーザーからの回答結果は随時自動集計され、グラフ化できるものはグラフとして表示される。集計結果はCSVとして出力することができ、エクセル等で詳細な分析をする際に利用できる。

※NetCommonsはオープンソース

NetCommonsは、誰でも無償で利用できるオープンソースとして公開されている。コスト面と安全面からLinuxでの動作を基本に開発されているが、Windowsでの動作確認もされている。充実した機能と操作性やコストの面から「教育の情報化」を強力に支援するツールとして全国で活用されている。

全国の教育センターの1/3以上において導入や研究が進められており、NetCommonsを利用してネットワークを構築している教育関係機関は2,500を超えている。ここ数年は校内のグループウェアとしての利用や企業による利用も行われている。

3 これからのネットワーク活用

(1) クラウド化

クラウド (cloud) とは雲のことであり、インターネットに近い意味で用いられている。サーバー管理やデータ処理といった難しいことは雲 (インターネットの中のプロの世界) に委ね、一般のユーザーはインターネットに接続されたPCのみ利用するという方法をクラウド化と呼んでいる。

たとえば、各学校が自校のWebページを作成・公開するとき、「岩手教育情報交流ネット」を利用すると、各学校は机上のPCから文章を作成するようにWebページを作成・更新でき、他校に電子ファイルを提供したい場合でも、「岩手教育情報交流ネット」のキャビネットに掲載するだけで済むはずである。これが学校におけるクラウド化の一例である。学校におけるクラウド化が進めば、学校がサーバーを管理したり、学校にネットワークに関する専門的な知識・技術を持つ教員を配置したりする必要はなくなる。

クラウド化することにより、担当者が転勤した途端に学校のWebページが更新できなくな

るといような事態は起こらなくなると思われる。

クラウド化は高い利便性の他にコストダウンも実現することから、今後急速に進むと予想されている。学校のクラウド化は、学校のICT環境や情報発信能力を一変させる可能性がある。

(2) 一人一台PCとグループウェア

一人一台PCは、県立学校では既に実現しているが、市町村立学校においても急速に導入が進んでいる。まもなく、全ての職員がインターネットやグループウェアを利用できるPCを貸与される時代がやってくる。

一人一台PCとグループウェアを上手に活用することにより、事務連絡や電子ファイルの管理は大きく変わると思われる。各教科、各学年、校務分掌等の年間指導計画等が電子ファイルとして一括管理されることにより、年度末反省や新年度計画における資料作成の時間は軽減され、校務分掌の引き継ぎも、これまでより容易に行われることが期待できる。

一般的とは言えないが、7時間目の導入のために、NetCommonsを利用して毎日の連絡確認を行い、生徒の朝のショートホームルームを廃止し、職員の朝会の時間短縮も図った高校の事例が千葉県から報告されている。

(3) 児童生徒の安心と安全の確保に

会員登録を済ませると不審者情報等を携帯電話に送信をしてくれるサービスが多くなり、児童生徒の安心と安全の確保に貢献している。

しかし、多くの場合市町村やボランティア団体などが専門の業者に委託し、専用サイトを構築・運営している。運用に係る経費も相当と推察される。

これまで述べてきたNetCommonsやクラウドを利用すると、前記のような緊急連絡のシステムが1校あたり数万円で構築することが可能となってきている。

新型インフルエンザ等の対応策として、学級閉鎖、休校措置等をとらなければならない事態を想定し、休校の連絡、今後の予定等を緊急に連絡するためのシステムを、NetCommonsを

利用して構築した高校の事例が四国に見られ、類似した事例報告は増えている。

不審者情報や緊急連絡は、携帯電話から書き込むことができ、会員登録者の携帯電話への一斉送信も可能である。

安心、安全とは関係ないが、このシステムは中学校総合体育大会やインターハイなどにおいて試合結果の速報サイトとしても活用できる。その際の入力者は、大会運営者に限らず、保護者やサポーターも対象となる。入力には、もちろん携帯電話が利用できる。

4 おわりに

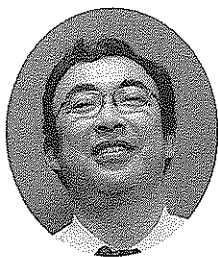
(1) 本格運用は先生方のアイデアから

NetCommonsを基盤とした「岩手教育情報交流ネット」の運用は、これまでのところ研修に関わる事務処理や調査等への活用に留まっている。小・中学校をはじめ、県内のすべての教育関係機関が情報を共有できるグループウェアとしての魅力は潜在したままである。

本文の締めくくりに、試合結果の速報サイトの可能性を一例としてあげたが、今後は、先生方がアイデアを出し合いながら「岩手教育情報交流ネット」を育てていくことが大切と考えている。

(2) 持続可能な情報化の推進

NetCommonsを活用した「岩手教育情報交流ネット」の事例は、職員の異動に左右されない情報化や、低コストで、どの学校でも容易に導入できる情報化が可能であることを示唆している。同時に、子どもたちが遊ぶゲームソフトのように、特別な研修を受けなくても利用できるソフトウェアが登場しつつあることも示している。今、教育の情報化は「持続可能」という新たな視点から推進されはじめている。これが、ICTに吹き始めた新しい風である。



知識・技能の活用を図ることを ねらいとした問題の作成

岩手県立総合教育センター

研修指導主事 高屋敷 一 博

1 はじめに

本県の義務教育では、「全ての児童生徒一人一人に基礎・基本の定着を実現していく」ことを目標にしています。

目標である基礎・基本の定着を支援するために、これまでの研究成果を踏まえて、今年度当センターで作成している「知識・技能の活用を図ることをねらいとした問題」について紹介します。

2 本県における基礎・基本の定着について

基礎・基本の定着とは、単に読み・書き・計算といった学習基盤や各教科における基礎的・基本的な知識や技能の習得に留まるものではなく、論理的に物事を思考したり、適切に判断したり、表現したりするなど習得した知識や技能を活用させることを通して、基礎・基本を身に付けさせることです。

平成20年度には岩手県教育委員会が「『活用』に関する指導資料」を作成し、平成21年度には当センターで「知識・技能の活用を図る学習活動に関する指導展開例の作成」と題して研究成果をまとめ、本県の教育課題である「活用」に関する指導の方向性を示しています。

その中で、「活用」を意識した授業とは、知識・技能を活用することが目的ではなく、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、それらを活用する学習活動を手だてとして、思考力、判断力、表現力等を育成することを目的とした授業であり、基礎・基本の定着を実現するためには、知識・技能の活用を図る学習活動を意図的に位置付けた単元構想に基づいた授業実践が求められていることが示されています。

3 基礎的・基本的な知識・技能の活用を図ることをねらいとした問題とは

基礎的・基本的な知識・技能の活用を図ることをねらいとした問題（以下「活用問題」と表記）とは、学習指導要領をもとに、知識・技能を活用して、思考力、判断力、表現力等を育むことを目的とした問題です。

「活用問題」は、授業での学習場面や実生活の様々な場面など活用を図る場면을題材とし、与えられた様々な情報から問題を解くために必要な条件を読み取ったり、読み取った情報から推測したり、習得している知識と比較したり、根拠を持って考えたりするなど、知識・技能を活用して解く問題です。

特徴は、各教科の「活用」を意識した授業において、記録、要約、説明、論述といった言語活動を行う能力が培われていることを踏まえて、思考力、判断力、表現力を育むために、与えられた情報を要約したり、自分の考えを説明したり、論述することなどを中心に問題を構成していることです。

4 基礎的・基本的な知識・技能の活用を図ることをねらいとした問題を作成する意義

「活用問題」は、「『活用』に関する指導資料」（2008 岩手県教育委員会）や「知識・技能の活用を図る学習活動に関する指導展開例」（2009 岩手県立総合教育センター）で示された「活用」を意識した授業を展開しながら、知識・技能を活用することにさらに習熟を図るために利用することを想定しています。

「活用問題」を、授業の中で、あるいは家庭学習の際に、どの問題を、どのように取り組ま

せるのか、その意図を明確にし、単元あるいは年間の学習指導計画に計画的に位置付けて取り組ませることで、児童生徒がより一層知識・技能を活用することに習熟していきます。

また、問題に取り組ませた後に、児童生徒の解答状況を踏まえた上で、正答とあわせて、解く際の考え方や解く際に必要な基本事項を示した資料をもとに教師が解説することで、児童生徒の知識・技能の活用についてはもちろんのこと、知識・技能の習得についてもさらに深めることができます。

教師に対しても、「活用問題」やその解説資料を示すことによって、「活用」についてより深く理解でき、「活用」を意識した授業を展開する際の指標にもなります。また、児童生徒の解答状況から、思考力・判断力・表現力等の育成状況について把握し、それまでの授業について「習得・活用」の学習活動のバランスはどうかであったか、言語活動をどのように授業に位置付けてきたかといった視点で授業を振り返ることで、授業改善につなげていってほしいと考えています。

これらのことから「活用問題」による演習を通して、児童生徒への基礎・基本の定着を支援できると考えます。

5 作題する教科と問題等の構成

小学校については、第5学年と第6学年の国語と算数の2教科、中学校については、第1学年から第3学年まで全学年の国語、数学、英語、社会、理科の5教科について「活用問題」を作成します。

問題の作成にあたり、資料として、以下のものをあわせて作成し、問題とあわせて提示します。

(1) 出題一覧表

学習指導要領の内容や指導事項、教科書の単元、「活用」のとりえなどとの関連を一覧にまとめたものです。

(2) 正答例と解説

事後指導の際に児童生徒に配布し、解説を行う際に利用することを想定して作成します。

(3) 教師用ガイド

「活用問題」に関する共通の基本的な考え方をまとめたものと、「活用問題」の構成及び利用方法の例などを校種・教科別にまとめたものをガイドとして示します。

6 「活用問題」の例

中学校数学科で作成している問題を例に、「活用問題」について、概略を紹介します。

(1) 問題作成に当たっての基本的な考え方

中学校数学科では、以下のような学習活動を知識・技能の活用を図る学習活動ととらえています。

中学校数学科における「活用」のとりえ

- 1 物事を数・量・図形などに着目して観察し、的確にとらえる（数学化）
- 2 与えられた情報を分類整理したり、必要な物を適切に選択したりする（分類・選択）
- 3 筋道を立てて考えたり、その考えの過程を振り返って説明したりする（構想・評価）
- 4 事象を数学的に解釈したり、自分の考えを言葉、数、式、図、表、グラフなど用いて、数学的に表現したりする（解釈・表現）

また、今回の学習指導要領改訂で、数学的活動が一層重視されています。

数学的活動は、基本的に問題解決の形で行われ、その過程では、試行錯誤をしたり、資料を収集整理したり、操作したり、実験したり、観察したりすることなどの活動が必要に応じて適切に選択されて行われることが求められています。

作題に当たっては、「活用」のとりえをもとに、数学的活動を取り入れた授業が行われていることを想定して「活用問題」を作成します。

(2) 「活用問題」の具体例

具体例として、第3学年の指導内容A数と式に示されている「(3) 二次方程式について理解し、それをを用いて考察できるようにする エ 二次方程式を具体的な場面で活用すること」に関連した問題を示します。

まず、次のような場面設定をしました。

「縦の長さより横の長さのほうが長い長方形があります。この長方形の周りの長さが A m、面積が B m²であるとき、この長方形の縦と横の長さをそれぞれ求めなさい。」という問題について、次の問いに答えなさい。

この問題では、条件設定に文字を用いることで、数値のみを変えた同様の設問を考えさせることができるようにしました。

問題の流れとして、2次方程式の既知の解法を確認し、それとは異なる解法があることを知り、既知の方法と比較して、その解法のよさを知ることができるような構成にしました。

1 $A=40$ 、 $B=96$ とします。縦の長さを x mとして方程式をつくり、それを解いて縦と横の長さをそれぞれ求めなさい。

設問1は、長方形に関する情報を、文字を用いて数学的に表現して、(2次方程式をつくり)授業で学習した解法で方程式を解き、解いた結果を吟味することが必要です。

具体的には、次の3点がポイントです。

- (ア) 縦の長さを x としたときに、横の長さは $(20-x)$ と表すことができるか
- (イ) 辺の長さと面積の関係から、2次方程式 $x(20-x)=96$ を立式することができるか
- (ウ) 方程式の解である $x=8$ と $x=12$ の2つの解のうち、縦が短いという条件から $x=8$ を選ぶことができるか

このように、設問は既習事項を結びつけて活用することを意図したものになっています。

2 $A=40$ 、 $B=96$ としたときの1の問題をいまから1700年ほど前のギリシャの数学者ディオファントスは、次のような方程式で解いています。

$$(10-x)(10+x)=96$$

ディオファントスは、どう考えて解きましたか。その考え方を説明しなさい。

設問2は、示された既知の解法とは違う解法についての説明を求めています。既知の方法以外にも、解法があることを知り、どのようにしてその解法が考えられたかを読み取らせて自分の言葉で説明させます。

96はその数値から面積を表していることは分かるので、面積を求めている式であることを読み取ります。次に周りの長さが20であることから、縦と横の長さの和が10であること、縦の長さが短いので、短くなった分を x で表すと、縦の長さは $(10-x)$ 、横の長さは x の分長いので $(10+x)$ で表すことができることを理解し、自分なりの言葉で説明できるかがポイントです。

3 $A=104$ 、 $B=576$ とします。長方形の縦と横の長さをそれぞれ求めなさい。

設問2は、設問1で確認した既知の方法と、設問2で知った新しい方法のどちらでも解けませんが、この場合は設問2の解法の方が楽に解けるはずですが、解法を比較することを通して多様な考え方を身に付けさせます。

具体的に設問2の解法で解いてみると、次のような解答になります。

解答 周りの長さが104 mであることから、縦と横の長さの和はその半分の52 mである。

したがって縦と横の長さは、和が52、積が576になる2つの数である。

(この2つの数が等しいとすると、積は和の半分26の2乗、676になるはずだから、2つの数は等しくない。つまり) どちらか一方は26より大きく、もう一方は26より小さい。

したがって、(横より縦が短いから、短くする分を x mとすると) 縦を $(26-x)$ m、横を $(26+x)$ mとすると、面積は576cm²であることから、次の方程式を解けばよいことが分かる。

$$(26-x)(26+x)=576$$

$$676-x^2=576$$

$$x^2=100$$

$$x=\pm 10$$

$x = -10$ のとき、縦が横より長くなり、問題にあわない。

$x = 10$ のとき、問題にあっている。

答 縦の長さ 16 m 横の長さ 36 m

これに対して、授業で学習した解法で解くと次のような解答になります。

解答 周の長さが 104 m であることから、縦の長さを x m とすると、横の長さは $(52 - x)$ m で表すことができる。

したがって $x(52 - x) = 576$

これを解くと

$$-x^2 + 52x - 576 = 0$$

$$x^2 - 52x + 576 = 0$$

$$(x - 16)(x - 36) = 0$$

$$x = 16, x = 36$$

縦の長さのほうが短いから、 $x = 16$

答 縦の長さ 16 m 横の長さ 36 m

このように授業で学習した方法でも解けますが、因数分解が大変です。

これだけ数値が大きい因数分解は授業で扱っていませんので、立式できた生徒も因数分解でとまどうかも知れません。しかし、原理をおさえていれば解ける問題です。

また未知数を x と置くことは、数学ではある意味当たり前ですが、設問 1 のような解法と比較することで、何を x に置くかによって解答が楽になることもあることを、この問題を通して学び取ってほしいものです。

この問題は、2 次方程式をひととおり指導した後に組み立てることを想定していますので、設問 1 の解答状況が思わしくなければ、復習をきちんとすることで、基礎的な知識や技能の定着を図ることができると思いますし、一方で、設問 2 に組み立てることで、思考力や表現力を養うことができます。

設問 2 で示された方程式は、解まで求めていませんから、設問 3 を設問 1 の解法、すなわち授業で学習した方法で解く生徒がほとんどかも知れません。当然、設問 1 から手の着かない生徒もいれば、設問 2 の意味すら読み取れない生徒もいると思います。

そこで、解説が重要になります。

問題に取り組ませた後に、生徒の解答状況を把握した上で、既習事項を使ってこのように考えることができるのだということを示したり、確認したりすることを通して、基礎・基本の定着を図ることができます。

(3) 「活用問題」の使用例

中学校数学科では「活用問題」を、授業や家庭学習で次のように使用してほしいと考えています。

(ア) 単元の終わりに、演習問題として

問題の題材として、一單元ごとの学習をふまえて取り組むことができるものを取り上げていますので、單元または小單元終了時に、演習問題として利用することができます。

(イ) 朝学習や家庭学習の課題として

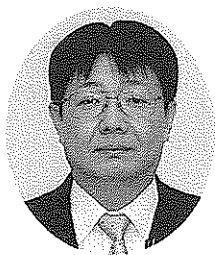
授業と連動させて、朝学習や家庭学習の課題として利用することができます。また同じ問題であっても、計画的に繰り返し取り組ませることによって、知識・技能を活用することの習熟を図ることができます。

(ウ) 週末課題や長期休業中の課題として

「活用問題」は、短い時間で取り組ませることも可能ですが、時間をかけて考えさせることも「活用」では大事なことです。時間制限を設けず、個人の学習状況に応じて取り組ませることも可能です。

7 終わりに

中学校数学科を例にあげながら、「活用問題」について紹介しました。他の校種・教科についても年度末に当センター Web ページに、問題等を掲載しますので、先生方の創意工夫により有効にご活用下さい。



中学校理科年間指導計画「いわてモデルプラン」 に基づいた観察・実験の指導資料の作成

岩手県立総合教育センター
研修指導主事 高橋 一成

1 はじめに

平成20年3月告示の中学校学習指導要領では、各地域の実情にあった理科の学習ができるよう、学年内における学習の内容の指導順序についての規定が削除された。これを受けて県教委は、岩手県の地域性を考慮した「いわてモデルプラン」を策定し、中学校理科の単元を組み替えた年間指導計画編成の参考例を示した。

しかし、これまで、本県の気候等と合致しないために観察・実験が見送られてきた単元では教師自身も観察・実験の経験を重ねることができず、地域の素材を活かした適切な指導料が蓄積されてこなかった状況にあった。

そのため、こうした単元を「いわてモデルプラン」を参考に適切な時期に展開しようとしても、

理科の授業に観察・実験を取り入れられないことが懸念される。

このような状況を改善していくためには、「いわてモデルプラン」に基づいた観察・実験を取り入れた授業ができるような指導資料の作成が必要である。この指導資料には、教科書に掲載されている観察・実験のうち学習の順序を入れ替えることで可能になった内容を中心に、地域の素材を活かした教材の準備から観察・実験の実施までのポイントなどを盛り込む。

そこで、本研究は、中学校理科年間指導計画「いわてモデルプラン」に基づいた観察・実験の指導資料を作成することによって、中学校における理科の学習指導の改善に役立てようとするものである。

2 現在使用している教科書の年間指導計画（教科書会社作成）と「いわてモデルプラン」の比較

【1学年】

月	現在の年間指導計画	月	「いわてモデルプラン」
4	1 植物の世界（2分野）	4	1 身の回りの現象（1分野）
5		5 第1章光の世界 第2章音の世界	
6	1 身の回りの現象（1分野） 第1章光の世界 第2章音の世界 第3章いろいろな力の世界	6	1 植物の世界（2分野）
7		7	
8		8	
9	2 身の回りの物質（1分野）	9	1 身の回りの現象（1分野） 第3章力の世界
10		10	2 大地の変化（2分野）
11	2 大地の変化（2分野）	11	
12		12	2 身の回りの物質（1分野）
1		1	
2		2	
3		3	

【2学年】

月	現在の年間指導計画
4	3 動物の世界 (2分野)
5	
6	
7	3 電流 (1分野)
8	
9	
10	
11	4 化学変化と原子・分子 (1分野)
12	
1	4 天気とその変化 (2分野)
2	
3	

月	「いわてモデルプラン」
4	4 天気とその変化 (2分野)
5	
6	
7	4 化学変化と原子・分子 (1分野)
8	
9	
10	3 動物の世界 (2分野)
11	
12	
1	3 電流 (1分野)
2	
3	

【3学年】

月	現在の年間指導計画
4	5 生物の細胞とふえ方 (2分野)
5	
6	5 運動と力 (1分野)
7	
8	6 エネルギー (1分野)
9	
10	
11	6 地球と宇宙 (2分野)
12	
1	7 科学技術と人間 (1分野)
2	7 自然と人間 (2分野)
3	

月	「いわてモデルプラン」
4	5 運動と力 (1分野)
5	
6	5 生物の細胞とふえ方 (2分野)
7	
8	6 地球と宇宙 (2分野)
9	
10	6 エネルギー (1分野)
11	
12	
1	7 自然と人間 (2分野)
2	
3	7 科学技術と人間 (1分野)

3 「いわてモデルプラン」策定のねらい

- ① 1学年の「1 植物の世界」では、植物の開花時期が岩手ではズレているために教科書どおりの学習が行いにくい。そのため、「1身の回りの現象」の一部と入れ替え、5月中旬から学習ができるようにした。
- ② 1学年の「2 大地の変化」では、地層の野外観察が扱われているが、岩手では1月以降は降雪や気温などの関係から実施しにくい。そ

ため、「2身の回りの物質」と入れ替え、10月から学習ができるようにした。

- ③ 2学年の「天気とその変化」が、学年の最後の単元となり、気象現象の年間を通した学習や継続的な観察の実施が難しい。そのため、この単元を年度の最初に移動することにより、季節毎の気象現象や年間を通した継続的な観察ができるようにした。
- ④ 3学年の「5 生物の細胞とふえ方」では、植

物の開花時期が岩手ではズレているために教科書どおりの学習が行いにくい。そのため、「5 運動と力」と入れ替え、5月中旬から学習ができるようにした。

- ⑤「6 地球と宇宙」では、教科書では天体観察が扱われているが、10月以降では気温が下がるために実施が難しい。そのため、「6 エネルギー」と入れ替え、8月からの学習ができるようにした。

4 「いわてモデルプラン」実施上の課題についての検討

本年6月に第1回研究協力員会議を開催し、本研究の研究協力員をお引き受けいただいた花巻市立石鳥谷中学校の熊谷宏志教諭と北上市立南中学校の近藤久美子教諭から、「いわてモデルプラン」についての意見を聞き、その結果を次のようにまとめた。

(1) 実施上の課題について

- ①1学年の「植物の世界」が4月から5月中旬に移動したことにより、教科書どおりの観察・実験ができるようになるので問題はない。教科書に示されている素材以外のもの(岩手に適するものなど)で活用できる素材の資料があればよい。
- ②1学年の「2 大地の変化」が1月から10月に移動したことにより、地層の観察ができるようになる。ただし、これまで実施したことがほとんどないので多くの課題がある。
- ・各学校で観察する場所を探さなければならない。→地区の学校間での情報交換が必要
 - ・地層をどのように解釈すればよいか、わからない。→事前の準備に時間がかかる。外部講師の活用はできないか。
 - ・野外観察での授業の進め方がわからない。→指導資料・ワークシートの作成
- ③2学年の「4 天気とその変化」が1月から4月に移動し、年間を通した(季節ごとの)観察ができるようになることは望ましい。ただし、課題もある。

- ・温度・湿度・気圧・風向・風速など、何を観測していくのか。

- ・乾湿計はあるが、それ以外の用具がない学校も多いのではないかと。→観測に必要な教具の作成

- ・季節ごとの観測をする場合、他の単元の途中に観測の授業が入ってくる。1時間で観測して、その結果をまとめられるような授業をする必要がある。→指導資料の作成

- ④3学年の「5 生物の細胞のふえ方」が4月から5月後半に移動したことにより、教科書どおりの観察・実験ができるようになるので問題はない。教科書に示されている素材以外のものでも活用できる素材の資料があればよい。

- ⑤3学年の「6 地球と宇宙」が10月から8月に移動したことにより、天体の観測が実施しやすくなる。ただし、時期がずれたことにより何を観測するのか検討しなければならない。→指導資料の作成

(2) 最重点課題について

上記①～⑤を検討した結果、②の「地層の観察」に最優先で取り組む必要があるのではないかと結論に達した。その理由は、1学年の「2 大地の変化」を1月以降の学習から10月から12月上旬の学習に移動させても「地層の観察」を実施しなければ、単元を移動させる意味が全くないことになってしまうからである。

(3) その他

従来実施していなかった観察・実験については教師の経験不足も課題ではあるが、このことは指導資料等の作成である程度解決することが可能である。しかし、用具がない・不足しているということは指導資料等の作成では解決が難しい。観察・実験の充実を目指した「いわてモデルプラン」が目的を達するためには用具等の充実も不可欠である。

5 「地層の観察」に向けた取組

(1) 観察させる露頭の選定

研究協力員会議の結果を受け、本年10月～

11月に研究協力員の所属校で「地層の観察」学習を実施することとした。

しかし、2つの学校はどちらもこれまでに「地層の観察」を実施したことがなく、学校周辺には観察に適した露頭がないのではということだった。そのために、まず、各学校の周辺で観察に適した露頭を探すことから始めた。

その結果、石鳥谷中学校については、これまでも総合教育センターの研修講座で利用してきた葛丸川の露頭を観察場所とすることとした。



葛丸川添いの露頭

南中学校については、茂庭主任研修指導主事が2日間をかけて学校周辺を探したが、なかなか見つからず、最終的には学校から車で約15分ほど離れた金ヶ崎工業団地内に露頭を見つけることができた。



金ヶ崎工業団地内の露頭

(2) 第1回現地調査の実施

観察させる露頭の選定を受け、第1回の現地調査を実施した。

8月23日(月)には、総合教育センターの茂

庭主任研修指導主事、高橋研修指導主事、石鳥谷中学校の熊谷教諭の3名で、葛丸川添いの露頭の調査を行った。この露頭の最大の注意点は露頭までのルート確保である。駐車場からは川岸までは、草がかなり伸びており、事前に草を刈っておく必要がある。次に、川を渡らなければならないので、水位に気をつける必要がある。この露頭では、断層をはっきりと見ることができるので、ダイナミックな「大地の変化」を理解することができる。



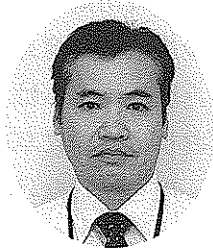
断層の様子

8月27日(金)には、総合教育センターの茂庭、高橋と南中学校の近藤教諭および中村教諭の4名で金ヶ崎工業団地内の露頭の調査を行った。ここは、露頭の下がかなり広い空間になっていて、一度に多くの生徒が観察できる場所である。また、上空から見ると露頭がコの字型に配列していて、正面とその左右の地層の観察から、空間的な広がりを感じ取ることができる場所である。

6 おわりに

現在、「地層の観察」学習に向けた学習指導案や指導資料の作成を行っている。詳細は2月の教育研究発表会に報告することとなる。

県では、「いわてモデルプラン」は年間指導計画の1つの参考資料であるとしている。指導の順序に関する規定が削除されているので、各学校が地域の特徴を活かした年間指導計画を作成することが求められている。



あきらめず、寄り添い続けること

岩手県立総合教育センター

研修指導主事 吉田 竜二郎

質問

2年生の担任になり、昨年从不登校が続いている生徒を受け持つことになりました。自宅に電話しても本人は出ず、保護者ともなかなか連絡が取れません。これからどのように対応していけばよいでしょうか。

(中学校2年生担任)

1 はじめに

平成21年度の県内小・中学校不登校児童生徒数は984人で、昨年度よりも減少したとはいえ、多くの児童生徒が悩み苦しんでいる状況があります。不登校は、原因を特定することが難しく、長期化して本人はもちろん、保護者や同級生等にも大きなストレスになることがあります。

担任は、不登校を改善させるため様々な取組を実施します。しかし、不登校は原因、背景、本人の心情等、多くの要因がからみあい、その取組が必ずしも効果を上げるとはいえません。

長期化した事例については、本人、保護者など関係者に寄り添いながら、あきらめずに取り組み続けることが大切です。

2 学年・学校体制の構築

不登校への対応を考えると、学年・学校体

【学校体制での役割分担例】

分担	おもな役割
担任	生徒と関わり続ける(人間関係づくり)
学年	・担任への物理的、情緒的サポート
養護教諭	・保護者と関わり続ける
学校	・継続したカンファレンスの実施

制で不登校生徒を支えることが重要です。

(1) 担任はどう関わるか

担任は、生徒との関係づくりを進めます。本人と会えないときは保護者と、保護者とも会えないときは手紙を置いて帰るなど、担任としての思いを伝える努力をします。「様子を見る」という考えから、コンタクトを途切れさせるのは、マイナスに作用することが多いようです。ただし、その時に担任の行動が本人や保護者を追い詰めることにならないように気をつけたいものです。本人とのコンタクトが難しい場合は、まず保護者との関係づくりを進め、保護者の了解を得ながら本人との関係づくりを進めます。「不登校の〇〇さん」ではなく、あくまでも学級の一員の〇〇さんとの関係づくりという視点です。

(2) 学年・養護教諭等はどう関わるか

関係者でチームを組み、分担して担任を支えながら情報を共有し、善後策を協議します。具体的には、分掌上の負担軽減や保護者との相談、担任への情緒的サポートによる負担感の軽減等が挙げられます。

担任が該当生徒に関わっている間、学年体制で学級に関わったり、養護教諭や生徒指導主事が担任から取組状況を聞き、アドバイスをする等、組織的に担任を支える体制があつてはじめて、担任が安心して取り組むことができるようになります。

3 早急に成果を求めない取組

担任はもちろん、私たちは「登校させる」ことを目指して様々な取組を行います。しかし、登校することが解決だ、と考えてはいけません。生徒が置かれている状況をふまえ、中学校

卒業後は一社会人として、自立することができるよう支援をすることが大切です。再登校を願いながらも、生徒自身の心と体のペースに合わせて粘り強く寄り添い続けたいものです。

3年生に進級すると、進路についても考える必要があります。本人がどのように生きていこうと考えるか、時期を見て保護者とも協議し、慎重に生徒とも話し合いを重ねて、方向性を定めていきたいものです。

早期に再登校へとこぎつけることができれば、それは大きな成果です。しかし再登校で取組を終了させるのではなく、その後も継続して観察や指導を行うことが必要です。学級経営の一環として集団と個を育て続けることを忘れてはなりません。

4 関係機関との連携

不登校は、学校の中だけでは解決できないことがあります。様々な取組を実施してもなお状況が好転しない場合、家庭内に問題があり福祉の視点からの支援が必要と判断した場合等、必要に応じて関係機関に相談すると、新しい解決法が見つかることがあります。

【県内の相談機関（例）】

（設置市町村によっては呼称が異なります）

- 岩手県福祉総合相談センター
- 児童相談所（一関市、宮古市）
- 岩手県立総合教育センター
- 盛岡少年鑑別所（相談も受け付けています）
- 岩手県警少年サポートセンター
- 市町村児童福祉課
- 市町村教育委員会教育相談員
- 医療機関（神経科・精神科等）

関係機関への相談の際には、以下の点に留意することが必要です。

第1に、保護者の了解、協力です。相談は、保護者が積極的に関係機関の支援を望むことが前提となるからです。保護者は、子どもが病人としてみられることや非行少年であるかのように見られることには抵抗があります。ですから、関係機関への相談の目的やメリット、相談した後の方向性等について丁寧に説明し、了解を取り付けた上で、保護者に付き添って一緒に相談するのが望ましいのではないのでしょうか。

第2に、それぞれの機関が持つ固有の機能や目的を調べることです。福祉関係が関わるのは、保護者による養育が難しい場合等で、医療機関は本人の治療が主目的となります。不登校の背景や本人が抱える課題等に応じて、関係機関の機能には限界があることも事実です。したがって、関係機関に期待することを明確にして、相談することを勧めます。教育機関以外への相談の場合は、あくまでも学校や保護者が主体性を持って相談することが大切です。

不登校の要因、背景等は複雑化しており、校内だけでは解決できない事例が増えています。市町村の教育委員会や福祉課、教育センター等に相談して、関係機関を紹介してもらう方法もあります。

5 再登校に向けた対応

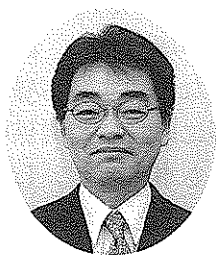
不登校を解決に向かわせるためには、該当生徒への指導はもちろん、学級の受入体制を整えなければなりません。教室に入るためには、該当生徒にとって、学級が心の安まる場所になっていることが必要です。

また、該当生徒を迎えるために周囲の生徒が気をつかうような雰囲気では、お互いに心を許しあう学級集団にはなりません。不登校の生徒を含む学級の全ての生徒にとって、教室が居心地の良い場所になるよう、担任として環境を整えることが大切です。

一番大事なのは、生徒や保護者、周囲の生徒など、関係する人間が、安心感・安定感をしっかりと持つことです。

6 おわりに

不登校は、生徒が道に迷い、どうしたらよいか分からなくなっている状況です。原因が担任や生徒間の人間関係などの明確な場合を除いて原因が分からないまま長期化してしまうこともあります。しかし、一番苦しんでいるのは本人であるという視点から、生徒が自分の足で立ち上がり、歩みを始めることを願って、決してあきらめることなく寄り添い続けたいものです。



高校国語科における言語活動の充実について

岩手県立総合教育センター

研修指導主事 熊谷和浩

質問

新しい学習指導要領の改訂の要点として、「言語活動の充実」があげられていますが、今後、授業改善をしていく上で留意すべき点を説明してください。（高校国語科教員）

はじめに

今回の学習指導要領の改訂は、平成19年に改正された学校教育法を踏まえたものであり、特に「言語活動」に関しては、新たに規定された学力の重要な要素である

- ① 基礎的・基本的な知識・技能の習得
- ② 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等
- ③ 学習意欲

を確実にはぐくむための学習活動であると考えられます。

1 言語活動の充実

国語科の学習内容は、言語そのものを使用して「話す・聞く、書く、読む」ことであり、授業において行うすべてが本来的に言語活動と言えます。しかし、今回の改訂における「言語活動」は、上記のとおり、明確な意図をもって行われる学習活動を指しています。

改訂に先だって出された平成20年1月の答申では、言語について、知的活動、コミュニケーションや感性・情緒の基盤と定義し、思考をつかさどり社会生活を行う上で、その能力の育成が重要であると述べています。つまり、言語操作は思考操作そのものであり、「言語活動」に

よって言語を操作する活動を活発に行うことが、思考を促すことになるといえます。

改訂前の学習指導要領においても「内容の取扱い」の中に言語活動例が示され、実践的な指導の充実を示唆していました。しかし、今回の改訂では、各科目の内容(2)に言語活動例を位置付け、指導にあたって(1)に示す指導事項を(2)に示す言語活動例を通して指導することを一層明確にしました。いわば「言語活動」は、授業を構築する上で必須の事柄であり、これまでとは明らかに重みが違います。

このことから、「言語活動」を授業に仕組む際には、指導事項に則し、学習のねらいを達成できる活動を開発しなければならないということになります。

2 中高を貫く系統性

続いて、「言語活動」を具体的に授業に仕組む上で、必要とされる観点について述べます。

指導事項に則して「言語活動」を考える際、大変参考になるのが平成22年6月に出版された『高等学校学習指導要領解説』の付録部分です。付録5においては、小学校から高等学校までの国語科の目標及び内容の系統表、付録6においては、中学3年から高等学校までの指導事項・言語活動例を一覧することができます。

国語科は、前学年までに習得した知識・技能を活用して、スパイラルに言語活動を繰り返していく教科です。この一覧を活用し、中学校で身に付けてきた能力を確認したり、習得の不足を補うため、中学校の各学年の指導事項をさか

のぼってみたりすることは、「国語総合」の指導にあたって大変有効です。単元目標等の設定の参考にすることもできます。言語活動例についても同様であり、生徒の状況に応じた指導事項とそのための「言語活動」を考える際の選択選択肢を大いに増やしてくれます。

【内容の系統表】

C 読むこと		系統性	
		中学（3年）	国語総合
指導の過程	表現に即した理解	ア 文脈の中における語句の効果的な使い方など、表現上の工夫に注意して読むこと	ア 文章の内容や形態に応じた表現の特色に注意して読むこと。
	文章の解釈	イ 文章の論理の展開の仕方、場面や登場人物の設定の仕方をとらえ、内容の理解に役立てること。	イ 文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりすること。 ウ 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと。
	考えの形成	ウ 文章を読み比べるなどして、構成や展開、表現の仕方について評価すること。 エ 文章を読んで人間、社会、自然などについて考え、自分の意見をもつこと。	エ 文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりすること。 オ 幅広く本や文章を読み、情報を得て用いたり、もの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。
	読書と情報活用	オ 目的に応じて本や文章などを読み、知識を広げたり、自分の考えを深めたりすること。	
	言語活動例	ア 物語や小説などを読んで批評すること。 イ 論説や報道などに盛り込まれた情報を比較して読むこと。 ウ 自分の読書生活を振り返り、本の選び方や読み方について考えること。	ア 文章を読んで脚本にしたり、古典を現代の物語に書き換えたりすること。 イ 文字、音声、画像などのメディアによって表現された情報を、課題に応じて読み取り、取捨選択してまとめること。 ウ 現代の社会生活で必要とされている実用的な文章を読んで内容を理解し、自分の考えをもって話し合うこと。 エ 様々な文章を読み比べ、内容や表現の仕方について、感想を述べたり批評する文章を書いたりすること。

授業における学習活動は、中学校で習得した知識・技能が活用され、どのような言語の能力が身に付いたかを、生徒自身がメタ認知できるような「言語活動」であるべきだと考えます。

3 「言語活動」開発の手がかり

改訂された学習指導要領には、OECDが実施したPISA調査の影響がうかがえます。調査結果を受けて、文部科学省は「読解力向上に関する指導資料」を作成し、授業改善の方向性を示しました。この資料は、PISA型読解力やクリティカル・リーディングを養成する観点も含み、「言語活動」開発の参考となります。指導のねらいごとに具体的な言語活動例も示されており、授業者の工夫によって、有効活用ができると思います。

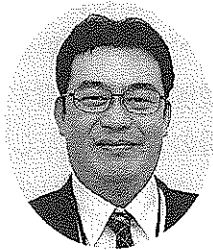
【読解力向上に関する指導資料】

読解力向上に関する指導資料—PISA調査(読解力)の結果分析と改善の方向—	
指導のねらい	
ア	テキストを理解・評価しながら読む力を高めること (7) 目的に応じて理解し、解釈する能力の育成 (4) 評価しながら読む能力の育成 (6) 課題に即応した読む能力の育成
イ	テキストに基づいて自分の考えを書く力を高めること (7) テキストを利用して自分の考えを表現する能力の育成 (4) 日常的・実用的な言語活動に生かす能力の育成
ウ	様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実すること (7) 多様なテキストに対応した読む能力の育成 (4) 自分の感じたことや考えたことを簡潔に表現する能力の育成

また、平成19年度から始まった「全国学力・学習状況調査」は、上記の指導資料にも準拠しており、「活用」に関する問題は、①知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、②様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力などを調査しています。中学生を対象とした調査ですが、「活用」に関する問題を解答するために必要な能力を検討し、身に付けさせたい力を明確にして「言語活動」を構想するうえで、大変参考となります。

おわりに

「言語活動」は、生徒の学習意欲を喚起する上で大変有効ですが、活動自体が目的化しないように気をつける必要があります。「活動あって学びなし」とならないよう、「言語活動」を通して指導事項を指導するという改訂の趣旨を十分理解し、効果的な「言語活動」の開発を進められることを期待します。



学力向上のために（中学校数学）

－ すぐに利用できる資料・教材の活用を －

岩手県立総合教育センター

研修指導主事 安部 広一

質問

学力向上のために、基礎・基本の定着を図らせる取組を行わせたり、自分自身の授業力を向上させたりすることが必要だと言われます。学力向上や授業改善のために、生徒や教師が利用できる資料・教材を教えてください。（中学校教科担任）

日々の学習指導・生徒指導・部活動指導や業務等に追われ、新たな取組や自己研鑽といってもなかなかそのための時間を作り出すことが難しい毎日です。そのような中でも、これから紹介する資料や教材等を使ってみることで、少しでも先生方の授業改善や生徒の学力向上に役立つと考えます。

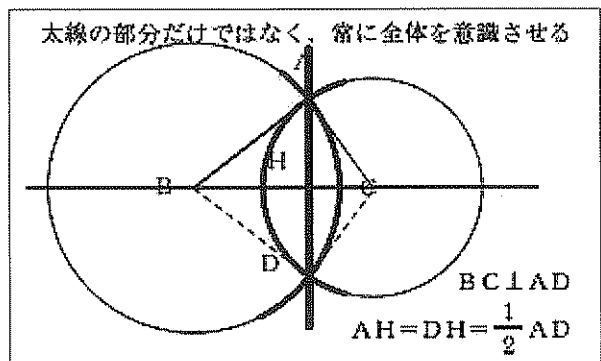
1 各種調査結果の分析資料

調査結果を分析すると、正答率が低い設問があると思います。そこで、あらかじめ、何学年の、どの単元の、どの時間の学習内容について、生徒の理解が不十分なのかをしっかりと確認しておいて授業に入る必要があります。そうすることによって、何にポイントを置いて授業を進めればよいかが明らかになります。

(1) 県学習定着度状況調査授業改善の手引

調査結果から、正答率の低い問題を中心に、「指導法の工夫改善が必要な問題」が示されています。さらに、それらの問題等について「指導のポイント」を具体的に示し、「指導上の留意点」では、有効な指導法を紹介しています。生徒一人一人の学習の定着状況を把握し、指導の充実を図ることができる資料です。

「三角形高さを表す垂線」の作図の指導上の留意点(H21 岩手県学習定着度状況調査中学校2年数学授業改善の手引より)



(2) 全国学力・学習状況調査関係資料

「全国学力・学習状況調査調査結果概要」では、各設問毎に、学習指導にあたって大切にしなければならない指導内容や考え方が示されています。また、「全国学力・学習状況調査において特徴ある結果を示した学校における取組事例集」や「全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた授業アイデア例」には、全国の工夫された指導実践や授業のアイデア等が掲載されています。

2 小中接続のためのカリキュラム資料

各市町村教育委員会を通じて、各小中学校に1枚ずつCD-Rで配布された資料です。

資料には、小学校第5学年から中学校第3学年までの算数・数学指導に関する情報が多く盛

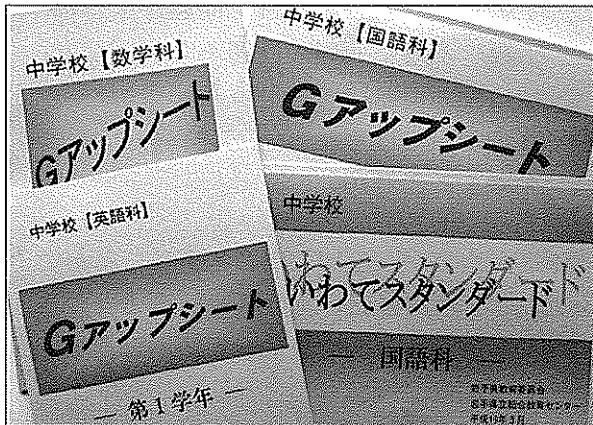
中学校 第3学年 戻る ⇒ Top ⇒ 小5 ⇒ 小6 ⇒ 中1	
A 数と式	B 図形
<p>既習事項(小2)との関連問題 図</p> <p>大既習(既習内容) 小5_046_047_048_2-5A1《平方根》</p> <p>ア 平方根の必要性和意味 【有理数・無理数】</p> <p>イ 平方根を含む式の計算</p> <p>ウ 平方根を用いること</p> <p>◆(教科書・第1章：平方根)</p> <p>◆1節：平方根 図 解</p> <p>◆2節：根号を含む式の計算 図 解</p> <p>既習事項(小2)との関連問題 図</p>	<p>既習事項(小2)との関連問題 図</p> <p>大既習(既習内容) 小5_046_047_048_3B1《相似な図形》</p> <p>ア 平面図形の相似と△三角形の相似条件</p> <p>イ 基本図形の性質</p> <p>ウ 平行線と線分の比</p> <p>エ 相似な図形の相似比と面積比及び体積の関係</p> <p>オ 相似な図形の性質を活用すること</p> <p>◆(教科書・第5章：相似な図形)</p> <p>◆1節：相似な図形 図 解</p>

り込まれています。学習指導要領解説や教科書等の資料もあります。特に、系統性が大切な数学の学習では、生徒が小学校でどのように学習してきたのかを授業者が理解しておく必要があります。新しい単元に入る前や、教室に向かう前の少しの時間にこの資料を利用することにより、小学校での学習との系統性が理解できます。また、指導のポイントや授業のヒントを得ることもできます。さらに、数多くの評価問題・調査問題等も収められており、教材研究や学習指導にとっても役立つ資料です。

3 Gアップシート・Gベース・Gチャレンジ

(1) Gアップシート

中学校数学において身に付けさせたい『中核となる力』が「いわてスタンダード」にまとめられています。これを基に作成された評価問題が「Gアップシート」です。評価問題シートや家庭学習シートとして活用できます。



(2) いわてっこGアップシート・Gベース学習サイト

Webサイトで教材を提供しています。

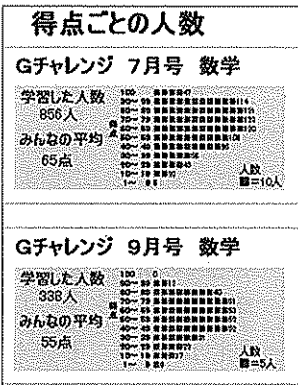
① Gアップシート・Gベース学習サイト

プリント教材である「Gアップシート」から

選んで印刷し、学習することができます。また、「Gベース」は、自動採点機能と学習履歴の記録機能をもつ教材です。コンピュータ上で学習するため、印刷準備の必要もなく、何度でも繰り返し学習させることができます。学校からだけでなく、家庭からも利用可能な教材です。

② Gチャレンジ

Gアップシート・Gベース学習サイト内にあります。県内の中学校3年生の学力向上(英・数)のためのコンピュータ教材です。自動採点機能により、瞬時に得点と度数分布を表示することから、生徒に自分の力を確認させることができます。また、正解できなかった問題については、復習すべきGアップシートの番号も表示されます。先生方には、生徒の得点表、正誤一覧表、各問



先生

問	問題	正答人数	正答率	最低正答率	基礎の正答率 (G/A)
問1	Gアップシート 145304 正負の数(4-2(2))	2人	0%	0%	0%
問2	Gアップシート 145302 文字式(1-2(2))	5人	1%	0%	0%
問3	Gアップシート 145307 方程式(4-2(2))				
問4	Gアップシート 245308 関数(1-1(1))				
問5	Gアップシート 245301 関数(1-1(2))				
問6	Gアップシート 245303 関数(1-1(2))				
問7	Gアップシート 245304 関数(1-2(1))				
問8	Gアップシート 145306 方程式(1-1)				
問9	Gアップシート 145306 方程式(1-1)				
問10	Gアップシート 145306 方程式(1-1)				

各問ごとに全学習者とクラスの比較が可能

の正答率等を表示します。例えば、右の数学7月号で最も正答率が低かった問題から、「増加量」という用語の

数学 7月号

最も正答率の低い問題

1次関数 $y=2x+3$ について、 x の増加量が4のときの y の増加量を求めなさい

正答率 23%

の意味や求め方を理解していない生徒が多いことが分かります。したがって、1次関数の変化の割合やグラフにおける傾きとの関係と併せて、用語の意味やその求め方を再確認させることが必要となります。このように、学習内容の定着が十分ではない箇所を、学級全体や生徒一人一人について把握し、学習指導の改善や個別指導等に役立てることができる教材です。

いわてっこ Gアップシート・Gベース学習サイト

利用方法

数学1年生
数学2年生
数学3年生

英語1年生
英語2年生
英語3年生

国語1年生
国語2年生
国語3年生

国語文法

★Gチャレンジで学習をチェックしよう

生徒の皆さんへ

9月号の範囲は1年2年3年1学期の内容です。学校で学習する場合には、先生から指示の後にログインしてください。

Gチャレンジはこちら(個人参加ができます)

・数学 9月号・英語 9月号

・数学 7月号・英語 7月号

先生方へ

1 クラス集計をしたい場合にはこちらをクリックして「先生用パスワード」を入力してください。

2 その後に生徒たちに「ログイン」をさせてください。→ クラス集計ができるようになります。

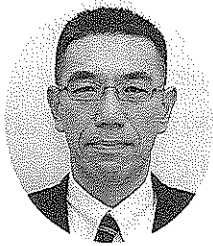
※ Gチャレンジの採点は完全自動です。

※ 変更方法の説明はこちら

★Gチャレンジ7・9月号の結果発表!

平均点、得点と人数のグラフ(度数分布図)は、こちらをクリック

★Gチャレンジ2010(7・9月号)個人参加ができます。ご利用ください!



子どもたちの自主性や自発性を養う学級活動

岩手県立総合教育センター

研修指導主事 佐々木 真

質問

指示されたことは、着実に取り組む子どもが多い学級です。しかし、自分たちで学級生活を充実・向上させようと活動することがあまり見られません。学級活動において、子どもたちの自発性や自主性を養う指導をどのように進めたらよいでしょうか。（小学校4年担任）

1 はじめに

子どもたちは、楽しく充実した学校生活を送りたいと願っています。子どもたち一人一人の願いが取り上げられ、解決していく活動を経験することにより、学級生活をよりよくしようとする自発性や自主性が養われていきます。

本稿では、学習指導要領で重視されている「生活づくり」と係活動に焦点を当てます。

2 身近な問題を解決する活動を経験させる

① 問題に気付く目を育てる

身近なところから、学級生活の充実・向上へつながる問題を見つけることができる、「問題に気付く目」を育てます。議題提案カードなどを使って、学級活動の議題を収集、選定する活動を取り入れることが考えられます。その際、次のような問題発見の視点を示すことが大切です。

- ・みんなで取り組みたいこと
- ・学級をよりよくすること
- ・学級を楽しくすること
- ・みんなにお願いしたいこと 等

子どもたち一人一人に、学級の生活への関心

をもたせるよう、学期のはじめなどに全員に考えさせる機会を設けたいものです。

② 学級全体で話し合う問題を選ぶ

一人一人が見つけた問題を、学級全体の共同の問題として取り上げることが適切かを検討する活動を位置付けます。たとえば、学級計画委員会などの組織で問題を選ぶことが考えられます。

【問題選びの視点】

- ・学級生活に直接結び付く問題か
- ・学級の全員に共同の問題か
- ・自分たちで解決できそうな問題か
- ・自分たちで決めたことが、自分たちで実践できる問題か 等

子どもたちが、適切な問題を選ぶことができるよう、学級担任として学級集団育成上の課題や、子どもたちの様々な思いや願いなどを把握しておくことも大切です。また、指導者として、子どもたちの自治的活動の範囲を事前に明確にしておく必要があります。

③ 話し合う必要感を高める

学級全体で話し合う前に、学級計画委員会などを中心に提案理由を準備します。提案理由は、次の2点からまとめ、子どもたちの話し合い活動への意識を高めます。

- ・何のために話し合うのか
- ・何をどのようにしたいのか

提案理由は、話し合い活動にとって非常に重要です。提案理由作成の際には、学級の共同の問題として受け止められるように、担当の子どもたちと内容を吟味しなければなりません。

④ 一人一人が自分の考えを話す

話し合い活動では、自分の考えをもって話すことができるように、事前に自分の考えを書くなどの活動を取り入れることが必要です。

話し合い活動で、子どもたちの考えが焦点化された時には、自分の考えをもう一度整理する時間を設けるなどして、全員の考えに基づいた集団決定にします。

⑤ 話し合いをもとに実践し、振り返る

集団決定されたことに沿って、役割を分担し、全員で協力してねらいの実現を目指す活動の時や場を確保することが必要です。実践後は、活動を振り返らせながら、さらなる活動への意欲を高めます。また、活動の歩みを学級通信や教室掲示などに残すようにします。

3 係活動を活性化させる

係活動は、学級内の仕事を自主的に行う活動であり、子どもたちの力で学級生活を豊かにすることをねらいとしています。

子どもたちの自主性や自発性を養ううえでの中学年における係活動のポイントは、次の3点です。

- ・当番的な活動の経験を生かして創意工夫を加えて取り組めるようにする
- ・協力して計画的に活動できるようにする
- ・係活動を通して学級集団の一員としての自覚をもつことができるようにする

中学年の時期に、自分たちで考え活動する経験を積み重ねることが重要です。このことは、高学年での児童会活動への意欲にもつながります。

① 係活動の楽しさに気付かせる

当番活動と係活動それぞれの特徴を指導しながら、発意や発想を活かして係活動を工夫させていくことにより、学級生活の充実・向上に結びつくことに気付かせます。他の学級の係活動の様子や係活動に関する図書を紹介し、多様な係を設置し活動できることに気付かせることも考えられます。

なお、当番活動には以下の特徴があります。

- ・学級生活を維持していくための活動であり、

学級を運営していくうえで必要不可欠なもの・どの子どもも同じように取り組み、活動の進め方を学ぶもの

② 設置する係について話し合う

学級内の係を当番活動へ移行したり、統合したり、あるいは新設したりするなど、設置する係を見直す活動を取り入れます。「学級のみんなが楽しくなる」「学級のみんなに役立つ」「学級目標を達成するために効果的」など、その係を設置することのよさや、学級のみんなへの提案の仕方などを考えさせることにより、係活動への意欲が高まります。

なお、係活動を充実させるため、以下の4点も話し合いの視点として重要です。

- ・毎日のように活動できる内容か
- ・創意工夫ある活動を期待できるか
- ・数人で活動できる設置数か
- ・一人一人の活動量が確保できる活動内容か

③ 活動の様子を理解し合う場を設ける

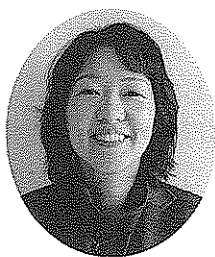
係活動の連絡や発表の機会を帰りの会などに設けることが考えられます。また、教室内に係の活動コーナーを設けながら、各係の活動内容を分かり合う場を設けることも効果的です。

さらに、活動の状況により各係の活動計画や悩みなどについても話し合い、活動内容の改善を図る場を設けることで係活動の活性化につながります。

4 おわりに

本稿で述べた話し合い活動と係活動については、学習指導要領の解説に発達段階に即した指導のめやすが記載されています。低・高学年についてはそちらを参照してください。

特別活動は、子どもたちの実践を前提とし、実践を助長する指導が求められます。子どもたちの発意・発想を重視しながら、「なすことによって学ぶ」特別活動の方法原理を大切に指導しなければなりません。まずは、子どもたちが、身近な問題に気付き解決しようと実践することが何より大切です。



保健室で教育相談をする際に心がけたいこと

岩手県立総合教育センター

研修指導主事 古川 制子

質 問

保健室には、様々な問題を抱えた生徒や悩みや不安を抱えた保護者が訪れます。

養護教諭としてどのようなことを心がけて対応すれば良いでしょうか。

また、校内で連携をとる際の留意点にはどのようなことがあるでしょうか。

(中学校養護教諭)

1 「あなたのことを思っているよ」

というかわり

保健室を訪れる生徒達は、家庭や学級や部活動での悩みを抱え、様々な信号を発しながら来室します。甘えたい雰囲気がいっぱいの生徒、自分の話を最優先に聞いて欲しい生徒、ふてくされ気味の生徒。ダイレクトに今の気持ちを話してくれることもあれば、体調不良の訴えをとっかかりに、時間をかけてポツリポツリと話し始める場合もあります。彼らの保健室での表情は、学級の中や部活動での表情とも違って、自分の弱い面を出していくことが多いのではないのでしょうか。

一人で来室する場合と、集団で来室する場合では、その表情は異なります。集団での来室は「僕を見て、私をかまって」という思いがみえてきますが、一人の来室ではこちらが思いがけない深い悩みを抱えてくることが多いです。彼らとかかわるには、とてもエネルギーが必要です。

中学校の保健室で、「先生、もっと俺のこと、

ちゃんと心配してちょうだい。」と、ある生徒に言われたことがあります。彼はとても素直に自分の気持ちを表現していきました。生徒は養護教諭に、評価抜きに自分を分かってくれる存在を求めているように思います。そのときだけでなく、後日、「あの後どうなった?」「その後大丈夫?」と声をかけ、心配していたよというメッセージを伝えるようにします。「あなたのことを心配しているよ。」「あなたのことを思っているよ。」というメッセージが伝わり、生徒が自分のことを常に心配し、思ってくれる人がいると感じられることは、安心感やエネルギーを高めることにつながります。

また、生徒の話聞くときには、すぐに指導したり注意したりするのではなく、生徒の枠組みで生徒の話す内容を理解したり、気持ちを汲み取ったりします。興奮しているときは時間をおいたり、涙を流しているときには背中をさすったり、頭をなでたりして気持ちを落ち着かせてから話を聞き始めます。

教師が自分の価値観や経験をいったん脇において、その生徒の目線に立って話を聞いてみることで、生徒の話した言葉や、とった行動の意味を理解できることが多くあります。それができたとき、生徒との距離感が縮まります。

「なおそうとするな、わかろうとせよ。」と言いますが、なおそうとすればするほど、生徒との距離が遠くなり、分かつとすればするほど距離が近くなると実感しています。

また、問題を抱えた生徒は、自尊感情が低下

している場合が多いので、かかわる際はほめることがポイントとなります。ほめて欲しいことをキャッチして、ほめて欲しいときにほめます。悩み苦しんでいる中でも、今できていること、やれていることにスポットを当て、そのできている部分を少しずつ広げていきます。できている部分を見つけていく、例外探しの作業が大事です。できないことではなく、今やれていることの再確認が、自信や自尊感情を高め、解決への見通しをもつことにつながります。

2 保護者の立場に立って、

できていることを大切にす保護者への対応

保護者の方と対応するときにも、心を込めて聞くことが大切です。生徒への接し方についての不安や学校の対応への不満に対しても、すぐにアドバイスをしたり、言い訳や否定をしたりするのではなく、まずは、保護者の立場に立って傾聴します。保護者が、そのときに感じている自分の思いや気持ちを、十分に話すことで気持ちが整理され、自分の中で答えを出しやすくなります。これまでの自分自身のあり方や、子どもとのかかわりを振り返る中で、「これでいいんだ。」「こうしてみよう。」と、答えが導き出されていくといえます。

聞く立場の者は、保護者の立場に立って話を聞いて、これまでの苦労や頑張りをねぎらい、できていること、頑張ってきたことなどに光を当てていくことを大切にします。

「お母さん、こんな大変な中でよくもちこたえてきましたね。」「お母さん、どうしてそんなに頑張れるんですか？」などと聞いて、今やれていることを引き出し、保護者の元気を高めることが重要です。

また、保健室から見えている生徒の良さを伝えることも大切です。「〇〇を手伝ってもらって、とても助かりました。」「作業が丁寧でびっくりしました。」など、かかわりをとおして感じたプラスの情報を伝えます。日頃から、できるだ

けたくさんの良さを伝えることが、保護者とのより良い関係性の構築につながります。

3 過剰負担にならない校内での連携

問題を抱えた生徒の指導・援助のために欠かせないのが、担任をはじめとする校内での連携です。担任、教科担任、学年主任、生徒指導主事、教育相談担当、部活動顧問、養護教諭など、それぞれの立場から見えている情報や判断を伝え合うことで、生徒に対する見方やとらえ方を広げることにもつながります。

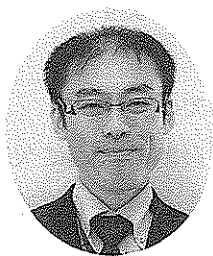
養護教諭は、心身の疾患や発達障がいからの視点から、専門機関の受診を視野に入れ、積極的な提言をしていくことが重要です。また、保健室は生徒が自分の弱さを出せる場所であり、それを敏感にキャッチできる場でもあります。今の生徒の状況や気持ちを、校内職員へ代弁しつつ、養護教諭の立場から客観的な意見を示すことは、多面的な判断や、具体的な対応を検討する上で重要です。

対応を考える際は、これまでやっていないことで、これからやれそうなことを考えます。その際、担任に過重な負担がかかったり、それぞれが無理をし過ぎたりしないように、適切な役割分担ができているかがポイントとなります。

保健室は、生徒だけでなく、教師の疲れや負担などの、困り感をキャッチしやすい場でもあります。担任の日頃の頑張りに対して、ねぎらいの言葉をかけたり、また、頑張りすぎに対してはブレーキをかけたり、役割分担の見直しなどをすることが必要です。

4 おわりに

保健室という場から、「あなたのことを思っているよ」というメッセージを伝え続けることが大切です。やがてそれが、生徒や保護者や担任にも届き、信頼関係の構築につながるのではないのでしょうか。



特定の場面で話すことができない 選択性緘黙(場面緘黙)の症状がある児童生徒の指導・支援

岩手県立総合教育センター

研修指導主事 梅野展和

質問

学校の中で、まったく話さない子どもがいます。テストでは正解を書いているので、学習内容は理解しているようです。話の内容が分からない、聞き取ることができないというわけではないようなのですが、ことばを発してくれません。どのように接したらよいのでしょうか。

(小学校 通常の学級担任)

は話すことができるので、わざと話さないのではないかと思われることが多いのですが、不安や緊張があるために話すことができないということを理解することが大切です。

学校教育法の中では、情緒障がいの一つとして、通級による指導の対象となっていますが、通級による指導だけではなく、日常での指導・支援により本人のコミュニケーション力を高めていくことが大切です。

1 選択性緘黙(場面緘黙)とは

家庭では話しているのに、学校等の特定の場面で話すことができない状態を選択性緘黙(せんたくせいかんもく)と言います。場面緘黙とも言います。家庭では問題なく話していることが多いため、学校からの連絡で初めて知って驚く保護者もいます。このような児童生徒は、声帯や舌、唇等の発音器官に器質的な問題がなく、ことばの理解にも問題がないにもかかわらず、特定の場面で継続的に話すことができないのです。

選択性緘黙には、

- ・多くは2～5歳までに表れる。
- ・出現率は0.2～0.5%程度。
- ・男子より女子の方が多く表れやすい。

という特徴があります。児童によっては、全ての場面で話すことができなくなったり(全緘黙)、体を思うように動かすことができなくなったり(緘動)することもあります。また、表情も硬く、笑うことすらできなくなることもあります。

選択性緘黙がある児童生徒は、ある場面で

2 不安の状態を知る

選択性緘黙がある児童生徒は、家庭や親しい人が近くにいる場面だと話すことができたり、休み時間だけは話すことができたりするなど、一人一人異なった様子が見られます。また、活動する内容によって、本人が不安に感じる度合いは様々ですので、どのような場面でどのくらい不安に感じているかをチェックします。

自分が不安であることを話すことは難しいものです。児童生徒に不安なことを聞くときには、安心できる人や場面など環境を整えた上で、無理をしないようにします。

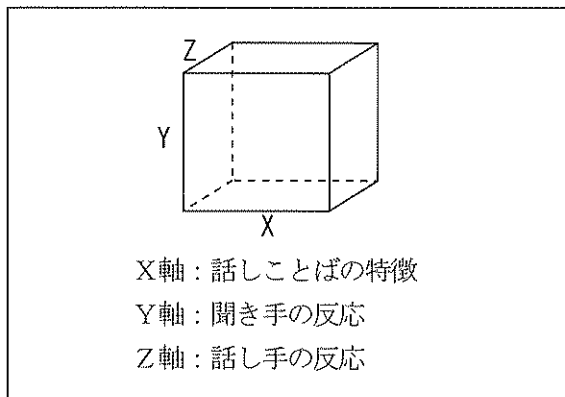
ポイント

選択性緘黙がある児童生徒自身がその場面をどのように感じているかということと、行動などに表れる困難さの度合いが一致しない場合があります。

児童生徒が負担に感じない範囲で、児童生徒自身が感じている不安の度合いについて確かめることが必要です。

3 適切な環境を整える

下の図は、「ことばの問題の図式」(W. ジョンソン) と言われるものです。



【図 ことばの問題の図式】

箱の大きさは、ことばの問題の大きさであり、X軸、Y軸、Z軸の大きさに決まります。X軸の値は変わらなくても、Y軸やZ軸を変えると、箱の大きさは大きくなったり、小さくなったりします。

このことは、X軸の値が大きいような、声を出して話すことが困難な状態であっても、周囲の聞き手が児童生徒の困難さを受け入れて、Y軸の値が大きくなるようにすれば、箱の大きさは大きくなるはずであることを表しています。

選択性緘黙がある児童生徒に対して、とくに次のようなことをしないよう、周囲がみんなで気をつけるようにしたいものです。

- ・話さないことへ過度のプレッシャーを与える。
- ・物でつる、強要する、脅かすなどして話をさせようとする。
- ・話さないことを責めたり、話さないことに注目を集めたりするなど本人が嫌がることをする。

ポイント

うなずきなどのことば以外のサインを使う方法を認め、声を出すことを強要しないといった、周りの配慮が必要です。

4 わかり合う関係を深める

話をするためには、まず、自分の思いや考えを伝えたいと思うことが大切です。選択性緘黙がある児童生徒が話すことができないのは、話したくないのではなくて、話す時に感じる不安があるからなのです。さらには、声を出さなければならない時に声が出ないことで、児童生徒が自分を否定的に感じているかもしれないということを理解する必要があります。

声を出して話すということにこだわらず、自分の思いや考えを伝えたり、相手と通じ合うことができたりすることに関心を向けさせるようにします。声を出して話すことは、コミュニケーション手段の一つです。それは、便利で日常的な手段ですが、コミュニケーション手段はそれだけではありません。大切なのは、思いや考えを伝え合うことができることです。声を出して話すことにのみこだわることにより、わかり合う関係を損ない、コミュニケーション自体ができなくなってしまうのです。

声を出して話すことが困難だとしても、周りから話しかけなくてよいということではありません。話すことを強要したり、声を出して答えることを求めたりするということなく、コミュニケーションの楽しさや、有用性を感じることができるよう働きかけをすることが大切です。

ポイント

児童生徒と教師との強い信頼関係が基盤となります。温かいまなざしで見守り、ことばによらない励ましをする関係の中で、自分の思いや考えが伝わり、楽しくわかり合うことができたという経験を積み重ねることが大切です。

編集後記

- ◇ 「教育研究岩手」は、昭和39年7月の創刊以来、その時々々の岩手の教育課題を取り上げ、広い視野から論説、解説をいただくとともに、県下のすぐれた研究・実践の交流の場としてまいりました。
- ◇ 小学校は平成23年度から、中学校は平成24年度から、いよいよ新学習指導要領が全面实施されます。新しい学習指導要領の理念である「生きる力」の意味や必要性について、私たちは十分に共通理解する必要があります。特に、岩手県では学習面における基礎・基本として、全ての子どもたちに基礎的な知識や技能、必要な能力を確実に定着させることを目指しています。
ただ子どもたちの学力向上を理念だけで語るのではなく、具体的に何をしたらいいのか追究していくために、第98号の特集テーマを「岩手が取り組む学力向上」としました。
- ◇ 特集の論説として、学校教育室の佐々木教育次長に、本県児童生徒の学力の実態と授業改善の方策を執筆していただきました。
佐々木教育次長は、全国学力・学習状況調査、岩手県学習定着度状況調査、高校入試成績等の各種具体的データを提示し、「私たちは、改めて『分かる授業づくり』に取り組む必要がある。」と述べています。さらに、中学校以上では「『自学ノート』だけの家庭学習からの転換」や「授業と家庭学習の連動」を推奨しています。
また、佐々木校長先生、川村校長先生、畠山校長先生からは、それぞれの学校の家庭学習や校内研修の取組について、自校の実践を具体的に紹介していただきながら解説していただきました。各学校が、自校の実態に合わせた取組を行っていく際の参考にしていきたいものです。
- ◇ 最後に、本号を刊行するにあたり、ご多用中のところ快く執筆をお引き受けいただき、玉稿を賜りました皆様に、衷心より感謝申し上げます。また、カメラレポートの掲載に際しまして、全面的なご協力及び貴重な資料をご提供いただきました、岩手県立宮古恵風支援学校の関係各位に、衷心よりお礼を申し上げます。

教育研究岩手 第98号

平成23年1月13日 印刷

平成23年1月14日 発行

発行 岩手県立総合教育センター

〒025-0395

岩手県花巻市北湯口第2地割82番1

電話（代表）0198-27-2711

ファクシミリ 0198-27-3562

<http://www1.iwate-ed.jp/>

印刷 株式会社正和印刷

中扉の写真

ア

イ

ア：花巻市立西南中学校

イ：宮古市立赤前小学校

ウ

エ

ウ：岩手県立総合教育センター

エ：岩手県立総合教育センター

裏表紙の写真

ア

イ

ア：大船渡市立蛸ノ浦小学校

イ：盛岡市立太田幼稚園

ウ

エ

ウ：岩手県立花巻農業高等学校

エ：岩手県立花北青雲高等学校

教育目標

児童生徒一人ひとりの可能性を伸ばし、明るく、強く、心豊かに生きる人間を育てる。

岩手県立宮古恵風支援学校

生徒数81名（小学部16名・中学部22名・高等部43名）学級数20 職員数68名



徒競走（運動会）



入学式



農業の作業学習（高等部）



勇壮な太鼓（学習発表会）



現場実習（高等部）



プール掃除（小学部・高）



作業学習・陶芸（中等部）



朝のランニング（高等部）



野菜の収穫・生活単元学習
（小学部・低）



数学の学習風景（中等部）

宮古恵風支援学校校歌

作詞 伊藤 鮮市
作曲 鷹背 洋一

一、宮古の北の崎山の

ひらけし丘にはまゆりの

宮古恵風 ここに立つ

ともよ目を上げ胸をはり

学びの道に励みなん

二、海を近くに小松原

めぐるあたりはまゆりの

宮古恵風 ひかり満つ

ともよ明るくたくましく

自立の道を歩みなん

岩手県立

宮古恵風支援学校

〒027-0097

岩手県宮古市崎山5番88号

TEL(0193)63-0400

FAX(0193)64-3617



School Sketches

